586
307

*0003430000*

0003430-000

５８６－３０７

# 大衆は動く

大山郁夫・著

アルス

昭和５

ABA

大衆は動く

# 大衆は動く

大山郁夫著

ARS

586-307



# 著者の覺え書き

◇

舊勞働農民黨の解散以後、我々全國幾萬の舊黨員、および我々を支持する更に廣汎なる大衆の熱烈なる關心の焦點は、光輝ある鬪爭歷史を持つ我々の陣營を、日常不斷の果敢なる鬪爭を通じて奪還し再建することの上に置かれてあつた。それはもとより、一朝一夕に成し遂げ得られるべき仕事ではなかつた。我々がその目標に到達し得るまでには、我々は尙ほ、益々猛烈に荒れ狂ふ反動の嵐を衝いて、あくまで不屈不撓に苦難の行進を續けなければならなかつた。

今玆に一瞬間立ち止まつて、その頃から今日に至るまでの、我々の戰ひの跡を振返つて眺めるとき、大體次のやうな事象の連鎖が、變轉窮りなき幻影のやうに、我々の追憶の上を掠めて通り過ぎるのである。

◇

かの三・一五事件の直後、忘れもせぬ一昨年の四月十日に、舊勞働農民黨が田中反動內閣の兇手によつて解散を强制せられるや、我々は卽時萬難を排して新黨準備會を組織し、約九箇月

に亙る惡戰苦闘の後、年末に及んで勞働者農民黨の結成を試みた。すると、田中反動内閣は、又もや持ち前の蠻力の限りを盡くして、その結黨大會を徹底的に蹂躙した。かくて我々は再びしたゝかに打ちのめされて、ドウとばかりに大地に倒れたやうな羽目に陷つた。

我々はしかし、忽ちガバと起きあがつて、政治的自由獲得勞農同盟の旗の下に殘勢を結束して、ジクザクを極めた難路の上を、尙ほもひたむきに戰ひ進んだ。無論支配階級から絶間なく發射される彈壓の砲火は、初めからその勞農同盟の上に集中された。殊に四・一六事件以後に及んでは、その追擊がいよ〳〵急となつた。我々は今度といふ今度こそは、矢庭に底知れぬ深淵に突きおとされて無限の闇黑裡を彷徨するが如き感を懷かしめられた。

だが、それも一時であつた。舊勞働農民黨時代以來の戰闘的傳統によつて養はれて來た我々は、到底永くさうした境地に雌伏したまゝでゐるには堪へなかつた。加ふるに、刻々强化して底止する所を知らない支配階級の攻勢は、戰闘的左翼勞農大衆の躊躇なき蹶起を促し立てゝ已まなかつた。我々は最早、よし最後の一戰を賭しても、この際一條の血路を切開いて、大衆闘爭の戰野――我々の本來の活動場面――への決然たる再進出を圖らなければならないとの衝動を痛感せずには居られなかつた。そして、そのために陣營の轉換を策することも、我々に取つては、當面の客觀的狀勢との聯關に於て明かに必然不可避の條件のやうに見られた。



私たち三人――上村・細迫・大山――が、大膽にも『新勞農黨樹立の提案』(『附錄一』參照)を起草してそれを全國の同志たちの間の大衆討議の前に置かうと決意したのは、まさしくかゝる狀勢の下に於てゞあつたのだ。そして、その提案は遂に、昨年の八月八日を期して、私たちの手を離れて各地に發送された。全國の同志たちは忽ちそれに響應して奮ひ起ち、一齊に結黨準備のための闘爭を至るところに卷き起した。それは實に我々の陣營の運命の岐れ目の上に立つ、生死の戰ひであつた。

幸ひにも、全國の同志たちのさうした息づまるやうな大努力は間もなく美事な成果を以て酬ひられるに至つた。即ち、現在のわが勞農黨は、提案發表後約三箇月目の十一月一日・二日に、大衆歡呼のうちに堂々と結黨大會を擧げ、それによつて、待ちに待たれた我々の陣營の再建が勝利的に完成されたのである。我々の闘爭史上に一重大時期を劃するその日こそは、わが國の戰闘的勞働者農民によつて、限りなき愛着を以て永久に記念されつゞけて行くであらう。

◇

かくして大衆の面前に公然とその巨姿を顯すに至つたわが勞農黨は、一面に於ては雨に嵐にわが戰闘的左翼の陣營を固守して來た大衆の、衷心の要求の結晶であつたと同時に、他の一面に於ては刻々進展して已まなかつた客觀的狀勢の促迫の必然的産物であつた。從つてわが勞農

黨は、當然にもその結黨大會に際して、勞働者農民の戰鬪的同盟としての、それ自體の本質に應じ、常に自ら全民衆の先頭に立つて支配階級の攻勢に對し決死的鬪爭を展開すべきことを誓つて、その斷乎たる決意を高らかに中外に宣した。そして特に『黨が公に樹てる旗』であるところの綱領の上には『勞働者・農民・無產市民・その他一切の被壓迫民衆の日常利益の擁護伸張』『勞働組合・農民組合の擴大强化』『無產階級戰線の統一』『全被壓迫民衆の政治的自由の獲得』の四大項目を輝やかしく書き記して、今後の全活動の方向を明確に表示した。（『附錄二』參照。）

かゝる鬪爭目標の下に大衆的日常鬪爭を效果的に遂行し得るためには、わが勞農黨は、何よりも先づ、勞働者農民の戰鬪的同盟としての自己の組織の擴大强化を圖らねばならぬ。と同時に、わが勞農黨が自己の組織の擴大强化を實現し得るためには、その大衆的日常鬪爭の不斷の進展に努力しなければならぬ。これらの二つの要因は一にして二であり、二にして一である。

——わが黨は、かうした認識の下にその結黨以來の全活動を展開し、特に當面の客觀的狀勢との聯關に鑑みて、資本家・地主の政府によつて着々强行されつゝある產業合理化政策および帝國主義戰爭準備に對する大衆鬪爭の上に全黨の主力を集中して來た。從つてわが黨は、一方に於ては資本家・地主の政府への果敢なる抗爭の手を寸刻も緩めないと同時に、他方に於ては現



在帝國主義ブルジョアジーの侍女としての役割を完全に果たしつゝある社會民主々義政黨および組合幹部に對しても假借なき攻擊をも續けて來たのだ。

最後の一點は殊に、現在の瞬間に於て全無產大衆の注目の的となつてゐるところの、帝國主義ブルジョアジーの新武器としての濱口內閣の勞働組合法案に對するわが黨の態度と、諸他の無產黨のそれとの對照の上に、最も鮮明に表象されてゐることを、人は容易に看取するであらう。

◇

かくして、『新勞農黨樹立の提案』以來約一箇年、結黨以來約十箇月を經過して、今やわが黨の組織がます〳〵鞏固となり、わが黨の鬪爭力がいよ〳〵充實し、わが黨と大衆との結びつきが一段と緊密の度を加へるやうになつて來た瞬間に際して、わが黨は突如として一の重大なる空前の試錬に直面するに至つた。

見よ！　最近に至つて特に急テンポを以て前進するやうになつた昨年末以來の世界經濟恐慌を背景としての現下のわが國の不景氣の無限の深刻化、殊に餓死線上を彷徨する大失業者群の刻々の增大と農村の未曾有の窮迫、それにつれて層一層狂暴の形相を呈するやうになつた支配階級の攻勢を！

かゝる狀勢によつて急激に促迫されるに至つた大衆的抗爭の拔き差しならぬ眼前の必要は、わが黨の政治的任務の重要性を加速度的に增進した。

かくて、今や、わが黨は、益々固く大衆と腕を組みかはし、大衆の旗を高く陣頭に揭げて、全力的に支配階級の堅壘に肉薄しようとしてゐるのだ。わが黨は、この絕體絕命の鬪爭を輝やかしき勝利にまで戰ひ拔くことによつて、勞働者農民の戰鬪的同盟としてのわが黨の存立の無產階級的意義を、益々顯著に發揚することが出來るであらう。

◇

見よ！　わが勞農黨の指導下に政治的自由獲得鬪爭の颯爽として展開するところ、そこに大衆の旗は常に進む！

◇

本書の內容は、『新勞農黨樹立の提案』の前後から今日に至るまでの一期間に於て著者が發表した諸論文から成るものである。著者は日常不斷の鬪爭の過程に於て、滿身に戰塵を浴びつゝ得られる限りの如何なる寸暇をも利用して各篇を書いた。この意味に於て、本書もまた、前著『嵐に立つ』(鐵塔書院發行)と同樣に、一部の陣中作であり、しかも順序からいつて、直接にそれに續くものである。一切が、わが陣營の刻々の實踐の基礎の上に書かれた生々しき鬪爭記錄



であり、當面の客觀的狀勢との聯關に於けるわが勞農黨の立場および使命の實證的闡明であり更にまた大衆鬪爭の前途の飛躍的進展の豫想の下になされた、全被壓迫大衆への聲高き呼び掛けである。

尙ほこの機會に、次の若干言を書き記して置くことを許されたい。卽ち、本書の第二編を構成する『民主々義批判』の一論文は、讀諸者君が容易に看取されるであらう通りに、一片の未完ものである。著者はそれの起稿に當つて、わが勞農黨の政治的自由獲得鬪爭の理論的基礎を究明しようとの企圖の下に、先づブルジョア民主々義および社會民主々義を分析し、批判し、更にプロレタリアー・デモクラシーにまで論及しようとしてゐたのであるが、時間の餘裕にめぐまれなかつたゝめに、わづかにブルジョア民主々義の概觀を了へたばかりで、筆を擱かなければならなかつたのだ。で、著者は、今後の何等かの機會に餘暇を得た場合には、必ずそれを訂正補修して、當初の計畫を完全に實現したいと考へてゐる。

更にまた、本書の第四編に、著者が各處で試みた演說のうちから、數篇を擇んで收錄したのは、別に他意があつてのことではなく、たゞわが黨の運動に伴ふ一種の『空氣』を、——否、せめてその僅かばかりの一斷面だけをなりとも——さうした經驗を全然持合はさない人々に彷彿せしめようとの、著者の小さき希望から來たものに外ならないのである。

◇

著者は、著者の愛情の籠つたこの小さな一卷が、過去および將來の闘爭に於ける既知および未知の幾多の同志たちの親切なる手に取上げられるであらうことを切に希望しつゝ、心からの熱意を以てそれを世上に送るものである。

一九三〇・七・二一

大山郁夫



# 目次

## 第一編　勞農黨の旗の下に


新勞農黨樹立の提案まで……三
新勞農黨樹立の時期に直面して……三一
勞農黨の樹立に際して同志へ！……六〇
勞農黨の政策の必然性……六七
立候補に際して……七九
總選擧戰の渦中から……八三
選擧闘爭から議會闘爭へ……八七
第五十八議會の印象……一一五


## 第二編　民主々義批判

一、ブルジョア民主々義批判……一二九
二、デモクラシーの概念——その批判的解說……一三四
三、デモクラシー思潮の生成發展の史的背景……一四七
四、反抗思想としてのデモクラシー……一五〇
五、『自然法』および契約論……一五七
六、ブルジョア革命の精神……一六五
七、ブルジョア國家生活に於ける友愛……一七四
八、自由と平等——矛盾する二つの命題……一八二
九、多數決主義と少數者支配……一九三

## 第三編　ブルジョア社會の諸斷面

英雄的階級・階級的英雄……二〇五
社會民主々義者の夢を一笑に附して……二二〇
金解禁と議會解散問題の交錯……二三四
若き新聞記者諸君へ！……二四九



社會民主々義者の敗北！……二五一

## 第四編　演說集

新勞農樹立の歷史的意義……二五九
同志山宣の死と吾々の決意……二九一
大衆の行進を見る……三〇二
東京第五區の勝利は大衆の勝利だ!!……三一九
ブルジョア議會の最初の印象……三三〇
大衆の審判を待つ……三四四

## 附　錄

新勞農黨樹立の提案……三五九
勞農黨の宣言・綱領・政策……四一九

# 第一編

## ★ 労農党の旗の下に

# 新勞農黨樹立の提案まで

## 一

八月八日、私たち三人――同志上村、細迫、それに私自身を加へて――は、私たちの名に於て、『新勞農黨樹立の提案』を發表した。その大體の趣旨は、翌九日のブルジョア諸新聞に掲載された。

尤も、ブルジョア諸新聞に出たものは、文字通りに『大體の趣旨』にすぎないものであり、無論、提案の全意義をつくしたものではなかつた。同樣に私が今茲でその提案について言はうとしてゐることもまた、よし幾分か、より詳細に亙ることが出來ようとも、しかしそれにも矢張り當然のことゝして或る限度がおかれてある。で、結局私たちは、提案全部の內容を知らうとする人々に向つては、提案そのものを讀んでいたゞきたい、と言はなければないのだ。

何れにせよ、私たちのその提案は、全國幾萬の同志たちに向つての呼び掛けの形で發表されたものである。それらの同志たちは、舊勞働農民黨時代以來、雨に嵐に、私たちと固く腕を組みかはし、敵の堡壘から絕えず浴びせかけられて來る彈壓の砲火の下を、互に生死を誓ひつゝ

歩みつゞけて來た人々である。從つて私たちは、少くとも外觀上は非常に急角度を描いた轉向の如く見られ得る行動を提議するに當つては、誰よりも先づ、第一にそれらの人々に、その計畫を示さなければならない義務を感じるのである。

だが、それと同時に、私たちのその提案は、それらの人々以外の、更に廣汎なる範圍に亙る戰鬪的勞働農民大衆に對してもまた、一箇の重大關心事であらねばならぬ。もとより、該提案に盛られてある全内容は、私たちが、現在の左翼戰線にとつて、唯一の正しき局面打開の道だと考へてゐるところのものに關聯してゐるものである。そして今日、左翼戰線の一進一退について心から喜憂を共にしてゐるものは、單にわが左翼陣營内のものだけに止まらず、右翼・中間派の陣營内および一般無産市民層の間にも非常に多く見られ、且つ益々その數を加へて行かうとしてゐる。この點から、私たちは、私たちが同志の人々に宛てた提案を、更に廣く一般的に全國の戰鬪的大衆にも示して、その忌憚なき批判を求めたいとの切なる希望を懷くに至つた。それゆゑ私たちは、該提案をそれらの戰鬪的大衆に向けたパンフレットの形に於て、市場へ出さうと企てゝゐるのである。

で、私は今、本文に於ては、絶對に必要な場合以外、出來得る限り、そのパンフレットと重複するやうな言ひ方を避けつゝ、本文の讀者諸君のために、主としてその提案に至るまでで經



過およびそれに附け加へて提案そのものゝ内容を、極めて簡明に記述しようと思ふ。

## 二

顧れば、昨年末、わが新黨準備會は、『勞働者農民黨』の結黨大會を擧げた際に、十五項に亙る行動綱領を提げてその前途の鬪爭目標を明示したが、忽ち支配階級のために解散を强制され、延いて『勞働者農民黨』も同時に不成立に終つた。

それと共に、その結黨大會に參加してゐた全國各地からの數百の代議員たちは、口々に『工場へ！農村へ！』のスローガンを叫びかはしながら、各自それぞれの陣地に歸還し、爾來、合法政黨結成の意圖を一擲して、政治的自由獲得勞農同盟の新鬪爭形態の下に固く結束して戰ひ進むことを誓つた。それは主として、その時までに『プロレタリアートの黨は唯一つしかあり得ない』といふ一根本原則を新たに學び取つた戰鬪的勞農大衆の熱烈なる要求を反映したものであつた。

その間に、例の水谷長三郎君一派の卑怯なる裏切り的行爲があつて、我々に齒ぎしりを嚙ましめた。次いで同志山宣の悲壯なる横死が起つて、我々の毛髮を逆立たしめた。更に息をつぐひまもなく、四月十六日の嵐が我々の左翼陣營に襲ひかゝり、再び幾百の精鋭鬪士を奪ひ去つて、我々の眦を決せしめた。

かゝる事變の頻發のために、我々の行く手は、一時、暗澹たる密雲に鎖ざされたかの觀があつた。だが、全國各地に於ける我々の同志たちは、それにも屈せず、否、それがために益々その闘志を鋼鐵の如く鍛ひあげつゝ、層一層その背後の戰闘的大衆との提携を緊密にして、一圖に闘爭の展開と陣營の恢復とのために、英雄的に行動しつゞけて來た。

それにも拘らず、東京・京都・大阪の三都に於ける同志山宣の告別式、勞農葬、追悼會、およびその前後に全國各地に展開された市町村會選擧闘爭を最高潮期として、それ以來わが勞農同盟の闘爭は、忽ちハタと障碍物に行き當つて、各方面に於て二進も三進も動きが取れないやうな形勢を現出するに至つた。

全國の同志たちは、『これではならない』と、あらゆる手段を講じて、ひたすら前途への通路を打開しようと試みた。私たちも及ばずながら、それらの勇敢なる同志たちの驥尾に附し、あらゆる闘爭場面に進出して、精根のつゞく限り惡戰苦闘を共にした。だが、我々は我々が死に物狂ひになればなるほど、我々の手足が益々緊縛されて行くのを感じた。

『何故に？』——

## 三

私たちは次第に、私たち自身に向つて、この疑問を發せざるを得なくなつた。



『何故に？』——我々がこの疑問を提起する各瞬間に、まづ我々の腦裡にピンと來るのは、四・一六事件である。

四・一六事件は、全左翼戰線の上に、今後の或る期間に亙つて容易に恢復し得られさうには思へないやうな、慘憺たる被害狀態を現出した。我々は到底、燃ゆるが如き憤激なしに、それを顧ることはできない。だが、事實はあくまで事實である。だとすると、それが如何に我々の意圖に反することであるにもせよ、我々は決して、それに對して我々の眼をつぶつてはならない。否、いやしくも我々が我々の現實の行動を如何なる幻覺の基礎の上にも置いてはならないとする以上、我々は大膽率直に、その事實を直視しなければならない。一切はそこから始まるのだ。

更らにまた、全左翼戰線の上に一地位を占めて來たわが勞農同盟も、當然のことゝして、それにつれて空前の一大打擊を受けた。殊に、幾多の又と得がたき一粒選りの百戰練磨の闘士たちが、踵を接して我々の陣營からも奪ひ去られた。尤も、それに直ぐ引き續いて、新鋭の氣を負ふ幾多の賴母しき闘士たちが後から後からと出て來はしたが、それにしても、それらは少くとも數の點からだけでも、前者の空位を充たすには遙かに不足であつた。

だが——然り！　あくまで『だが』だ！　——かうしたすべてのことを認めても、しかも尙

ほ他方、我々の陣營に於ける闘爭精神は、決して下火になるやうなことはなかつた。否、それは、一つ一つの試練を經る毎に、益々旺盛に燃えさかつて行くばかりであつた。それに、いはゆる『右翼大衆の左翼化』の傾向もまた、次第に益々顯著になつて行く有樣が、樣々の機會に我々には明瞭に看取され得るやうになつた。それは、それらの右翼大衆の左翼化的傾向が、常に具體的に、我々の陣營に對する彼等の熱烈なる精神的支持となつて現れるに至つたからである。この意味に於て我々は、少くとも我々の陣營の內部の潛在的もしくは可能的闘爭力は寧ろ急速に增大して行つたといふことが出來ると考へてゐる。

それにも拘らず、何等かの具體的效果を期待し得る我々の活動は、我々の必死的努力に頓着なく、段々と行き詰まりの徵候を示すやうになりだした。殊に、大衆的規模に於ける闘爭は、我々の手に依つて遂行することが刻一刻困難さを增すやうになつた。かくて我々は、折角右翼大衆から我々の陣營に向つて與へられる熱烈なる精神的支持を活かして、それを現實の闘爭に組織することすら出來ないやうな狀態に陷つた。それどころでなく、たゞの演說會一つすらが、もはや我々の主催もしくは參加の下に於ては、完全に持てないやうにもなつた。卽ち、我々の演說會が開會後數分にて解散を强制されたり、甚だしきに至つては、開會前に徹底的に蹂躙されたりするやうなことが、最近に及んで益々頻繁に起るやうになつた。しかも我々を最も當惑



させたことは、官憲のかゝる露骨極まる暴壓に對してすら、我々が强力なる大衆的反抗運動を捲き起すことが絕對が不可能になつて來たことである

かくて我々は必然に、『何故に？』の問題に打ッ突かつて行かざるを得なくなつた。

この點に關して、我々は無論、資本家地主の政權に正面から對抗する我々の陣營の地位といふやうな、一般的な根本問題に觸れようとしたのではない。我々はまた、現在我々が直面してゐる勢力關係といふやうな、解り切つた問題を、今更のやうに取り上げようとしたものでもない。我々は具體的に、我々が曾て精力的になし得た活動を今我々に出來ないやうにしたところの、最も直接的な原因を探求しようとしたのだ。

そして、『それは實に我々が現在取つてゐる政治的自由獲得勞農同盟の闘爭形態が現下の狀勢に對する適應性を失つたところから來てゐるのだ』といふのが、我々がこの點に關して究極に到達し得た斷案であつた。少くとも、私たちが見たところは、さうであつた。さうであらざるを得なかつた。

## 四

では、その勞農同盟の闘爭形態とは如何なるものであるか？　それは、わが左翼運動に關心を寄せられてゐる諸君には夙に十分に知られてゐることであるが、しかし私は玆で念のため、

我々の當面の問題に緊密な關係のある二三の要點の輪廓だけをでも次に示しておかうと思ふ。

新黨準備會解散の直後、我々はその解散の際に掲げられた十五項の行動綱領を闘爭目標として我々の眼前に見据ゑ、他方同時に無產階級の刻々緊急の必要に應じて各種の闘爭題目の下に於ける臨機應變の闘爭——カンパニア——を、自由に、敏活に、集中的に遂行し得るために、政治的自由獲得勞農同盟に轉形して行つた。かくして出來たこの勞農同盟は、獨自の指導部をも、さらに組織上正式の如何なる特定機關をも、一切持たない組織——否、組織といふには餘りにも漠然とした外形をしか持たない一個の闘爭體となつて、各種のカンパニアに大衆を動員して行くべきものとして、しかも闘爭の過程に於て發展的に解消して行くべきものとして規定された。かくてこの勞農同盟は、その基礎となつてゐた精神的結合の極めて鞏固なのには非常に不釣合にも、組織としては必然に極めて不十分を條件をしか持たない存在であつた。

かゝる組織形態の下に、勞農同盟は、或は選擧闘爭に、或は各種の暴壓反對運動。各種の自由獲得運動等々に、大衆を動員して一時は相當に活潑に働いたのであつた。

だが、そのうちに、勞農同盟は、その組織形態の故に、次第に急速に轉換し行く眼前の客觀的狀勢に對する適應性を失ひはじめた。何よりも殊に、それは當初の豫期に反して、段々と大衆動員力を持たないやうになつた。特に四・一六事件以後に於ては、勞農同盟は最早大衆的規



模に於ける强力なる闘爭を十分に展開することが出來なくなつて來たことが、次第に明白になりだした。しかもこの事は、さういした大衆的規模に於ける强力なる闘爭こそが、當面最も必要となつて來た瞬間に於て、益々明確に認知されるやうになつのだ。

理由は簡單である。一體、時々刻々のカンパニアのための闘爭體は、大衆的に强力に活動し得る別箇の何等かの恒常的機關の指導下におかれてこそ、始めて敏活にその本來の機能を發揮し得べきものとして理論上規定されてゐるものである。しかるに、當面、勞農同盟を繞ぐる客觀的狀勢は、さうした事の行はれ得る條件を益々徹底的に破壞して行つた。かくして勞農同盟は事實上、時の經過につれて次第に、大衆的規模に於ける强力なる闘爭を展開することの上にも、各種のカンパニアを全一的な政治的自由獲得闘爭に統一集中することの上にも、各地に於ける闘爭を全國的連絡および統制の下に持ち來たすことの上にも、また益々激化し行く彈壓に對して十分なる反撥力のある抵抗運動を捲き起すことの上にも、多くの場合に於て決定的な障碍に打ッ突かつて、よし全國的に見て多少の例外はあるにしても、その全活動の大部分が可なりの停頓狀態に押し移つて行つた。

他方、同一事實の別樣の現れとして、或る特殊の場合に於ては、勞農同盟が或る目的のためにカンパニアの組織を作ると、それが、それ自體を、『闘爭の過程に於て發展的に解消』しよ

うとする勢ひを示す組織たらしめるよりも、寧ろ逆に、闘爭の過程に於て發展的に益々恒常化しようとする勢ひを示す組織たらしめるに至つたやうなことも、屢々不可抗的に起りだした。さうしたことの實例は、市町村會選擧闘爭を契機として最も多く示されたが、殊に大阪市に於けるそれは、この一點に於て、最も典型的のものと見られ得る。卽ち大阪市會選擧に際して、勞農同盟は『市會選擧無產團體協議會』を組織し、それを主體として選擧闘爭を遂行したが、それは闘爭の過程に於て、いつしか今言つたやうな方向への發展を辿るやうになつたのだ。私たちの『提案』は、その經過を詳述してゐる。それは非常に注意すべき現象だと私に思はれるから、私は次にその極々の要點に涉る部分だけを拔萃して揭げよう。

『後者〔大阪市での「市會選擧團體協議會」〕の場合に於ては、それが選擧期間中暫定的に設けた諸機關が、選擧後直ちに解體されずに、次第に地方政黨的特徴を帶びた一箇の恒常的組織にまで發展した。少くとも發展しかけたのであつた。〔傍點は原文による。〕殊にそれは、單純に或る特定のカンバニアの爲の委員會といふには餘りにも恒常的な、しかも餘りにも廣汎な任務を帶びしめられた委員會——それは獨自の指導部といへる程度にまで發展した——を持つた。又持たざるを得なかつた。然り、現實の必要がそれを持たしめたのだ。

卽ち、大阪市會議員の選擧後、大阪の多くの無產團體——社會民衆黨や日本大衆黨の指導



下に身を置くことをいさぎよしとせず、と言つてまた勞農同盟に入ることをも躊躇した多くの無產團體——は、同志小岩井淨の當選を機として、勞農同盟の指導下に大阪地方政治對策協議會を組織した。……

右の場合に、市會を中心に、或はそれを契機に、廣汎なる闘爭を展開する必要のあるといふことには異論があるまい。またそれがためには一定の組織が必要であるといふことも無論である。更にその組織は、出來る限り多くの無產團體を糾合すべきだといふことも當然の主張である。さうすると、その組織は、或は市會議員の統制のための、或は樣々の日常闘爭を展開するための必要なる諸機關として、常任委員會(これは方針を決定する)、それを廣くした協議委員會、その他、調査部、會計部等の諸部門を持つことを、どうしても必要とするのである。で、大阪の同志諸君も、不完全ながら、それらの諸機關を持つた。同地方の同志諸君は、日常不斷の闘爭を遂行するために、どうしても、それを持たざるを得なかつた。

現下の難局を乘り切るためにかくまで惡戰苦闘を現實にしてゐる我々の同志たちの行動を、何人が暴慢にも日和見主義的傾向として漫罵し得るか！』〔傍點は原文による。〕

我々の陣營に特有の具體的問題を、これ以上に展開することは、本文が向けられてある一般讀者諸君には却て迷惑に感じられることであるかも知れないから、それはこの邊で切り上げる

ことにするが、それにしても、右の如き調子で大阪市に起つた事實に類似點を多く持つ諸他の實例が、全國の諸他の地方にも次々と簇生するやうになつたといふ一事實だけは、玆に一言附記しておかれなければならぬ。

## 五

かくて、勞農同盟の活動は、客觀的狀勢の異常に急速なる轉換の下に、その本來の任務の遂行に於て、全體的に行き詰まつてしまつた。もとより私たちは、箇々の場合に於て、或は箇々の地方に於て、幾分例外らしく見える諸現象がないでもないことを知つてゐる。だが、さうした箇々の場合、或は箇々の地方の諸現象も、結局は全體との聯關に於て認識されなければならないものであり、そして、さういふ風に認識されるとき、それらの諸現象もまた、決して全般の行き詰まり的傾向の埒外に立つてゐるものでないことが明かに知られるのだ。

私たちは無論、我々の陣營の過去と絶緣しようとしてゐるものではない。否！　それとは全然反對に、私たちは、我々の陣營の過去が持つ至深至大の階級的意義を正當に評價することが、私たちに課せられたる一の階級的義務だとさへ考へてゐるものである。

即ちまづ第一に、私たちは、昨年末新黨準備會が自らを解體して勞農同盟に轉形して行つたのは、當時の客觀的狀勢の下に於て、我々としては絶對に正しき道を行つたものだと確信してゐる。更にまた、勞農同盟の形態に於て展開された各種の闘爭は、よしその直接の具體的效果がその絶大努力に伴はなかつた觀があつたにせよ、我々の闘爭意志を異常に鍛練し、我々の闘爭經驗を無限に豐富にし、且つ闘爭形態および闘爭技術に對する我々の理解を極度に深めることに與つて大に力があつたものだ。のみならず、本文の筆者の個人的意見では、我々が取つた勞農同盟の闘爭形態は、或る場合に於て、右翼および中間派の大衆をして左翼戰線の闘爭の意義を正しく把握せしめ、延いてそれらの大衆の左翼に對する熱烈なる精神的支持を激成したことの上に於て、我々が他の如何なる闘爭形態の下に於てもなし得ないほどのことを我々にさしめた。少くとも筆者自身は、さう考へることが決して一片の空想でないことを信じてゐる。いづれにせよ、我々が勞農同盟の下に於ける諸般の闘爭から、樣々の非常に貴重なる教訓を學び取つたことだけは、一點疑ひようのない事實である。

だが、當面の問題はそこにあるのではない。それは實に、現在の瞬間に於て全體的に行き詰まつてゐる勞農同盟の前途を、如何にして無產階級全體の利益の立場から見て正當に打開すべきか？　の上にあるのだ。

だが、この問ひに對する私たちの答へが、如何にして新勞農黨樹立の提案の形を取つて現れ

れるに至つたか？　私たちは、次にこの新たなる問ひに答へなければならぬ。

## 六

『勞農同盟の前途を何とかして打開しなければならない』といふ聲は、最近二三箇月間に於て、私たちが至るところで聞いて來たところのものである。『私たちが至るところで――』

かう言つた私の言葉は、幾分修正されなければならぬ。少くとも、次の一句を以て補足されなければならぬ。――『私たちの活動場面は、最近になればなるほど、段々と縮小されて來たのだ。』

事實上、この二三箇月は、私たちは東京及びその附近、竝に京・阪・神の間だけを、あらゆる機會を求めて往復してゐたにすぎなかつたのだ。この事實が持つ意義は自明である。それは一面に於て、他の諸地方に於ける勞農同盟の全國的連絡の下に於ける活動が完全に停頓狀態に陷つた事實を如實に反映してゐるものと見るのが當然だ。――もしくは、私がかう考へることが間違ひであらうか？

假に私のかうした考へが正しいとすれば、――私自身は無論あくまでそれが正しいと確信してゐるのだが――問題は非常にデリケートでもあり、また重大でもある。卽ち前に言つた通り、我々の陣營の內部の潛在的もしくは可能的鬪爭力は、決して減退してはゐないで、寧ろ大



衆の左翼化的傾向、およびその具體的表現と見るべき大衆の左翼支持の熱度の著しき昂進の徵候と併せ考へるとき、それは非常に增大してゐるとさへ言へるのではないか！　ところが、それにも拘らず、我々の現實の活動は極端に行き詰まつて、我々の行進は今や八方塞がりの境地に低迷せざるを得ないやうになつて來たのだ！

かくて最近私たちが直接に接觸して來た一部の同志たちは、かうした局面の打開策のために頻に腦漿を絞るべく、已むに已まれない內的衝動を感じだして來てゐるやうに見えた。屢々私は、『勞農同盟を擴大强化せよ』との聲が、如何にしてそれを實現すべきかの具體案を伴ふことなしに繰り返されるのを聞いた。時としては、『勞農同盟を解散せよ』との絕望的な要求の叫ばれるのをも聞いた。もとよりその要求は、一つの別箇の考慮の上に基礎づけられてゐるものではあるが、しかし私たちがその基礎とされたその別箇の考慮について推測し得た限りに於ても、それは依然として絕望的な叫びに外ならないものであつた。また或る場合には、私たちは、『勞農同盟をして政黨的任務を遂行せしめよ』と欲求する同志たちにも出會つた。しかし、それには大抵、『だが勞農同盟に政黨的形態を賦與してはならない』との制約的な言葉が附け加へられたので、それは結局無理な要求となつた。偶々さうでない場合には、『勞農同盟に政黨としての實質を與へるのも、この際已むを得ないが、しかしそれに黨の名を與へてはならない』

といふやうな、一種の名目論までが唱へ出されさへした。これは明かに觀念論の繃張りの中へ落ちて來るものであつて、しかもその中で『政黨としての實質』云々といはれてゐるその『政黨』なるものが、我々が推測する通りに、必ずしも合法政黨を意味してゐるものでないとすれば、その議論の當然の歸結は無意識的に、或る意味に於てそれを主張する人々の眞の意圖とは全然反對のものとなるのである。

かうした樣々の意見は、當面の具體的問題の實際的解決には何の役にも立たないものゝやうに、私たちには考へられた。しかも、觀察を私たちの耳目のとゞいた範圍内だけに限つて言へば、それらの意見の提出に於てイニシアティーヴを取る人々は、常に我々の陣營の前途に異常の關心を持ちながらも樣々の事情のために現實鬪爭の場面から比較的に遠退いた地位にあつて我々の運動の進路を論究しようとする『机上の戰術家』たちの間に多く見られたことは事實である。

## 七

では、勞農同盟の前途は、その自然の成行に放置していゝのか！

この問題は、私等の見るところでは、必然に、大衆的政治鬪爭は、現在のやうな不振狀態のまゝに放置していゝのか！　といふ點に歸着する。



かくいふとき、我々の眼前には、我々が曾て舊勞働農民黨時代に於て展開した潑溂颯爽たる大衆的日常政治鬪爭の姿がちらつく。だが、過去をして過去を葬らしめよ！　我々は徒に綿々たる懷舊的情緒に浸つて滿足してゐるものではない。それはたしかだ。

しかし、我々が我々の視野をたゞ現在だけに限ることにしても、無産階級の立場からは、大衆的日常政治鬪爭の必要が少しでも去つたとは決して言へない。否！　現在ほど大衆的日常政治鬪爭の必要が痛切に意識される時機は曾てなかつた、といふことこそ眞實中の眞實だ。

我々が幾ら聲をからして『政治的自由獲得鬪爭』を叫んでも、それが刻々不斷に展開されゆく大衆的日常政治鬪爭の上に現實に表現されて行くのでなければ、それは畢竟一箇の空語に終るしか途はないのだ。

いかにも、今日ラストヘビーをかけられたかのやうに着々進行してゐる産業合理化、およびそれにつれて益々深化しゆく不景氣の下に於ける生活苦の果てしなき加重のために、大衆が益益自然成長的に鬪爭的になりつゝあることは、掩ふべからざる事實である。だが、そのことから生ずる必然の結論は、だから我々が意識的に大衆的日常政治鬪爭を組織する必要がないといふのでなくて、逆に、だからこそ我々が意識的に益々大衆的日常政治鬪爭を組織する必要があるといふのでなければならぬ。大衆の自然成長的な鬪爭意志は、絶えず際限なく發展しゆく大

衆運動に動員され組織され表現されて行つてこそ、始めて益々冴えに冴えつゝ尖鋭化し行くべきものである。

だが、勞農同盟は現狀のまゝでは、當面の客觀的狀勢との聯關に於て、最早かゝる大衆的日常政治闘爭を强力に展開することが出來なくなつた。それは、我々が手をポケットに入れたまま我々の頭腦の裡で客觀的狀勢を分析究明しつゝ知り得た結論ではなくて、我々が力の限りをつくしての惡戰苦闘の過程に於て身を以て學び取つた動かすべからざる活事實である。我々がそれを自己に告白することが如何に心苦しくとも、我々は最早、それに對して自己を盲目にしてはならないのだ。

かく考へるとき、我々がこの際我々の積極的努力によつて、勞農同盟の前途の打開策を試みなければならない必要のあることは、既に自明である。で、問題は再び、その方法如何!? といふ一點に集中的に歸着するのである。

## 八

私たちは次第に、私たち自身に於ても、現狀勢下に於て階級的に最も正しいものと認められ得る方法に於て、實現可能の局面打開策を講じなければならない責任を自覺するに至つた。それは遂に、さほども强き現實感となつて私たちに迫つて來だしたのである。

そのうちに、私たちは、京都の同志河上から、卽時この問題の解決に努力する必要はないか? との激勵的意味のこもつた問ひ合せを受けた。それを契機に、私たちの眼から最後の鱗が落ちた。私たちの決意は最終的に作られた。

だが、私たちは同時に、私たちが私たち自身の解決案の作成に取り掛かる前に、尙ほ一つの仕事が殘されてあることを見て取つた。それは、先づこの問題に關する全國の現實に闘爭しつつある同志たちの、およびそれらの同志たちを通じてその背後の戰闘的大衆の、大體の意向もしくは要求を見究めておかなければならないといふことであつた。それはいふまでもなく、私たちは、それらの同志たちおよび戰闘的大衆と共にある時のみ强く、それを離れては絶對に無力であることを、舊勞働農民黨時代以來の私たちの闘爭經驗を通じて、泌々と身に占めて知りつくしてゐるからである。

私はさきに、我々の同志たちの一部の間に行はれて來た諸般の意見の大體の方向について語つた。その際に私は、さうした樣々の意見が當面の具體的問題の實際的解決のためにさして役立たないやうに私たちに考へられたことをも述べておいた。そこで私たちは、更に私たちの視野を廣汎に擴げて、全國に於ける一般の同志たち、およびそれに附け加へてその背後の戰闘

的大衆の——殊に年來不斷に現實の鬪爭の渦中に働きつゞけて來た同志たちおよびその背後の戰鬪的大衆の、同じ問題に對して懷いてゐる眞の要求を探らなければならないと考へて、早速その仕事に取りかゝつた。それに關して、同志細迫は主として關東以北の方面の觀察を擔當した。私たちは更に、大阪の同志小岩井——この同志は像てからこの問題に深き關心を持つてゐることを私たちに打ち明けてゐたのだ——に、關西以西および以南の方面の觀察を委托した。

かくして私たちは、全國に於ける同志たちおよびその背後の大衆の間に、當面の狀勢との聯關に於て、自分自身の政黨を持たねばならないとの要求が、一般的傾向としては、暗々裡にではあるが、それにも拘らず非常に强く動いてゐることを確めることが出來た。

無論、さうした要求は、大體上、『自分自身の政黨への要求』とのやうに、さほども明確に言ひ現されてゐるものではなかつた。だが、それらの同志たちおよび大衆は、現在こそ特に大衆的規模に於ける政治的自由獲得鬪爭を猛烈に進展せしめる必要を痛切に意識し、そしてそのために全力的に鬪爭すればするほど、現在の『勞農同盟よりは一層鞏固な、しかも獨自の指導部——現實に鬪爭しつゝある全國の最も鍛錬されたる同志たちを基礎として築き上げられたる——を持つところの恒常的政治的組織を、それとなく欲求するに至つたやうに見えたのだ。

だが、獨自の指導部を持つ恒常的政治的組織！　それこそまさに、自分自身の政黨そのもの



ではないか！　もしくは、我々のすべてに最も印象の深い一の歴史的聯想によつて同じことを別樣に表現することが私たちに許されるならば、『新勞農黨』といふのが、恰度それと同意語をなすものでないか！

自分自身の政黨を持たねばならないとの切實なる要求！　それは、新黨準備會の解體以來、我々の陣營に於けるすべての同志たちが、自他共に意識的に抑へに抑へることを、お互の階級的義務として意識して來たものである。そして我々は、或る期間は、その小を抑へることに辛うじて成功して來たものである。しかるに、最近——特に四・一六事件以後——に於ける客觀狀勢の急轉の下に、右の根深い要求は、一般の同志たちおよび大衆の間に、再び暗々裡に擡頭するに至つた。といふのは、それらの同志たちおよび大衆の、自己の階級的義務に對する意識が突如として稀薄化したためであるか？　斷じて否！　それは實に、他の階級的義務意識——しかも當面、より緊要なるそれ——である大衆的政治的鬪爭遂行の必要の意識から不可抗的に湧き上がつて來たものに外ならないのである。

## 九

かゝる確信を伴ふ認識を得た私たちは、更に四圍の樣々の狀況から、極度に私たちの解決案

の作成に急がされたので、最近約一箇月の間は、互に額をあつめて討論や協議に沒頭した。

私たちはまづ、廣汎なる範圍に亙る同志たちおよび大衆の間に暗々裡に動きつゝある自分自身の政黨――合法的左翼政黨――『新勞農黨』の樹立への要求が、果して嚴密に當面の客觀的狀勢との聯關に於て階級的に正しいか否かを徹底的に再吟味して、この問題に對する私たちの根本的態度を決定的に確立しなければならなかつた。

この仕事に於て、私たちが最後に到達し得た斷案は、無條件的に肯定的のものであつた。私たちはその理由と私たちの『新勞農黨樹立の提案』の中に述べておいたが、それは大要次の通りのものである。〔卷末附錄參照。〕

田中政友會內閣の倒潰の後を受けて、金解禁および對支政策の二問題の斷乎たる解決を公然聲明して出現した濱口內閣は、產業合理化および帝國主義戰爭準備に向つて、田中軍事內閣以上に、まつしぐらに猛進しようとしてゐる。從つてこの內閣の下に於て、不景氣は益々深刻になり、勞働者・農民・無產市民の窮乏は益々增進し、その政治的自由は益々蹂躙されようとしてゐる。かゝる狀態の下に於て、無產階級はその不平不滿および反抗意識を表明する大衆鬪爭を層一層果敢に進展せしめなければならぬ。



しかも、かゝる鬪爭は、現在に於て、一體どこに進展してゐるか？

全左翼戰線は、特に四・一六事件以後、慘憺たる被害狀態を現出し、そしてその上に一地位を占めて來たわが勞農同盟の活動が、我々の死物狂ひになつての奮鬪にも拘らず、全體として殆ど停頓狀態に陷つてゐることは、我々が自己の體驗によつて、餘りに痛切に知り拔いてゐることである。殊にこの事が、我々の陣營の內部の潛在的もしくは可能的鬪爭力が決して減退してゐるのではなく、寧ろ大に增進してゐるといへる狀態の下に起つてゐることを考へるとき、それは我々に取つて、あらゆる意味に於て非常に重大なる本質を持つものだといへる。

では、諸他のいはゆる『無產黨』の鬪爭振りは如何？

社會民衆黨、日本大衆黨、舊無產大衆系分子、勞農大衆黨、等々の指導部を構成する一切の左・中・右の社會民主々義的幹部は、現段階に於て、陰に陽に、帝國主義ブルジョアジーの意志を、その理論乃至實踐の上に反映して、巧妙なる手段によつて產業合理化および帝國主義戰爭準備に直接乃至間接に參加し、支配階級と完全に協同してゐる。彼等はまた、我々が年來大衆的日常政治鬪爭主義に終始して來たのとは全然反對に、見え隱れに×××に追隨して來た。殊に社民黨幹部はこの點に徹底してゐて、比較的近き將來に於てブルジョア政黨と提携して聯立內閣を作るであらう日を夢み、しかもそれを遠き將來に於けるマクドナルド政府タイプの彼等自

身の單獨内閣への前程と見てゐる。かゝる左・中・右の社會民主主義者たちに對支配階級鬪爭の遂行を望むのは全然間違ひであるばかりでなく、我々が苟も勞働者・農民・無産市民・その他一切の被壓迫民衆の利益を代表してブルジョアジーと生死の戰を鬪ふ限り、その片割れである彼等とも全力的に鬪はなければならないのだ。たゞ彼等が率ゐる尨大なる大衆の益々增大し行く一部分は、現在滔々として左翼化的傾向を辿りつゝあるがゆゑに、それは將來我々が共同鬪爭に於て、温き手をさしのべなければならない貴重なる戰鬪的分子だといふべきである。

かゝる狀態の下に、我々はこの際奮然蹶起して大衆的日常政治鬪爭主義に立脚する政治的自由獲得鬪爭を捲き起すことの絕對的に必要なる理由を明白に看取することができる。が、更に次の如き諸事實は、我々のこの結論を一層強めないでおかない。

現在ストライキの波が全國的に高まりつゝあるが、それに對する左翼勞働組合の指導權が刻一刻減退しつゝあるやうに見られ、そのために、多くの爭議はウヤムヤのうちに終る傾向がある。まさにこれ、左翼勞働組合の再建が極度に重要視されなければならない秋だ、もとより、左翼勞働組合の再建のためには、直接當事者たちの各種の形態に於ける絕大努力がなされなければならないが、しかし支配階級の彈壓手段が益々完備に近づいて來た今日、それは大衆的政治鬪爭の掩護の砲火なしには、その實現が可能だとは思はれない。で、我々の見ては、



あくまで全力的にこの任務を擔當しなければならないのだ。

更に、帝國主義の現段階に於て絕對に重要視されなければならない無產階級戰線統一の事業もまた、我々の陣營の奮起を待つてゐる。この方面に關して、社民黨の所謂『大右翼結成主義』および舊無產大衆黨の所謂『指導精神にこだわらざる全無產政黨の合同方針』は、共に極度に非階級的のものとして排擊されなければならないものである。現在、階級的に見て眞に正しき戰線統一は、我々の陣營が長期に亙る經驗と討論とによつて最後に到達した所謂戰鬪的戰線統一――卽ち、いはゆる『下からの共同鬪爭』によつて、左翼的指導精神の下に全被壓迫大衆を渾一融合する方法――を通じて實現を期待され得るのみである。そして、この意味に於ける戰鬪的戰線統一實現のために鋼鐵の如く鍛練されたる意志と深刻なる鬪爭經驗とを併せ有するものは、全無產階級戰線を通じて、たゞ我々の陣營あるのみだ。

以上に述べた樣々の考慮から、私たちは、現在我々が大衆的日常政治鬪爭を强力に展開することを不可能にしてゐる勞農同盟の形態を一擲して、合法的左翼政黨として公然の舞臺での活動に再進出することが、當面の客觀的狀勢との聯關に於て、我々の陣營に取つて階級的に最も正しき行き方だと確信するに至つたのである。

尙ほ、現狀勢の下に於て結黨は可能か否かの問題に關しては、私たちは『鬪爭を通じて可能

だ』との斷案を與へたが、しかし玆ではその說明を私たちの『新勞農黨樹立の提案』に讓らなければならない。

最後に私たちは、新勞農黨樹立への進出は——

(一)『プロレタリアートの黨はたゞ一つしかあり得ない』といふ理論と矛盾しないか？

(二)社會民主々義への轉向を意味するものでないか？

の二つの理論上の疑問に打つ突からざるを得なかつた。

それらの點に關する私たちの解答についてもまた、私は私たち『提案』に讀者諸君の注意を向けなければならない。〔卷末附錄參照。〕

## 一〇

若し私たちの『新勞農黨樹立の提案』が、全國に於ける同志たちの間に於ける大衆的討論の結果として採用されることになれば、我々は時を移さず結黨運動に入らなければならないが、その際新黨は、如何なる性質および任務を持ち、如何なる組織形態を取らなければならないものであらうか？

私たちの提案は、現在に於ける我々の主體的諸條件および客觀的狀勢に照應して、新黨の性



質・任務・および組織形態に關する根本原則は、必然に次の如きものでなければならないと規定してゐる。

すなはち『新勞農黨』は——

(一)勞働者・農民・無產市民・その他一切の被壓迫民衆の利害を不斷に・强力に・現實的に・效果的に擁護伸張するために、大衆的日常政治鬪爭主義を全活動の基礎とする。

(二)かくて箇々の場面に於ける鬪爭を、政治的要求にその必然的聯關に於て結びつけ、全鬪爭を政治的自由獲得鬪爭に集中統一して强力に展開する。

(三)他方、かゝる立場に卽して、戰鬪的戰線統一の決定的實現に努力する。

(四)以上の目的の遂行のために——

(イ)完全なる黨內デモクラシーの上に、

(ロ)獨自の指導部——現實鬪爭の過程に於て、その必要から不可抗的に產まれたる——を持つところの、

(ハ)恒常的政治的組織を確立し、

(ニ)合法的左翼政黨として、公然の舞臺に於ける活動に進出する。

親愛なる全國の同志諸君および戰鬪的大衆諸君！

私たちの提案が幸に諸君の採用するところとなつても、我々のその『新勞農黨』が最終的に樹立されるに至るまでには、我々はおそらく、尙ほこの上幾多の惡戰苦鬪を重ねなければならないであらう。だが、我々は斷じて絕望的態度に陷つてはならない。我々は我々の陣營の內部に於て、相當に長き過去の經驗を持ち、從つて幾多の鍛錬されたる精鋭鬪士を持ち、更に全國の戰鬪的勞農大衆の熱烈なる精神的支持を持つてゐる。されば諸君！　お互に不動の自信をもつて、鬪爭を通じて結黨へ進まう！　我々が勞働者・農民・無產市民・その他全被壓迫民衆の生活と自由のために、資本家・地主の陣營に向つて進軍するところ、いかにも我々の結黨への道は荊棘の道であらう。だが、それは我々には覺悟の前だ。更に將來合法黨として一方に屹立するやうになつても、——否、さうなれば一層——彈壓の砲火は益々全面的に我々の頭上に集中されるであらう。それも承知だ。我々の合法的舞臺が決して平和の樂園でなかるべきことは、我々のすべてが敬愛して措かざる我々の同志山宣の壯烈なる英雄的最期がこれを證明する。お互にたゞ個人的安逸を求めるものならば、このまゝ無爲に我々の鬪爭力を腐り行くに任かしておくに越したことはない筈だ。だが諸君！　それは我々の階級的義務意識が、斷じて許さないのだ。刻一刻危機に瀕しつゝある全被壓迫民衆の利益は、我々に躊躇なき蹶起を嚴命する。聞



け！　今なほ活けるが如く我々の耳底に殘る亡き同志山宣の聲は、雷の如く響き、我々に號令して、我々を政治的自由獲得鬪爭の戰場へ驅り立てる。さうだ！　我々の行くところは、戰場であり、墓場である。

最後に、私たちは諸君に向つて叫ぶ。——

**鬪爭を通じて結黨へ！**

**すべての鬪爭を政治的自由獲得鬪爭へ！**

**左翼勞働組合再建萬歲！**

**戰鬪的勞働者農民萬歲！**

**新勞農黨樹立運動萬歲！**

**（一九二九年九月）**

# 新勞農黨樹立の時期に直面して

## その勞働者農民の同盟としての性質および任務に關する一考案

## 一

新勞農黨の合法性獲得のための闘爭は、抗しがたき潮流に押されてかのやうに、異常な底力を以て着々と進捗して來た。全國の戰闘的勞働者農民の間から擧げられた熱烈なる要求の聲に驅り立てられて、その結黨の時期も、大體十月下旬といふことに、一應決定された。——この決定は稍々後に至つて十一月一日・二日といふことに改められたが。——そして待たれるその日は、もはや目睫の間に迫つてゐる。

かゝる事態を前にして、新勞農黨組織準備會關西地方協議會は、その主催の下に關西の重要諸地點に於て結黨促進・時局批判演說會を開く計畫を立て、そしてそれへの參加のために私(大山)を關西に派遣すべきことを、東京の準備會本部に向つて要請して來た。本部は直ちにこれ



に應じ、更に別に名古屋の準備會から來た同樣の要請をも容れて、私の遊說プログラムを組み、九月下旬から十月上旬にかけて、私を關西地方の同志たちの間に送ることを決議した。

かくて私は、九月二十八日に東京を立ち、それから十月六日に再びそこに歸つて來たまでに、京都(九月二十九日および十月二日)、名古屋(九月三十日)、神戸(十月二日)、大阪(十月三日)、堺(十月四日)、及び奈良縣の小泉村(十月五日)に於て、しばらく振りに、關西の同志たちと共に、親しみの深い大衆に接觸する機會を持つた。その間に京都の同志河上が四回も私たちと共同の演壇に立つたことは、私たちへの多大の激勵となつた。

演說會はどこでも、唯ひとつの例外もなく滿員であつた。のみならず、入場しきれない大衆が空しく街上に列を作つて立つてゐたゝめに、私たちが心から詫び入りたいやうな氣持に誘ひ込まれたやうなことさへ、一再ならずあつた。九月三十日の名古屋および十月五日の小泉村に於ての外は、私たちの一行は始終生憎の雨に祟られ通しであつたが、さうした空模樣などには頓着なく、殺到して來た勞働者農民無產市民の大群は、行く先々の會場を立錐の餘地なきまで に塡めつくし、時々刻々堂をゆるがさんばかりの拍手を爆發させて、凄い程の氣勢を擧げた。

もつとも、京都、神戸、および大阪では、一握りほどの小人數ではあつたが反對派のグループが聽衆の中から現れて、ビラまきや彌次によつて會場の攪亂を企てたやうな小事件が持ち上

がつた。そのうち唯一度京都に於て、九月二十九日の夜に岡崎公會堂で持たれた演說會が、彼等のさうした妨害行動によつて惹き起された數分間のさゝやかなる動搖のために忽ち臨監の警官に乘ぜられ、しかもその騷ぎが鎭まりかけてゐた刹那に『解散』を强制された。その時は我々の側に不覺にもさうした突發事件に對應するための防備手段が講ぜられてゐなかつたゝめに、その演說會は遺憾ながら續行できなかつた。だが、我々のこの最初の無慘な失敗は、その代りに越えて十月二日の午後を期して三條青年會館で持たれた同市での第二回の演說會の輝やかしき大成功によつて償はれて餘りある結末を以て局を結んだ。

否、それだけが該事件から我々が引き出し得た收穫の全部ではなく、その好影響は延いて他の諸都市で持たれた演說會の上にまで波及した。それは、我々の遊說の勞頭に於て京都で起つたその小波瀾が、その後の我々の演說會の警備問題に關して、極めて重要なる教訓を我々に與へたからである。かくて、その次からの各演說會は、精細なる注意を以て組織されて一糸みだれざる規律統制の下におかれた我々自身の警備隊によつて、極度に嚴重に固められることになつた。で、十月二日夜の神戸に於ける演說會、および十月三日夜の大阪に於けるそれに於ても、矢張り小人數の反對派のグループによつて、同じくビラまきや彌次の形に於ける會場攪亂の狂態が演ぜられたが、兩度とも我々の賴母しき警備隊の俊敏果敢なる行動に制止されて、彼等の



その折角の企ても、竟に一杯のコップの水の上に立つ波ほどの騷ぎをも持ち上げることが出來なかつたばかりでなく、多分彼等が豫期してゐなかつたであらうやうな反對効果をすら產んだ。この點に關しては、大阪での演說會で見られた光景が、極めて典型的な一例を示した。卽ちその夜約四千の聽衆によつて充たされてゐた中之島中央公會堂の人浪を背景にして、そこの一角かしこの一隅から一握りの反對派の連中の策動によつて時々持ち上げられた小さき擾亂の渦は、例によつて會場內に水も漏さぬばかりの警戒の陣列を布いてゐた警官隊と相映發して、臨監の『中止』の連發の蠻聲の下に一種の皮肉な對照を示し、兩々相須つて熱心なる聽衆の反感を極度に挑發して、そのために會場內の緊張味が頓に倍加され、新勞農黨支持の態度の表明としての急霰の如き拍手の響が層一層と瞬間々々に無際限に高められて行つた觀があつた。

かういつた調子で、次々と各地で持たれた演說會は、いづれも皆、豫想以上ともいふべき滿足な效果を十二分に收めた。そして私は、その間始終關西地方の同志たちが惜しみなく私に與へてくれた援助によつて、所定の任務を滯りなく果たした上で、言ひつくしがたい感謝の念を懷きつゝ、それらの同志に別れを告げて關西を引き上げたのであつた。

それから、歸東の車中に於ても、歸東の後にも、私は絕えず過去一週日の旅行を振り返つて見ては、その間に私が新たに學び取つた教訓の意外に多かつたことを心から喜んだ。私は今、

新勞農黨の結黨期を前にして、同黨の使命およびその意義を、大衆に向つて語らうとするに際して、まづ私が今回の遊説中に於て得た樣々の生々しき印象から説き起さうとしてゐるのである。

## 二

既に述べた通りに、私の今回の遊説中、新勞農黨組織準備會關西地方の協議會主催の下に關西方面の各重要都市で開かれた演説會は、いづれも皆竝々ならぬ成功に輝いた。そして、いづれの場合に於ても、演説會に潮の如く押し寄せた大衆のうちには、當該都市および附近の勞働者農民無產市民が、必ず壓倒的大多數を占めてゐた。彼等は皆一齊に、新勞農黨の堂々たる出現への展望を前にして、萬雷の如き萬歲の叫びに聲を合はせることによつて、熱烈なる歡迎の態度を明白に表明したのであつた。この當然の事實は、しかし直接にそれを目擊した私たちを、心の底から愉快にせずにはおかなかつた。

更に又、各演説會を勇敢に身を以て護つたところの、犧牲的精神そのものゝ體現の如く見えた我々の警備隊は、その殆ど全部が工場から動員されて來た精鋭なる勞働者たちから編制されてゐたものである。特に大阪の演説會の場合に於て、さうした優秀なる警備隊が二百三十餘



名の員數から成り立つてゐた事實は、かうした方面の事情に精通してゐるものにとつては、眞に驚異に値することであらねばならぬ。新勞農黨の樹立が大衆の支持を受けてゐないとか、戰鬪的勞働者の全部から排擊されてゐるとかの逆宣傳を盛に飛ばしてゐるものは、この具體的事實を如何に説明し去らうとしてゐるのであるか！

更に、私自身は、新勞農黨樹立の提案者の一人としての立場からも、特にさうした光景を無上の感激を以て見る理由を持つた。何よりも殊に私はそれを通じて、さきに私たちが非常の決心を以て全國の同志たちおよび大衆の批判の前に投げ出したその提案が、それらの同志たちおよび大衆の壓倒的大多數の間に於て、幸にもその不遜を咎められることもなく、本質的にその精神趣旨に對する共鳴支持を發見した事實の活きた徵證を見ることが出來たことを感じた。そして私は、單に久しく私の心の上に横へられてあつた一種の重荷をおろしたやうに感じたばかりでなく、同時に新勞農黨の前途の發展に對する確信を益々强めることが出來た。無論このことは、私以外の二人の提案署名者たちについても、一樣に當て篏めていへることである。

もとより私たちは、提案發表の直後から引き續き、それへの反對聲明が雨の如く降り來つた事實を、知りすぎるほど知つてゐる。だが、私たちは初めから、さうした一切の反對聲明が現實の大衆的基礎の上に立つてゐたものか否かについて、多大の疑惑を挾んでゐたのだ。そのう

ちに、さうした反對聲明と入れ違ひに、今度は贊成聲明の山が新勞農黨組織準備會假本部の卓上に積まれるやうになつた。それらの贊成聲明は、舊黨時代以來あくまで我々の陣營を支持して來て、我々と共に手を取つて戰つて來た勞農諸團體の多數から送られて來たものである。そして、それらの贊成聲明が一體に反對聲明よりも多少後れて到着する傾向が見られたのは、前者が愼重なる大衆的討論を經た上で作られたためであつたといふ事實が、段々と私たちに明かになり始めた。

かゝる形勢の推移の下に、最近數箇月間正規の刊行をしてゐなかつた舊勞働農民黨時代以來の我々の陣營の機關紙『勞働農民新聞』も、八月中旬には完全に更生して、提案への贊否に關する全國的狀勢が、その紙上に巨細に報道され始めた。それから間もなく、東京に於ける提案贊成の諸團體の代表たちの會議が持たれて、その席上に於て新勞農黨組織準備のための正式の本部および東京地方準備會設立の件が決議され、全國の同志たちに向つてその承認が求められた。それは實に、提案發表の日であつた八月八日から算へて一箇月になるかならないかの九月六日のことであつた。全國の同志たちも直ちにその例に倣つて、續々と各地に準備會を組織し始めた。

この點に關する全國的狀勢を玆で詳細に報告するが如きことは、一般の讀者たちにとつては



却て煩しく感じられることであらうし、また特にそれを知りたい人々は、『勞働農民新聞』紙上の報道に就くを便とする事情もあるから、玆では一切それを省略することにする。たゞ一般的狀勢の概觀としては、次のことが明確に言ひ得られる。すなはち、我々は最も尊敬する戰鬪的左翼勞農諸團體のうちにも、いまだに提案に對する贊否の表明を保留してゐるもの、および兎も角正式の機關の名に於て——大衆的討論を經た上でのことか否かは全然別問題として——既に公然と反對聲明を發表してゐるものが幾らかはあるといつたやうな、我々には衷心遺憾に感じられる現象も生じてゐない譯ではないが、しかし大局の上から見れば、それらの諸團體の間に於て提案絕對支持の態度を積極的に表明してゐるものが明かに壓倒的大多數を占めてゐる。のみならず、提案反對の態度を持續してゐるものが主として觀念的病症に囚はれてゐる一部少數のインテリゲンツィアの指導下に立つ人々の間に見出される傾向があるに反して、提案を積極的に支持するものは大體現實に鬪爭を續けて來た諸團體に屬する人々のみであるといふ事實が、我々には明白に看取され得るのだ。

殊に、關西方面の最重要諸都市の大阪、神戸、および京都に於ける多數の有力な戰鬪左翼勞働組合および農民組合が、他に率先して逸早く提案を大衆的討論の下に審議した上で堂々と贊成聲明を發表した事實は、どれほど私たちの意を強くしたか測り知れないのである。かうした

ことも、玆で一々詳細に記述するよりは、寧ろ讀者諸君の注意を『勞働農民新聞』紙上の精確なる關係記事に向けるのを便とするが、しかし今全豹の一斑といふ意味で、試みに新勞農黨組織大阪地方準備會の現在に於ける加盟支持諸團體を擧げて見る。それは實に次の通りだ。曰く、大阪金屬勞働者組合。曰く、大阪木材勞働組合。曰く、全大阪勞働組合。曰く、關西革新勞働組合。曰く、大阪足袋工組合有志。曰く、大阪電氣勞働組合有志。曰く、全國農民組合大阪府聯合會有志。曰く、大阪市電自助會有志。曰く、水平社有志。――ざっとかういふ調子だ。それに、以上の現在加盟支持諸團體以外にも尙ほ、今後續々來り加はらうとする形勢にある諸團體の數もまた決して少くない模樣である。

だが、實をいへば、かうした單なる表面的な、形式的な記述だけでは、よしそれによつて事實の輪廓だけが髣髴し得られるにしても、その活きて働いてゐるまゝの眞相は、決して具體的に、實感的に把握できるものではない。それをなし得るためには、私たちは是非とも親しくその現實の場面に赴いて、そこで現實に活動してゐる同志たちや大衆に直接に接觸して來なければならない。――かう考へて私は、勇み立つて今回の關西遊說の旅程に上つたのであつた。



## 三

私たちは今回の遊說中に、各地の演說會に於ける光景を通じて、關西地方に於ける勞働者・農民・無產市民の大衆が、今まさにその堂々たる出現の前夜にある新勞農黨を、如何にはちきれるやうな滿腔の期待を以て熱烈に歡迎しようと用意してゐるかの眞相を、まざ〳〵目のあたりに心ゆくまで見詰めることが出來た。直接に現實の場面に就いて得られたかゝる事實の具體的證明こそは、私たちにとつては、他の何物にもまさつて貴重なる收穫であつた。私たちは殊に、新勞農黨樹立の提案は決して大衆の意志を反映してゐるものでないといふやうなことを千言萬語を以て我々に敎へようと試みてゐる一切の反對聲明が、それを前にして根柢から覆へされて行くのを見た。しかも、かゝる結果が、舊勞農黨時代以來引き續き我々の陣營の全運動の進展の上に於て非常に重要なる役割を演じて來た關西地方の同志たちおよび大衆の間に於て持ち來たされたことによつて、私たちの確信がどれほど強められたことか！　更に私たちの眼に觸れた反對聲明の或るものは、少くとも全國の戰鬪的勞働者農民大衆は新勞農黨樹立運動を極度に呪つてゐるといふやうな趣旨を書き立てゝゐるが、しかし私たちが見舞つた各地の戰鬪的勞働者農民大衆は、精鋭無比の警備隊を組織し、その强力なる援護の下に全運動の效果的な進行

を助成したことによつて、斷乎としてさうした妄語に答へた。殊に全國重要工業諸都市の隨一とも見るべき大阪に於ける我々の演說會が、現實に工場から動員されて來た二百三十餘名の勞働者たちから編制された警備隊によつて護られた事實は、優に我々の陣營に對する逆宣傳者流を一擧に蹴ッ飛ばして尙ほ餘りあるものだ。實際それらの屈强なる警備員たちが、甲斐々々しくも隼の如く、三々五々會場を縫うて縱橫に活動しつゝ、彼等の任務を見事に遂行してゐた光景は、我々に向つては一種の悲壯感をさへそゝつた。私は無限の感謝を以てそれを眺め、何時しか心のうちでひそかに斯う考へてゐる私自身を見出した。『反對派の人々は、よし個人として の提案者たちの頭上にありッたけの惡罵の言葉を積み累ねようとも、提案そのものにかくも熱心に積極的支持の態度を示しつゝあるそれらの戰鬪的勞働者大衆に向つては、後ろ指一つさすことは出來ないであらう』と。

たゞし、前にも記述した通りに、京都、神戸、および大阪に於て、たとひ少數であり且つ意外に無力であつたにせよ、とにかく會場の攪亂を企てた一群の提案反對者たちが現れたといふことは、多少の程度に私たちの注意を刺激した。もとよりそれは、私たちの豫想以外の何物でもなかつたが、しかもそのことが目のあたりに起つたのを見た時には、さすがに私たちは、言ひやうのない、一種異樣の感じを懷いた。それは、一つには從來反動團體などの襲擊には隨



分慣らされて來てゐる私たちではあるが、しかし現在我々と同じく左翼の陣營に屬してゐる人人からあゝした妨害を受けたことは、私たちには全然始めての經驗であつたからでもある。

實際、それらの會場攪亂計畫者たちは、つい先頃までは、我々とは互に同志と呼びかはしてゐた間柄である。しかるに今や、彼等と我々とは、政治的見解の相違から別々の途を歩まなければならないやうになつて來てゐるのである。何といふ急激な變り方だ！ だが、かうしたことは、我々が無產階級戰線の上に立つ限り、決して今更らしく珍しがるどの現象ではなく、今後といへども度々生じて來ないとも限らないものである。だから私たちは、それをどうのかうのといふべきではない。

それにしても、彼等の演じた妨害行動が、少くとも外形上、アナ系の集團が好んで用ひ來つた手段と同じ型のものであつたばかりでなく、更に私たちが今回の遊說中名古屋に行つたときに演說會場外で見た反動團體らしき一群 —— それは建國會員たちだと後に聞いた —— の遣り方とも全然一樣であつたといふことは、多少私の心を暗くした。私はしかし、直ぐ次の如く考へて、氣持を取り直した。すなはち、提案反對派の諸君は、少くともその主義、主張、および理論に於ては、無論アナ系の集團や建國會などゝは根本的に立場を異にしてゐるものであり、更に彼等の鬪爭目標や鬪爭相手が我々のと同じものである以上、彼等が口先で革命的言辭を唱

へるだけでなく、いま會場を護つてゐる戰鬪的勞働者農民大衆と同じ樣に、これから先も現實に鬪爭をつゞけて行く限り、やがては彼等が我々の現在の立場を當面の客觀的狀勢との聯關に於て見て階級的に正しいものとして理解する日が來るであらう。無產階級の進み行く道は複雜多岐であり、かつ幾曲りにも曲りくねつてゐる。で、今日こそ彼等と我々とは別々に相離れて歩んでは居るが、しかし他日、道は再び相合して、彼等と我々とがまた新たに溫かく握手する時機が永久に來ないであらうとは、誰に保證できようぞ！

## 四

それはそれでいゝにしておいて、尙ほ別に一つの問題がある。さきに私たちが提案を發表した直後に於て一聯の反對派のグループが取つた態度は、私たちの甚だ遺憾——私たち自身のためにでなく、彼等のために——としたことであつた。それは無論私たちが、彼等は大局から見て我々と同一の陣營に屬してゐるものだと考へたからのことであつた。私たちはもとより、當面の客觀的狀勢——主體的諸條件の現勢との聯關に於ての——に對する私たちの認識に卽して、私たちが提案中に示した進み方こそが、現在に於て我々の陣營が取るべき唯一の階級的に正しき道であり、更にまた全國の同志たちおよび大衆もその道に就くことを要求してゐるものとの確信を得たればこそ、敢て不遜の罪を犯してまでも、大膽にもあの提案を發表したのであつた。私たちは無論、私たちの認識や私たちの判斷が常に正鵠を誤まらないものなどゝは、夢にも考へてゐない。さういふ氣遣ひじみた考へ方は何時に限らず我々がしてならないことだが、特にあの提案に關しては、その內容が當面の活きた現實問題に觸れてゐるものだけに、私たちの危惧——私たちの不安は、それだけ一層大きかつた。だからこそ私たちは、それが作成されるや否や、卽座にそれを一齊に全國の同志たちや大衆の前に投げ出して、その寸毫も假借するところなき批判を求めたのである。そして、それが私たちの手を離れて、一旦、同志たちおよび大衆の討議に附託されてからは、私たちは絕對に靜かに坐して、それに對する審判の下されるのを待つてゐたのだ。そして、私たちには絕對に正しいものと確信されたその提案の內容といへども、若し同志たちおよび大衆によつて、その間違ひであることが理論的に懇切に指示證明された上でのことならば、私たちの身が、よしそれがために大地に踏みにじられ泥土に委せられようとも、それは私たちが甘受しなければならない運命であることを、私たちは初めから固く覺悟してゐた。ところが、反對派の諸君が逸早く出した反對聲明の多くのものは、私たちの提案の內容を理論的に克服しようと試みた前に、まづ個人としての提案者たちに向つて、あらゆる惡罵の雨を浴びせかけ、屢々虛構の事實に卽して——私は斷乎としてそれを言ふ

ことを憚らない——人身攻撃をさへ試みたのだ。『裏切り者！』『卑怯者！』『官憲の犬！』『泥沼への轉落！』『白色テラーへの降服！』等々その他無數。彼等は本心からか悪意からかは判らないが、提案者たちの心術にまで立ち入つてかくも口汚なく吠え立てたのだ。かうしたことが、我々の敵の策謀から出たものならば、私たちはそれを餘りにも當然のことゝ考へたであらう。また、彼等が相當期間私たちと意見を闘はしてその事實を確めた上、それに應じて兎や角言ひ立てたにしても、私たちは、それに對して別に何も言ふ必要を持たなかつたであらう。だが彼等は、何を問ふひまもなく、たゞ一圖に私たちに罵詈雑言の一齊射撃を向けたのだ。かういふことが、今が今まで同志として腕を組んで共に戰つて來たものに出來ることであらうか？

否！　闘爭するものにこそ闘爭するものゝ氣持が解かる筈だ。かう考へたとき、私の結論は必然、『彼等が現實に我々と苦難を共にして來たものとは信じられない！』といふことに落ち着くより外に途がなかつたのである。

もとより、彼等の罵聲も、彼等がそれによつて企圖した效果を寸毫も擧げ得なかつたことは眼前の事實が十分にそれを證明してゐることであるから、私たちはその點から何事をもいふ必要を持たないが、たゞ私たちは斷乎として、彼等がそれによつて示した捨て鉢的な態度が百パーセント非階級的であることを信ずるが故に、茲で少しくそれを問題とした譯である。



更にまた反對派の諸君のさうした言動は、皮肉にも新勞農黨を支持する同志たちおよび大衆の熱意を幾倍も高めたやうな、彼等の企圖とは全然反對の效果を產んだ。それらの同志たちおよび大衆は、反對派の諸君の如く始めから反對のための反對に出るやうなことはなく、從つて政治的意見の異同を理論的に究明する前に頭から安價な漫罵を放つたやうな眞似をしないで、まづ第一に私たちの提案を大衆的討論の下に置いて自由に胸襟を開いて審議した。私たちは信ずる、かゝる思慮ある態度を以て提案に臨んだ同志たちおよび大衆は、よし結局それに對して理論的に痛烈なる否定的糺彈的批判を下すことを餘儀なくされたにしたところで、それはそれとして、別に個人としての提案者たちに向つて、少くとも虛構の事實に卽する人身攻撃の毒ガスを發射するやうなことなどは決してしなかつたに違ひない。多年雨に嵐に共に手を取つて戰ひ進んで來た同志たちおよび大衆の頼もしさよ！　かゝる信頼すべき人々によつて行はれる階級的裁判の判決にならば、私たちは何時でも無條件的に服從して悔いない用意を持つてゐる。それだけでも私たちには十分に滿足であるのに、更にそれらの人々が、提案を前にして闘はした自由討議の末に、その趣旨に全幅の贊意を表することによつて、彼等もまた提案者たちと政治的意見を本質的に同じうしてゐるものであることを證明したことを知つたときには、私たちの喜びは必然に二重であつた。

## 五

言ふまでもなく私たちは、今回の遊説中に各地で持たれた我々の演説會の成功を、無條件的にその外面的盛況によつて測定しようとしてゐるものではない。否、私たちは、至るところで我々の演説會に伴つたその外面的盛況が畢竟するに、我々がこの際非常に高く評價する樣々の內面的諸關係の集積的表現であることを知つてゐるが故にこそ、それを我々の演説會の成功の指標として見ようとしてゐるのである。單なる外面的盛況は、我々の眼には一箇の無用な贅澤物としてしか映じないのだ。

では、謂ふところの樣々の『內面的諸關係』とは一體何を指してゐるものであるか？

この問題は簡單なる間に合はせの一言で片附けてしまはれるには、餘りにも複雜である。それ故に私は、今それを取り上げるに當つて、より外側的な部分から一ト皮づゝ剝いて行つて、最後にその核心を抉り出す、といつたやうに取り扱ひをしようと思ふ。

まづ第一に、各地で持たれた我々の演説會の外面的盛況を促迫した直接の要因は何であつたか？　それはたゞ聽衆の大群の殺到といふことだけであつたか？　斷じて否！　もとよりこの場合、我々はこの要因を全然度外視することは出來ないが、しかし唯それだけが全部ではなか



つた。一般の興行物の開演の場合などには、單に多數の入場者を得たといふことだけで盛況といはれるのが普通であるが、しかし我々が持つ各演説會は、そんなものとは違つて、鬪爭の一形態であり、またその一手段でもあるのだ。それ故に我々の演説會は、單に聽衆の大群がそれに殺到したといふことだけによつて、それが盛況を呈したものとは言へないのだ。さう言へるためには、少くとも、打たば響くやうな緊張味が全場面を支配してゐなければならないのである。

だが、一樣に緊張味といつても、我々の演説會の場合にあつては、興行物の開演の場合に於て見られるが如く、鑑賞の對象に對する好奇心や耽美心やの滿足もしくは一種の感興といふやうなものから來たものであつても、全然目的から外れてしまふものである。それはまた、普通の學術講演會や政談演説會などで見られるが如く、單に壇上の辯士の雄辯の魅力とか、その談論の技巧とか、その學殖の豐富とか等々によつて惹き起されたものであつても、その效果は高部分的なものにすぎないものとなるのである。

鬪爭の一形態であり、またその一手段でもある我々の演説會に於ける緊張味は、何よりも殊に、聽衆の間に鬪爭精神が效果的に激成されたことから來るものでなければならぬ。さういふ緊張味が全會場を支配してこそ、我々の演説會は始めて盛況を呈したといふことが出來るので

あり、また少くともさういふ意味に於て盛況を呈してこそ、それは始めて成功したものといふことが出來るのである。

如上の見地から、私たちは、今回の遊説中に各地で持たれた我々の演説會の外面的盛況について語るとき、單に聽衆の大群の殺到といふ一事だけに着眼してゐるものでない。私たちは尙ほそれに加へて、その聽衆の大群の間に十分效果的に激成された闘爭精神の横溢を見てゐるのであり、更にそれから生じた會場内の異常の緊張味を見てゐるのである。そして、我々の各演説會は行く先々で、決まつてかうした意味に於ける外面的盛況を伴つたが故に、私たちはそれは非常に成功したと言ふのである。

我々の各演説會に於て聽衆の間に效果的に激成された闘爭精神の外部的諸表現——嵐の如き拍手、萬雷の如き歡呼、臨監の中止に對する『横暴！　横暴！』の抗議、閉會間際の萬歳の唱和、等々——かうした尋常一様の平凡な事柄については、私は茲で何事をも言ふ必要を持たない。たゞ一つ、しかし、聽衆の間に於けるさうした闘爭精神が、官憲の彈壓的態度と會場攪亂計畫者たちの妨害行動とに對抗して極力會場を護らうとする決意となつて鮮明に表現された一事だけは、私は特に茲でそれを擧げておく義務を感じる。實際私は始終、その光景を涙ぐましい氣持ちで見詰めてゐたのだ。京都で唯一度起つた我々の不覺の大失敗を別にしては、



その後の各演説會に於て反對派の妨害行動が持ち上がるたび毎に、それは忽ちにして完全に制止されてしまつて、そのあとは全會場が却て、以前よりも嚴肅なる緊張味に包まれて行つた。かうした見事な成果が完全に收穫し得られたのは、無論一部分は我々の誇りである精鋭無比の警備隊の働きによつたものとはいへ、我々は同時にまたそれが熱心なる聽衆の自由意志から出た警備隊への協力に負うたことも決して少くなかつたといふことをも、十分に認めなければならない。

おもふに、聽衆が示したかゝる態度——かゝる闘爭精神の表現——は、決して一朝一夕に養はれたものではない。もとより、壇上の辯士——否、闘士——のその場のアジテーションも、直接に、瞬間的に、それを激成することに多くを貢献したことは言ふまでもないことだが、しかしそれは根本に於ては、舊勞働農民黨時代以來の我々の陣營の多年の苦難の闘爭の所産でなければならぬ。その多年の苦難の闘爭は、單に我々の陣營内部の幾多の闘士たちを鋼鐵の如くに鍛へ上げたばかりでなく、同時にまた、知らず識らずの間に一般大衆の上にもよき訓練を與へつゝあつたのだ。だから、私たちが我々の演説會に來る聽衆の間に激成されたる闘爭精神の右の如き表現に接したのは、嚴密にいへば決して今回に始まつたことではなく、從來とても一再ならず目擊して來たものである。だが、それは幾度見ても、常に新たに私たちの感激を高潮

に導くことを誤まらないものである。

最後に、私たちの今回の遊説中に、特に異常に私の注意を促した一新現象だと私に考へられたことは、演説會場の内外を問はず、私が親しく接觸した勞働者農民大衆の間に、新勞農黨樹立運動をどこまでも自分自身の事として護り立てゝ行かうとする精神が、――更に建設された後の新勞農黨の進路の方向の決定に對して飽くまで意識的に、自主的に、積極的に働き掛けようとする意志が、――凄じき勢を以て生長しつゝある、といふ一事實であつた。尤もかゝる傾向の發生・生長は、既に提案發表後の或る期間に於て多くの勞農諸團體から出された贊成聲明の上にも十分明瞭に讀み取られたものではあるが、しかし私は、今回の遊説中に、私自身が直接にまざ〳〵と見た樣々の具體事實を通じて、それを一層明確に認識することが出來たのだ。そして私は今更のやうに、間接にそれを文字で讀んだ時と、直接にそれを眼で見た時とを比較して、それが如何に私の感性の上に、その映像の鮮明さの程度を異にして現れたかを注意しつゝ、非常に愉快に感じた。

私たちは新勞農黨樹立の提案中に、當面の客觀的狀勢との聯關に於て合法政黨の形態を取つた勞働者農民の戰鬪的同盟として出現すべき新勞農黨は、その性質および任務から見てその組織形態上あくまで黨内デモクラシーの基礎の上に立つ强力な獨自の指導部を持つたものでなけ



ればならないものである、といふ趣旨を特に强調しておいた。更らに提案發表以來、我々の機關紙は、同じ論據から出發して、新勞農黨が向外的に全被壓迫民衆の日常利益と政治的自由獲得とのために大衆的規模に於ける公然の鬪爭を效果的に敢行しつゝけて行くためには、それはその實質的基礎を築きあげて行くといふ意味に於て、向内的にどこまでも工場農村に深く廣く根を張つて行かねばならないといふ一點を、反復的に主張して來た。ところが、今回私が久々振りに出門して關西地方の勞働者農民大衆に接するに及んで、私はそれらの大衆が既にさうした一切の理論、一切の主張の精神をしッかりと把握してゐて、しかも上述の通りに、それを一歩一歩と實踐の上に移し行きつゝあるのを見た。まことに、必要こそ發明の母である。

勞働者農民大衆が自分たちの政治的組織の上に意識的に、自主的に、積極的に働き掛けようとする能働的意志、およびその普遍化！　これこそは、各地で持たれた我々の演説會の外面的盛況を促迫した内面的諸關係の核心でありその集中點であるものではないか！　そして、さうした事情が現に實在してゐるといふことは、或る意味に於て舊勞働農民黨時代以來の我々の陣營の多年の苦難の鬪爭の成果であると同時に、それは更にまた、舊黨時代以來の我々の陣營の實體をなして來た勞働者農民の戰鬪的同盟の發展形態として出現しようとしてゐる新勞農黨の將來に於ける强力なる活動の展開のための、既に用意された實質的基礎ではないか！

## 六

「勞働者農民の同盟」といふ稱呼は、舊勞働農民黨時代に於て、すでに我々の陣營内の大衆の間に、極めて親しみの深いものになつてゐた。そしてそれに含まれてゐる概念およびその重要なる現實的意義は、當時に於てすでに、それらの大衆によつて、よく把握されてゐた。それは具體的に、舊勞農黨が中心的任務としてゐた全被壓迫民衆の日常利益の擁護伸張とその政治的自由の獲得とのための大衆的闘爭との聯關に於て、殊に實踐の上で明確に理解されてゐたのである。即ち、この大衆的闘爭の遂行に於て、勞働者階級があくまでその主導力として立たなければならないし、また事實上立つてゐるものであるが、しかし同時に、勞働者階級が主導力となつてそれを成功的に勝利にまで戰ひ進め得るためには、是非とも農民の參加協力に須たなければならないし、他方、農民が現在因つて以て縛りあげられてゐるところの半封建的搾取の鎖を斷ち切り、更に土地に對する自分自身の飢渴を最終的に癒し得るためには、何を措いても勞働者階級のみが彼等に與へ得る支持・援助に賴らなければならない。――と、大體かういつた正しき論據から、勞働者農民の同盟の概念は、舊勞農黨によつて不斷に宣傳され、またそれに對する理解の程度に應じて實踐的に組織および行動の上に具體化されてゐたものであり、また具體化の努力が拂はれてゐたものでもある。かうした事態は、現在の日本に於て、勞働者農民の同盟を必然不可缺ならしめる實質的基礎が既に十分に用意されてゐて、唯その組織化を待つばかりの狀態にまでなつて來てゐる事實を、まざ〳〵と反映してゐるものである。



舊勞働農民黨は合法政黨の形態に於て、かゝる意味に於ける勞働者農民の同盟としてその任務を遂行しその闘爭を進めてゐたものであつた。たゞ當時にあつては、それに對する理解が尙ほ幾分漠然としてゐたものがあり、且つ同黨の組織および活動の方針の上に、今から見れば幾分の缺陷といへるものが尙ほ多量に含まれてゐた結果、同黨はこの方面に於ける强力なる活動の展開の基礎的條件として工場農村に深く廣く根を張ることに十分に成功するに至らずして、その餘りにも短き生涯を終つたのだ。

かうした關係は、そのまゝ新黨準備會に持ち越され、改訂されようとして竟に改訂されないで過ぎた。

新黨準備會の解散と共に、左翼戰線の全局面が俄然として一變されるや、右の關係もまた、それにつれて根本的に變革されてしまつた。即ち、その時を楔機として、我々の陣營は當時の客觀的狀勢に照應して決然として結黨方針を全部的に放棄し、政治的自由獲得勞農同盟の新形態に移つて行つたのである。

勞農同盟は、その名が示唆する如く、依然として勞働者農民の同盟の實質を持つ闘爭實體として存續すべきものと規定されはしたが、同時に最早政黨的形態を取るべきものでないと規定され、それから論理の糸を辿つて、獨自の指導部を持たないところの一種のカンパニアの組織であるべきものと規定され、最後にそれに加へて、『闘爭の過程に於て發展的に解消すべきもの』と規定された。かゝる諸規定は、言ふまでもなくその前後から左翼を風靡し始めたところの、『プロレタリアートの黨は唯一つしかあり得ない』といふ理論との聯關に於てなされたものである。

『勞農同盟は闘爭の過程に於て發展的に解消すべきものだ』といふ理論は、當時の客觀的狀勢の下にあつても、尙ほそれが內包する諸關係に就いて、且つその必然的歸結への見通しの下に於て、まだ〳〵徹底的に論究し拔かれなければならない餘地を十分に存してゐたものであつたが、何にせよ、當時の事態の下に於ては、――尤も今日に於てもそれには大體變りはないが――さうした種類の問題に對する大衆的討論が完全に封鎖されてゐて、一般的には理論の發展上空前の沈滯狀態が出現してゐた結果、それは左翼陣營に於て、その漠然とした意味に於てのまゝで、殆ど無批判的に受け容れられてゐたのであつた。

だが、理論の發展の問題はどうであれ、事實上の勞農同盟は、二月の下旬ごろから三・四月



ごろにかけては、或る程度および範圍に闘爭を展開してゐたが、しかし四・五月の境を楔機として、急に殆ど活動不能狀態に陷つたのである。それは、四・一六事件を通じて全左翼戰線の上に下された徹底的大打擊の影響のためであつたことは、言ふまでもないことであらう。それ以來勞農同盟は、最早そこかしこでの選擧闘爭以外には殆ど手も足も出なくなり、しかも選擧闘爭そのものさへが時と共に段々と困難の度を增して行き、急速にその不可能の限界線にまで迫りつゝあつたやうな有樣であつた。かくて勞農同盟が最初から帶びしめられてゐたカンパニアの組織としてのその任務の遂行は、よし地方的に見て多少の例外はあつたにもせよ、全國的に見れば文句なしに、我々の陣營に於て未だ曾て見られたことのないやうな慘憺たる停頓狀態に移つて行つたのである。それは、勞農同盟がその歷史的任務を遂行し盡くしたがためでなくて、最早全然それを遂行することが出來なくなつたゝめであつた。從つて、勞農同盟そのものに關しては、『發展的に解消』するもしないも、もはや問題でなくなつた。活動の停止するところ、そこに如何なる發展の楔機も見出され得るものでない。かゝる狀態の下に於て、勞農同盟は最早、少くともその現形態を一擧に脫却しない限り、發展的に解消するどころでなく、自然的に立ち腐れになるしかなくなつた。かくて今や我々に取つては、勞農同盟の前途へ發展の通路の打開のために、何よりも先づ、その形態の轉換策を講ずることが焦眉の急務となるに

至つたのだ。そして若し我々が確信してゐる通りに、今こそ勞働者農民の同盟が再び公然の舞臺に臨進して大衆的規模に於ける各種の闘爭を强力に展開することをその最大の階級的任務とすべきだといふことが眞理だとするならば、勞農同盟のための轉換策は必然に、それをして、當面の客觀的狀勢の下に於て公然と效果的に活動し得しめる形態を具へてゐる勞働者農民の戰闘的同盟の實體にまでそれを轉化せしめることを中心目的とするものでなければならぬ。

新勞農黨樹立の提案は、さうした中心目的を基準として立てられた勞農同盟のための轉換策——もしくは提案中に用ひられた用語に固執すれば『局面打開策』——に關する私案の意味に於て、さきに私たちの手によつて、敢て不遜の譏りをも顧みず、親愛なる全國の同志諸君および大衆の批判の前に捧げられたものであつたのだ。

## 七

顧みれば、今から約二年半前の春四月に、私が始めて舊勞働農民黨の使命を帶びて關西地方の大衆に接して以來、私は同地方と東京との間を往復したこと幾度に及んだかを知らない。そしてその間に、私をそこに送つた團體は、幾たびかその名を變へた。それは最初には今言つた舊勞働農民黨であつた。次には新黨準備會であつた。その次には政治的自由獲得勞農同盟であつた。今また私は、新勞農黨組織準備會の名に於て、宣傳のためまたそこにやつて來た。かうした追憶の糸を手繰つてゐると、私は瞬間的に私の眼前に、その期間に於ける我々の陣營の惡戰苦闘の歴史が繪卷物のやうに髣髴として展開されて行くのを見る。



更に想ふ。我々の陣營の名はさういふ風に幾たびも變はつたが、しかしその實體は依然として變らぬ舊勞働農民黨以來の勞働者農民の戰闘的同盟である。變つたといへば唯、後に來つたものが常に前に行つたものゝ發展した姿である、といふ一點だけである。そしてそれが、最近の、特に四・一六事件以後の、客觀的狀勢の急激なる變化——主體的條件の現勢との聯關に於ての——に照應して取らうとしてゐる新形態が、取りも直さず、來るべき新勞農黨の姿である。

かくの如く、幾度倒れても直ちに起きあがり、しかも倒れた時に大地から吸收した新しき力を以て、再び起きあがつた時には以前よりも遙かに强く武歩を進めることが出來る不死身の巨漢！ それは我々の陣營の象徴ではないか！ 若し我々が過去の經驗を回想せしめ得る我々の記憶と、現在の具體的事實を目擊せしめ得る我々の眼とに信頼することが出來るならば、我々をして新勞農黨の前途に無限の期待と希望を繫がしめよ！ （一九二九年十月）

# 勞農黨の樹立に際して同志へ！

## 開會の辭——勞農黨結黨大會に於て

同志諸君、さきに『新勞農黨樹立』の提案が全國同志の間に於ける大衆的討議によつて採用されてから、諸君は『闘爭を通じて結黨へ！』の根本の方針に從ひ、大衆と固く腕を組んで一路結黨闘爭に猛進して來られた。その努力が完全に酬ゐられて、今日全國の同志から送られた三百の代表者がこの一堂に會し新に勞農黨の旗を高く揭げ、闘爭の第一聲を擧げたことは、我吾を熱烈に支持した大衆と共に、我々の喜びに堪へないところである。だが我々にあつては、この喜びはこの瞬間から直に新しき闘爭への覺悟決心に轉換して行くのである。我々は如何なる苦難のたゞ中にあるときにも、未だ曾て勝利への希望を失つたことがないと同時に、如何に凱歌を擧げて居る瞬間にも、次の苦難の闘爭への準備を怠つたことはないのだ。

△

我々があらゆる犧牲を拂つて新に勞農黨を結成したのは、單に舊勞働農民黨時代以來の我々の陣營の建て直しのためばかりでなく、現下の産業合理化を前にして塗炭の苦しみに陷つてゐる



る勞働者農民の生活と自由の奪還のための闘爭を進行するためにもまた絶對に必要であつたからである。それは我々が當面の客觀的狀勢下に於て取るべき唯一の階級的に正しい道であつた。我々は今や新闘爭の第一歩を踏み出すに當つて、何よりもまづこの確信の上に立たなければならないのだ。だが、正しい道は常に安易な道ではない。政治運動はネヴスキーの大通りでないといふことは、今日では既に我々の耳に親しくなつてゐる言葉である。我々は常に我々の輝ける同志山宣の足跡を追ふ覺悟を持つてゐる。そして今日の光輝ある結黨式にも、その覺悟の下に進軍する誓ひを新にしなければならぬ。かくの如く、我々は我々の唯一の階級的に正しい道が同時に荊棘の道であることを知つてゐるが、しかし同時にまた我々は將來の希望に充ち滿たされてゐる。しかも、それには確實な根據があるのだ。

△

まづ第一に新に結成された勞農黨は、決して一朝一夕の急拵へのものでなくて舊勞働農民黨時代以來、わが陣營の實體をなして來た勞働者農民の戰闘的同盟の基礎の上に立つてゐるものである。そしてこの勞働者農民の戰闘的同盟は、わが國の資本主義發達の現段階に於ける必然の産物であつて、如何なる彈壓にも破壞されず、あらゆる水火の試練に堪へきたつて、今後も益々窮りなき發展を遂げようとしてゐるものである。わが勞農黨はその上に、しッかと足を踏

み据ゑてゐるのである。

△

次に、わが勞農黨は、全國幾萬の戰鬪的大衆の熱烈なる歡呼の渦卷の中にその姿を現したのである。我々は最近三ヶ月來の結黨鬪爭を通じて親しく大衆に接して、如何に大衆が抑へがたき喜びを以て勞農黨の更生を迎へようと用意してゐるかを沁々と知つた。否、たゞそればかりではない。大衆は今日、わが勞農黨を自分達の力で作り上げ、自分達の手で擁護して行かうとしてゐるのだ。これは、舊勞働農民黨の誕生の時には全然なかつたことで、ひとり今日に於てのみ始めて見られる新現象である。新に結成されたわが勞農黨は、その全組織全活動を當然黨內デモクラシーの基礎の上におかなければならないものであるが、我々はその準備が既に大衆の間に於てかくの如く完全に用意されてゐるのを見て、益々我々の確信を强めずにゐられないのである。

△

最後に我々は、我々の過去三年の惡戰苦鬪が、我々全國の同志および戰鬪的大衆をして、政治的技術に於て著しき進步を遂げしめたことを見てゐる。我々は我々の敵以上に優秀なる政治的技術を學び取らなければならないものであるが、我々はこの點に於て少くとも、既に十分



の成績を以て豫備教育を通過して、愈々本舞臺に登る資格を得てゐるものであることを信じてゐる。そして我々は、その政治的技術をこの瞬間からこの結黨大會に於て發揮しはじめなければならないのである。我々は今、我々の旗の上に輝ける文字を以て、全被壓民衆の日常利益の擁護伸張、勞働組合、農民組合の擴大强化、無產階級戰線の戰鬪的統一、政治的自由獲得鬪爭の目標を特筆大書し、殊に產業合理化および帝國主義戰爭に對する鬪爭の上に全鬪爭エネルギーを集中して戰ふことを誓つて、勞動者、農民、無產市民、植民地民衆と益々固く團結して勝利の行進を開始しなければならぬ。

△

我々はこの光輝ある大會を大膽に細心に嚴肅に護ることから我々の新鬪爭の第一步を踏み出さねばならぬ。諸君！　今日遠方からこの大會の勝利的成功を待ち望んでゐる全國幾萬の大衆は、また我々と共に彈壓の砲火を潛つて行かうと用意してゐる。我々はあくまでそれらの大衆の期待に副ふために全力的に努力しなければならぬ。（昭和四年十一月一日）

## 閉會の辭

△

親愛なる同志諸君！

昨日今日の二日間に亙つて、我々が輝かしき結黨大會を戰ひ取つたことは、お互に欣びに堪へないことである。我々が支配階級の何時もながらの彈壓以外、更に當面の複雜なる事情の下に置かれてあるにも拘らず、かくも見事な成功を收めることが出來たのは、畢竟するに、わが陣營に於ける鬪爭經驗の成熟と進步とを反映するものに外ならないのだ。と同時に私はまた、身を以てこの大會を守り我々をして安んじて議事に沒頭することを得しめた我々の精銳なる警備隊の犧牲的行爲に對して、この大會を代表して深き謝意を表することを許されたいのである。

△

同志諸君！　我々は長い間の惡戰苦鬪の末に、今日遂に敢然として『勞働者、農民、無產市民、植民地民衆諸君！　今こそ高く翻るわが勞農黨の旗の下に團結せよ』と宣言することが出來たのだ。これまで我々は『鬪爭を通じて結黨へ！』の方針の下に戰つて來たが、この瞬間から



は『結黨を通じて鬪爭へ！』と叫んで戰ひ進まねばならぬ。我々はこの大會に於てわが黨の綱領規約を決定した。我々の城砦はかくして立派に築きあげられ、我々の新なる旗はその上に掲げられたのだ。

△

わが黨が勞働者農民の戰鬪的同盟といふ、大地から生え拔いた堅牢無比の地盤の上に立つ以上、我々は最早十分に勝利の確信を以て前進することが出來る。それに關聯してこの大會で採用されたわが黨の政策が、單に掛け聲だけに終るやうな浮はついたものでなくて、徹頭徹尾現實味を帶びた、ビクビクと活きて動いてゐるものであり、今日からでも直ぐに實踐に移され得るものであることは、お互に誇りとしなければならないことである。

△

我々はかゝる政策を提げて立ち、他方わが黨の新組織方針および新運動方針によつて益々我の陣營を强化し、我々の戰野を擴大しなければならぬ。かくて、我々が一方資本家地主の陣營に對し、他方社會民主々義の裏切り行爲に對して決然と戰はなければならないことは無論だが、同時にまた我々は、かの口先で革命的言辭を弄するだけで、行動に於ては全然鬪爭を回避し、たゞ我々の階級的行動を妨害することのみを能事とするにすぎないやうな手合ひをも、我

我の新な相手として引き取つて戰はねばならないのだ。我々の立場が階級的に絶對に正しいものであることを確信する以上、かゝる極左翼の非階級的言動を克服することもまた、我々の當然の任務である。

△

同志諸君！　諸君が鄕里に殘して來た同志及び大衆は、今やこの結黨大會の勝利的成功のおとづれを聞かうと、鶴首して諸君の歸來を待つてゐるであらう。諸君は一時も早く工場に農村に歸つて、それらの兄弟たちと喜びを頒ちつゝ、層一層結束を固められたい。そして一年の後再び相會してその間の鬪爭の跡を語り合ひ、且つ進展して息まざる新鬪爭のための新方針を樹立しよう。私は、『今では諸君、左樣なら！　その時まで全力的に健鬪せられよ！』と叫んで別辭とする。最後に閉會に臨んで私は諸君と共に、結黨萬歲を三唱したい。（『異議なし、異議なし』の聲起り、全員起立。――）

勞農黨結黨萬歲！

萬歲！　萬歲！

（昭和四年十一月二日）



# 勞農黨の政策の必然性

## 一

我々は今明かに、民衆生活の危機ともいふべきものゝ前に立つてゐることを意識する。我々は無論、それが如何なる瞬間に如何なる形態に於て發現するであらうかを精密に豫言することは出來ないが、しかしそれが確かに潛在してゐることを痛感する。そしてこの認識が、我々の――日本の民衆の――すべてを、一種の不安な豫感に導く。だが、そこには同時に、一縷の希望の閃光も認められる。

すぐる世界大戰を通じて始めて『世界の惱み』を惱むことを學ぶに至つた日本の民衆が、それ以來今日に至るまでの間に持つて來た新たな國民的經驗は、單に異常にテンポが早く、且つ多岐多端のものであつたといふこと以外に、更に底知れぬ深刻なものでもあつたといふことは、一應は事實である。だが、一層適切にいへば、その眞の深刻味は尙ほ今後に保留されてゐるものであつて、しかもその或る時期に於ける××なき發現が必然×××に見えてゐるもので

さへあるのだ。

とにもかくにも、我々は今、世界大戰以來の一切の國民的經驗の總決算の前程としての空前の反動時代に直面してゐるのだ。そして、最近の十餘年間に亙つて着々と日本の民衆生活の間に養はれて來たあらゆる社會的新勢力は、當然その反動時代の大動搖裡に於てそれ〴〵その內部に蓄積して來た全エネルギーを傾け盡くして大車輪に活躍しつつ、意識的に無意識的に、やがて次に來るべき新時代の主導力となるべきことを競ふであらう。

私がわが勞農黨の政策の意識を概說しようとするに際して、特に以上の前置きを載せておいたのは、それによつて當面の問題に對する究極の觀點を豫め示しておかうとする意圖から出たものに外ならないのである。

## 二

わが勞農黨が提げてゐる政策は、既にその結黨大會に於て公表され、更に諸新聞紙によつて一般世間にも報道されたから、今玆でそれをその諸項目に亙つて一々繰り返す必要はあるまい、玆で必要なことは、寧ろその全體に通ずる根本精神を闡明することであらねばならぬ。

根本精神！　かうした漠然たる意味の言葉の使用は、人間の言語そのものゝ不完全性から餘儀なくなされたものだが、その眞意は恐らく讀者諸君によつて既に容易に把握されたことであらう。それは一言にしていへば、かういふことになる。すなはち、單なる政策の羅列は、唯それだけのものとして見れば、畢竟無意義千萬のものにすぎない。人は口に稅がかゝらない限り、如何なることをも自由に言ふことが出來る。ブルジョア諸政黨の『國利民福』の主張の如きは、さしづめその典型的な一例である。で、或る政黨が掲げる政策が持つ具體的意義の有無多少は、それの實踐に關聯して決定されねばならぬ。それは果して實踐に移され得るものであるか否か？　また如何に實踐に移されようとしてゐるものであるか？　等々が、その最終の尺度であらねばならぬ。かくして問題は結局、當該政黨の本質から見ての、その政策の必然性のそれに歸着する。從つて、またわが勞農黨の政策の根本精神の闡明も、わが勞農黨の本質から見ての、その必然性の問題に繫がつてゐるのだ。



## 三

そこで、先づわが勞農黨の本質から決めてかゝることが必要になつて來る。

この點に關して、たとへば『勞農黨はその本質に於て無產階級の解放の實現を期する一の政治的結社だ』などゝいつたやうな、通り一遍の概括的な說明を與へるだけでは、無論不十分で

ある。第一それでは、勞農黨を諸他の無產黨から區別する標識すら與へられてゐない。早い話が、誰が見ても勞農黨とは根本的に立場を異にしてゐる社會民衆黨の如きものでも、さうした文字を、たとひその實踐とは無關係にとは言ひ條、その綱領の上に麗々と掲げてゐるではないか！

わが勞農黨を諸他の無產黨から確然と區別するためには、その本質を今少し具體的な標識の上に求めなければならぬ。そしてこの見地から我々の確信を述べると、わが勞農黨は名實共に勞働者農民の戰鬪的同盟として、特に當面の客觀的狀勢に卽して、政治的任務を擔當し遂行しようとしてゐる團體である。

我々は舊勞働農民黨時代以來終始一貫して、わが國の資本主義發達の現段階に於ける勞働者農民の戰鬪的同盟の必然性および主要性を、意識的に明示的に極力强調して、且つ我々の全活動をその確立の上に向けて來た。この根本精神は、無論新たに結成されたわが勞農黨によつても、そのまゝ繼承されてゐるのみならず、益々明確に規定されてもゐる。從つて、その綱領、規約、政策、組織方針および運動方針の如き重要文書の上に於ても、わが黨が如何に勞働者農民の戰鬪的同盟の基礎の上に立つて全被壓迫民衆の日常利益の擁護伸張とその政治的自由の獲得とのために鬪はうとしてゐるかの一點を中心として、一切の規定がなされてゐるのだ。



かうした規定の具體的內容の一切は、舊勞働農民黨時代以來の我々の陣營の傳統的鬪爭精神――その具體的表現としての主張および實踐の、當面の客觀的狀勢の進轉に照應して發展した姿である。社會民衆黨の如きは、率直に『勤勞階級』の利益を擁護することを標榜してゐる點に於て、餘りにも明瞭にわが勞農黨と立場を異にしてゐる。また、さきの日本勞農黨および今の日本大衆黨は、その表面上の主張に於てわが勞農黨の立場に近きものを多分に示してゐるが、しかし仔細に檢討すれば、それは寧ろ、勞働者農民無產市民の聯合體を實體とする所謂『協同戰線黨』であることを本領としてゐるものであり、また同黨の實踐もそれに卽してゐるもの、如くである。かくて名實共に勞働者農民の戰鬪的同盟として全被壓迫民衆の生活と自由のために戰ひつゝ、絕えずその上に集中された彈壓の砲火の下に前進を續けて來たものは、ひとり舊勞働農民黨時代以來の我々の陣營あるのみだ。

## 四

尙ほ右の論點に附帶して、今一言附け加へておきたいことがある。かつて舊勞働農民黨時代に我々が勞働者農民の戰鬪的同盟の必然性および重要性を叫んでゐた場合には、我々は言はず語らず、その生成を將來の事實として見てゐた傾向があつた。ところが、今度の勞農黨の結成

を契機として、我々はそれを一の儼然たる既成の事實――よしその組織形態の上に幾多の缺陷を保存してゐるにもせよ――として見ることが出來た。それは、我々の陣營の外形が度重なる生滅の數奇なる運命を繰り返してゐた間にも、暗默の裡に着々として、より堅牢なる生成の一路を常に辿りつゝあつたのだ。わが勞農黨の結黨大會宣言は、この事實を次の如き印象的な言葉で表明してゐる。

『この勞働者農民の戰鬪的同盟こそは、わが國の資本主義發達の現段階に於ける必然の產物である。如何なる障碍もそれを××することを得ず、如何なる彈壓もそれを××することが出來ないのだ。從つてそれは今後にかけて尙ほ××に脈々として窮りなき發展を遂げようとしてゐるものである。』

そこにこそ、わが勞農黨の前途の無限の希望の實質的基礎があるのだ。だが、結黨大會の宣言をして右の一事に言及せざるを得ざらしめたものは、『新勞農黨樹立の提案』の發表以來、それを熱烈に支持してその具體的實現を可能ならしめたものは、實に默々として不斷の存續と發展を遂げつゝあつた右の勞働者農民の戰鬪的同盟の主體をなして來た全國の戰鬪的大衆であり、かくて我々の陣營の再建の完成はそれらの大衆の積極的努力なしには考へられない、といふ一箇の確實なる具體的事實そのものに外ならなかつたのである。



わが勞農黨の組織原理が黨内デモクラシーを基礎とする强力なる獨自の指導部の確立――民主的中央集權――を中心點として出發點としてゐるのは、一つには、わが黨の大衆的行動團體としての性質から見て當然のことでもあるが、しかしそれは同時にまた、我々の陣營の再建の難事業を完成したそれらの大衆の意識の生長および鬪爭經驗の成熟の現狀を表象してゐるものとしても見られなければならないものである。

## 五

かゝる堅牢なる勞働者農民の戰鬪的同盟の基礎の上に立つてゐることを自覺したわが勞農黨は、最早空中に書かれた文字を追うて狂奔するが如き態度を持續する必要を見なくなつたばかりでなく、反對にわが黨の政策を、その決定の瞬間から具體的な實踐に移し得られるやうな潑溂たる生命力に充ち溢れたものにする必要を意識した。

さうした政策が、單に無產階級の解放といふが如き一般的目標によつて制約されるだけでなく、それ以外に尙ほ當面の客觀的狀勢に卽しても決定されなければならないものであることは無論である。

當面の客觀的狀勢を詳論することは、今その場合でない。だが、極めて大づかみにいへば、

一方に於て、從前から支配階級によつて着々進められて來た産業合理化政策および帝國主義×××は、金解禁斷行の使命を高唱して出現した濱口内閣によつて益々精力的に續行され、その下に勞働者農民無産市民植民地民衆等々の一切の被壓迫民衆の生活と自由とは、刻一刻增大し行く危機に曝らされてゐる。しかるに他方、無産階級の陣列を見れば、その戰線が餘りにも分裂混亂の慘狀を示し、しかもその右翼および中間派は次第に支配階級の藥籠中のものとなつて、階級協調主義に急いでゐる。また、その戰鬪的左翼は、全線に亙つて一時は慘憺たる潰滅狀態に陷り、今や漸く勞農黨の結成を通じて一條の血路を開いたやうな有樣である。

我々の陣營が一個の合法政黨としてそれ自體を建て直したのは、如上の客觀的狀勢の下に、それが勞働者農民の戰鬪的同盟として持つ當然の任務だる政治行動を大衆的規模に於て遂行しようとする意圖から出たものである。從つて、それがそれ自體の今後の行動を直接に支配するものとして採用した諸般の政策もまた、同じ見地から決定されたものである。そして、さうした政策はまた、名實共に儼然たる一個の勞働者農民の戰鬪的同盟として立つわが黨の行動を通じてこそ、始めて潑溂たる生命力に充ち溢れ、且つその實現の可能性を持つものでもある。

## 六



極めて廣汎な領域に亙るわが勞農黨の政策の諸項目に通ずる根本精神は、四箇條から成り立つてゐるわが黨の綱領によつて、極めて簡明に要約されてゐる。卽ちそれは、第一にわが黨が勞働者農民無産市民その他一切の被壓迫民衆の日常利益の擁護伸張のために鬪ふことを言ひ、第二にわが黨が勞働組合農民組合の擴大强化をその最も重要なる任務としてゐることを言ひ、第三にわが黨が無産階級戰線統一の實現を期してゐることを言ひ、第四にわが黨が全被壓迫民衆の政治的自由獲得のために鬪ふことを言つて全體の結語としてゐる。

右のうち、第二の勞働組合・農民組合の擴大强化に關する項目は、勞働者農民の同盟として立つわが黨の内部の鬪爭力の充實のための方針を特說したものである。我々の陣營が先に田中反動内閣の手によつて與へられた再三の徹底的大打擊の後に、かくも急速に再建の日を見るに至つたことは、一般人の常識では殆ど奇蹟とも思はれることであらうが、しかし、それは畢竟、わが國の資本主義發達の現段階に於ての勞働者農民の戰鬪的同盟の生成の必然性と、その底力の事實上の根强さとを反映してゐるものにすぎないのである。だが、我々は同時に、我我の陣營が今尙ほ右の徹底的大打擊の創痕を多分に保有してゐることを率直に認め、且つ一刻も早くそれから全的に恢復するために努力すべきことの必要を意識してゐるのだ。さらに他方に於て我々はまた、勞働者農民の戰鬪的同盟としてのわが黨が、現在その組織形態の上に於て

持つ幾多の缺陷を認め、そしてその將來に於ける完全なる發達の見通しを、結黨大會に於て採用された組織方針の中に特記してゐるのである。それ故に我々は、わが黨の內部の闘爭力の充實を當面喫緊の急務とし、それに關聯して、わが黨が如何に勞働組合・農民組合の擴大强化を最も重要なる任務としてゐるかを、その綱領の一項目として示してゐるのだ。

だが、わが黨の內部の闘爭力の充實の要因としての組織の確立の速度が、わが黨の實踐を通じての大衆的日常闘爭の强力なる展開と、相互的に緊密なる因果關係に立つてゐるものであることもまた無論である。更にまた、わが黨が强力に展開しようとしてゐるその大衆的日常闘爭は、全被壓迫民衆の日常利益の擁護伸張とその政治的自由の獲得とを主要目標としてゐるものであるが、當面の極端なる反動時代に於けるかゝる闘爭の必然不可避性とその一般的重要性とは、勞働者農民の戰闘的同盟としてのわが黨への廣汎なる無產市民層の大衆の積極的支持・應援・參加の趨勢の漸進的增大を保證するであらう。

## 七

最後に、全被壓迫民衆の日常利益の擁護伸張のための闘爭と、その政治的自由獲得のための闘爭との間の聯關性について一言する。



この一點は、從來左翼の陣營の內部に於ても、屢々閑却されたり、機械的に解釋されたりしてゐたものである。殊に政治的自由獲得闘爭は、少くとも過去の時期に於ては屢々、單に抽象的に絕對主義に對する闘爭として規定されるだけに止められ、しかもその進行過程に於てブルジョアジーの進步的部分との提携が必要だ、などといふやうなことすらが眞面目に主張されたやうなこともあつた！　かゝる主張の反面に於ては、現在のわが國のブルジョアジーの殆どすべての部分が、既に完全に絕對主義と融合して十分に政治的自由に飽和するまでになつて來てゐるといふ事實が忘れられてゐたのだ。或ひはまた、勞働者農民無產市民の政治的自由は無產階級の政治的勝利の後に於てのみ始めてその完全なる獲得が期待され得るものだといふ一點のみが主張されて、その結果、當面の反動時代に於て全被壓迫民衆の政治的自由の內容をなす各部分が一步一步と戰ひ取らるべきことが如何に必要であり、またそれが或る程度に可能なものであるかゞ、常に閑却されがちであつたこともある。いづれにしても、大衆の日常利益の擁護伸張のための闘爭と政治的自由獲得のための闘爭とが別々に引き離して考へられる傾向が、一時可なり顯著に見えてゐたことは、我々が直接に見聞した事實である。だが、我々——少くとも私自身——は、初めからその傾向に反對して、兩者の緊密なる相互聯關性の見地から、生活の戰ひは自由の戰ひであり、自由の戰ひは生活の戰ひであることを絕叫して來た。そして、

この點は、今や勞農黨の一般活動方針の上に於ても、特に重要視され、强調されるに至つた。

かくてわが黨は、たとへば失業問題に對する闘爭、立入禁止立毛差押に對する闘爭、惡稅撤廢、家賃地代値下のための闘爭、等々その他無數の大衆の日常利益の擁護伸張のため闘爭をも、その必然的聯關に於て、政治的自由獲得のための闘爭に結びつけ、また逆に、言論、集會、出版、結社の自由のための闘爭、選擧權擴張のための闘爭、治安維持法を始め一切の無產階級抑壓諸法令の撤廢のための闘爭、等々その他無數の政治的自由獲得のための闘爭をも、如上の大衆の日常利益の擁護伸張のための闘爭との聯關に於て戰ひ拔き、殊に當面、產業合理化および帝國主義戰爭の危機に對する闘爭の上に、我々の全闘爭エネルギーを集中しようとしてゐるのだ。そして、かうした方面の活動に於て、わが黨がその大衆的日常闘爭との緊密なる聯關に於て、議會への進出を遙かに從前以上に重要視するやうになつて來た理由をも、人は容易に首肯するであらう。

かゝる闘爭の必要のうちから不可抗的に產まれて來た諸般の政策を提げて、今やわが勞農黨は當面の反動時代に處して、それが勞働者農民の戰闘的同盟として持つ重要なる政治上の役割を效果的に果たさうとしてゐるのである。（昭和四年十二月）



# 立候補に際して

このたび私は、わが勞農黨の決議により、黨の一公認候補として當第五區から打つて出ることになりました。私は黨の統制と大衆諸君の支持の下に、必勝を期して、日夜各處に轉戰してゐます。就いてはこの際、特に茲に立候補の趣旨を述べて、貴下の御聲援を希求する次第であります。

## 一

濱口内閣は遂に金解禁を斷行しました。大金融資本家たちは、今こそ時を得顔に祝盃を擧げてゐます。だが、同時に一般大衆の生活は益々苦しくなつて來ました。際限もなく擴がり行く不景氣の波。容赦もなく荒れ狂ふ失業の嵐。かてゝ加へて、國家財政は帝國主義戰爭の準備のために年々膨脹して、民衆は堪へがたき負擔に呻吟してゐます。勞働者、農民、俸給生活者、小賣商人、手工業者などの一般大衆は、日々窮乏へと追ひやられてゐます。かうして今や、都市に農村に、工場に街頭に、至るところ生活苦からの不平不滿の聲が充ち滿ちてゐます。

かゝる際に、第五十七議會は解散されました。總選擧は今全國に行はれてゐます。一般大衆は如何なる覺悟を以て、それに臨むべきでありませうか？

この問ひに對して、わが勞農黨は、次の中心スローガンを以て答へてゐます。

解雇・賃銀値下絶對反對！
失業者に食と仕事を與へよ！
土地を農民へ！
稅金は資本家地主が負擔せよ！
勞働者農民の政治的自由獲得！
帝國主義戰爭絶對反對！

## 二

勞働者諸君！　農民諸君！　俸給生活者諸君！　小賣商人諸君！　手工業者諸君！　――一般大衆諸君！　私は諸君に呼びかける。今こそお互に、資本の攻勢に對してお互の共通利害を護るために、固き一團となつて奮ひ起つべき秋ではないでせうか？　かの幾多の疑獄事件に醜態の限りを暴露した既成政黨は、いくら内輪喧嘩に浮き身をやつしてゐても、一般の無産大衆



に對しては、一齊に鉾先をそろへて攻めかゝつてゐます。搾取、抑壓、欺瞞政策を計畫し實行する點にかけては、民政黨といはず、政友會といはず、一切の既成政黨の間に何等の差別はないのであります。それ故に諸君！　大衆の生活と自由とは大衆みづからの手で擁護伸張するより外に途は絶對にないのであります。かゝる狀勢を前にして、わが勞農黨が高く掲げた右の中心スローガンこそは、大衆諸君が心の底から叫ばうとしてゐる要求を最もハッキリと言ひ現してゐるものでなくて何でありませう！

## 三

由來わが勞農黨は、口で言ふところは必ず實踐に移すことを、その中心生命として來ました。舊勞働農民黨時代以來のわが陣營の鬪爭歷史がそれを證明してゐます。わが陣營から幾多の貴き犧牲者を出したのも、一にそのためであります。殊に昨年の議會の會期中に鮮血に塗れて倒れた同志山本宣治の壯烈なる最期こそは、わが勞農黨のその鬪爭精神の美事な結晶であります。かくて彼は、わが解放運動史上に大いなる足跡を殘し、勞働者農民の心の上に不朽の記念碑を打ち樹てました。この輝ける同志の態度こそは、我々全黨員の行動の誤らざる規準を示したものであります。それ故に私もまた、どこまでもその模範に從つて進退し、大衆鬪爭に、議會

闘爭に、あらゆる場面に於て、身を以て無產大衆の解放のために戰ふことを誓ふものであります。

選擧は大衆の意識の試金石であるとエンゲルスは言ひました。私は、めざめたる大衆諸君が、その聰明なる批判によつて、今わが勞農黨が展開しつゝある生活と自由の戰ひに來り加はつて、その勝利への堂々たる行進を共にせられるであらうことを熱望し、かつ確信するものであります。

昭和五年二月



# 總選擧戰の渦中から

今、轉戰最中なので、中々轉戰記を書いてゐる暇などはありません。已むを得ず、寸暇をぬすんで、轉戰中の感想一片を記してそれに代へます。

○

『大衆の時代來る！』――

今こそ『大衆の時代來る！』といふ感じが、むく〳〵と湧き起ります。私たちは、毎日數千人の大衆に呼びかけてゐます。多い日は、一ト晩に三・四會場を通じて一萬人以上の大衆に接することもあります。

かゝる大衆がつくる空氣は、凄いほど眞劍なものです。まことに歴史を創る力はそこから迸り出るものでなければならないこと、泌々と感じさせられます。さうした場面へ立つとき、私たちの胸は感激で一杯になります。そして、『この大衆の中こそ、我々の生死の場處だ』と、心から自分自身に言つて聞かせます。

○

いつも念頭から離せないことは、我々の政策は、たゞ我々自身だけのものであつてはならない、といふことです。否、それはまた、たゞ單にわが勞農黨だけのものであつてもならない。それは大衆のものでなければならない。――かういふ心持で、私たちは大衆に呼びかけてゐます。

○

大衆の意識の成長は驚くべきものがあります。大衆の批判力の進歩は、著しく眼に立ちます。大衆運動に於ける大衆自身の自己訓練も非常に進んで來たと思ひます。大衆は段々と、自分自身のなすところを知らないやうな盲目的な大衆でなくなりつゝあります。我々は、『大衆こそ最も信頼すべき最後の審判者だ』といふ我々の當初からの信條の、決して誤つてゐないとの確信を、刻々ますゝ強めて行くばかりです。

○

大衆を欺瞞するものゝ罪こそ最も憎むべきです。人氣取り、景氣づけ、場當り、かうした態度で大衆を引ッ張り廻さうとするものは、實は大衆を愚弄するものです。それはよし一時的の成功を收め得ようとも、究極には大衆の審判が必ずその上に下されます。大衆は決して永久的に欺瞞し了ほせられるものでもなく、愚弄し了ほせられるものでもない。大衆の意識の成長は



必至的です。よし多少の時間の經過がそれに必要であらうとも、來るべきものは必ず來ます。我々は今それを、まざゝと眼前に見てゐます。我々の過去の多年の鬪爭經驗が我々の腦裡に最も深く彫りつけてゐるものは、大衆の意識の向上線の一路です。それは我々をして、肅然として襟を正さしめる力を持つてゐます。

○

大衆の批判は直ちに行動に轉化します。我々が今日の反動の嵐のただ中に、たとへば幾分でも言論の自由の範圍を擴張し得た實績を收めたとすれば、それは無論、大衆の壓力の結果に外ならないのです。實際、滿場立錐の餘地なき大會場内にあつて、人はひたむきに大衆の威力を感じないで居られません。『これに逆ふものは亡ぶ。』――かういふのが、その場での誰しもの印象でなければなりません。

○

我々はあくまで勞働者農民の戰鬪的同盟の上にしッかと足を踏みしめ、全彼壓迫大衆の日常利益の擁護伸張とその政治的自由獲得のために資本家地主の政權と戰ひます。大衆鬪爭に議會鬪爭に、我々の態度方針に二つありません。

だが、忘れてならないことは、全彼壓迫大衆こそは、同時に無限の可能性をもつ新興勢力だ

といふことです。大衆の利益を擁護伸張するといふことは、同時にその新鋭の偉力を發揮するといふことです。それは今や、まざ〳〵と發揮されつゝあります。この總選擧戰を通じて、我我は大衆の力の新なる一大飛躍を、日々現實に見てゐます。

『大衆の時代來る！』この考へに勵まされて、私たちは日々新たに勇氣に充たされつゝ、欣然として大衆の渦卷の中に飛び込んで行きます。（昭和五年二月）



# 選擧鬪爭から議會鬪爭へ

## ——大衆との固き握手の下に——

### 一

總選擧は終つた。わが勞農黨は全國に十二名の候補者を立てゝ戰つたが、その結果はたゞ一名だけが當選者としてブルジョア議會に送り込まれることになつた。幸か不幸か、その一名といふのは外ならぬ私自身である。

勞農黨からブルジョア議會に送り込まれた唯一人の代議士！　第五十八議會に於ける私の地位の、孤立的であることよ！　それは恰度、我々の逝ける同志山本宣治の第五十六議會に於ける地位が孤立的であつたやうに。

だが、同志山宣のその地位がいかに孤立的であつたことかは、毫も彼を怯ませる力を持たなかつた。否、それは却つて彼の鬪志を益々鋼鐵の如くに鍛ひあげた。彼が死の直前に吐いたところの、かの歷史的に記念されるべき一語は、その事實を一點の疑ひを挾む餘地もないやうに

裏書きしてゐる。即ち彼は、昨年の三月五日、大阪で開かれた全國農民組合第二回大會に臨んで一場の祝辭演說を試みたが、その中に於て彼は、いはゆる無產黨議員團の非階級的態度に觸れた後、次の如く附け加へた。

『山本宣治たゞ一人孤壘をまもる。私は一人でも淋しくない。背後には大衆が支持してゐるから。』

凜として高く響いたこの一語は、今尙ほ我々のすべてを奮ひ起たしめる。殊に、今やわが勞働黨の使命を帶びてブルジョア議會に一歩を踏み入れようとしてゐる私自身は、それから無限の激勵と鞭韃を受けてゐることを感じる。といふのは單に、その言葉自體が同志山宣の壯烈な覺悟を明確に言ひ現してゐるからといふだけではなく、それは同時に、わが黨選出の議員の議會內に於ける一切の行動が大衆の意志の反映であり、あらねばならぬことを、確信を以て表白してゐるからである。

いふまでもなく、わが黨が議員を議會內に送り込むのは、わが黨の指導の下に行はれてゐる大衆鬪爭の一尖端をそこに送り込むといふ意味に於てゞあつて、それは斷じて、ブルジョア議員連を相談相手にして、彼等の手を通じて大衆の要求を貫徹しようといふが如き企圖からではない。ブルジョア議員連が刻一刻、資本家地主の利益の擁護者としての本質を益々露骨に發揮



するやうになつて來てゐる今日の反動時代に於て、偏に彼等の手を通じて大衆の要求を貫徹しようといふやうな考へが、畢竟、愚人のパラダイスにもふさはしき一片の幻想にすぎないことは、意識の進んだ大衆が、既に十分に知り盡してゐることだ。それを知らないやうに見えるのは、たゞ社會民主々義政黨の幹部諸君だけである。であればこそ彼等は今日の情勢下に於ても依然として性懲りもなく議會內に於ける絕對多數の甘夢に陶醉して、議會外に於ける無數の大衆に信賴することを全然忘却してゐるやうに見えるのだ。

かゝる際に、同志山宣の聲は雷の如く響いた。『私は一人でも淋しくない。背後には大衆が支持してゐるから。』この不動の確信の上に立つてゐるからこそ、彼は最後に白色テラーの犧牲となつて倒れた瞬間まで、終始一貫して、あれほど勇敢に戰ふことが出來たのだ。私はあくまで、彼の態度を學ばねばならぬ。議會內に於て大衆の要求を戰ひ取るためにも、またその前提として暴露戰を效果的に敢行するためにも、ブルジョア議員連は斷じて私の協同者ではあり得ない。私は一切の希望を議會外の大衆の支持の上に懸ける。帝國議會の門扉は、よし形の上でこそ大衆の進入を喰ひ止め得ようが、どんな隙き間からでもドン／＼と浸透して來る大衆の壓力を如何ともすることが出來ないであらう。そして、それに賴つて立つ時のみ、一人では微力な存在に過ぎない私自身も、亡き山宣の如く力强く戰ひ進むことが出來るであらう。少くとも

さういふのが、今の私の衷心の願望である。

しかも私は、總選擧に於ける我々の鬪爭を通じて、益々大衆の支持に對する信賴を深めることが出來たことを、私の大いなる喜びとしてゐる。それは疑ひもなく、我々の選擧鬪爭の最も主要なる收穫の一つであつた。

## 二

總選擧が終局に近づきかけた頃から、私は頻に『大衆の壓力』、『大衆の勝利』、『大衆の時代來る』、等々の言葉を絶叫した。私はさう絶叫せざるを得なかつた。私は大衆が私にさう絶叫させてゐるやうに感じた。さういふことは私にとつては、一箇の抽象的概念ではなく、具體的事實の認識であつた。そしてそれは、今も私の確信となつて殘つてゐるものである。

殊に東京府の第五區に於ける我々の勝利は、單にわが勞農黨だけの勝利といふよりは、寧ろ大衆の勝利といふべきものであることが、最も明白である。だが私は、わが勞農黨の全國に於ける、全國を通じての選擧鬪爭の成績についても、大體一律に同樣のことが言へることを確信してゐるものである。

それについては、まづ第一に、わが勞農黨の今回に於ける選擧鬪爭が、如何に異常な不利の



狀勢の下に戰はれたかゞ注意されねばならぬ。わが勞農黨は文字通りに舊勞働農民黨の戰鬪的傳統を繼承し發展せしめてゐるものとはいへ、しかも田中反動內閣の手によつて幾度かその陣營を破壞された後を受けて、漸く昨年の十一月の初めに結黨式を擧げたばかりである。それから三箇月も經たない間に議會が解散された。我々はその間に我々に支持聲援を與へた大衆と共に極力組織の確立と戰鬪力の充實に努めて來たが、しかもその事業がやつと緒に就きかけたばかりのところで、慌しくも今度の總選擧に直面したのである。

總選擧は、我々に取つては、組織の確立および戰鬪力の充實のために一の絶好機會として利用されるべきものに相違ないが、しかし我々が殆ど全然の無準備のまゝでそれに臨まなければならなかつたとき、それは同時に我々には苦難にみちた一大試練の如く感ぜられた。我々はまづ金力の點に於て文字通りに無準備であつた。如何に我々の選擧には比較的に金が要らないと言つたところで、それが無一文で出來るものでないことは、いふまでもないことだ。我々は突嗟の間に、さうした心配からして掛らなければならなかつた。更に我々は、權力からも見離されてゐる。否、單に見離されてゐるだけでなく、最も徹底的に金融資本の利益に奉仕する濱口內閣の反動政治の下に於て、我々こそ權力の壓迫を最も全面的に受けてゐるのだ。最後に我々はまた、既成諸政黨および他の無產諸政黨から來る猛烈な逆宣傳の嵐に逆つても進まなければ

ならなかつた。

かゝる狀態の下に於て、我々が最後の頼みとして期待し得たところのものは、たゞ大衆の熱烈な支持聲援以外には絶對に何物もなかつた。幸にも、我々のこの期待は完全に酬いられた。いかにも我々は全國に亙つて唯一名の當選者をしか出さなかつたことは事實であるが、しかし我々が十二名の候補者を立てゝ約七萬九千の總得票數——候補一人につき平均六千四十二票——を收穫したことは、相當に重要視されなければならぬ。これを前回我々が舊勞働農民黨として四十名の候補者を立てゝ克ち取つた十八萬七千餘票——候補者一人につき平均四千六百七十六票——の總得票數に比較すれば單に形の上だけでも、斷然進歩の跡を示してゐるのだ。

さらにまた、我々は各選擧毎に新分野開拓の絶大努力をしなければならないが、既成諸政黨はこれに反して、過去四十年以上に亙る絶えざる策動によつて、選擧地盤の網を全國の隅々にまで張り廻してゐるのだ。それ故に、我々の手によつて得られた一票は、既成諸政黨によつては完全に失はれた一票を意味する。しかも既成諸政黨が代表してゐる資本家地主の階級は殘照の如き輝きを見せつゝも早晩必ず來るべき沒落に運命づけられてゐる舊勢力であるが、我々が代表してゐる無産階級は、これに反して今や旭日の如く堂々と中天に昇りつゝある新興勢力である。かうした諸事情を併せ考へるとき、我々は必然に、我々が得た一票は既成諸政黨が握つ



てゐる幾千票あるひは幾萬票に匹敵するものとして評價せざるを得ないのだ。

いふまでもなく、今回の總選擧に於ても、例によつて例の如く、政府および既成諸政黨の側から、干渉や買收の魔手が縱横に延びたことは否定できない事實だが、しかし我々は、この醜惡なる事實の前に落膽するよりは、寧ろさうした干渉や買收の齒が立たない階級的意義ある票が幾十萬にも殖えたことを喜ばねばならぬ。それは大衆が勝利への途上に於て確實に踏みしめた前進の一歩を鮮かにしるしづけたものでなくて何であるか。

## 三

我々が過ぐる總選擧期間を通じて東京府第五區で持つた百回餘の演說會を目指して潮の如く來り集つた大衆は、約十五萬人を算へた。で、私は多い日は一萬五千人以上の、少い日でも數千人の大衆に呼びかけることが出來た。私は日々それらの大衆と共通に心臟の鼓動を感じたことを心から感謝した。それらの大衆は、我々が、今日資本の攻勢の下に益々塗炭の苦しみに喘ぎつゝある勞働者・農民・無産市民・植民地民衆・等々の一切の被壓迫民衆の生活と自由のために鬪ふことを誓つたとき、我々に割れるばかりの聲援を與へた。さらにそれらの大衆は、當面喫緊の問題として、支配階級の金解禁の善後處置としての產業合理化政策が必然に促進すべき失

業の洪水に對する闘爭、帝國主義戰爭のための一切の政策に對する闘爭、等々の主張に向つても、熱烈火の如き共鳴を我々に送つた。否、それらの大衆は、寧ろ積極的に、我々をしてさうした主張を絶叫せしめなければ已まないほどの意氣込を示したのであつた。さうしたところに、私は大衆の意識の成長をまざ〳〵と見ることができた。

一昨年の總選擧の頃には、我々は主として演壇の上から啓蒙的な說話をすることを我々の任務としてゐた。また當時の大衆は、それを我々に望んでゐたのだが、今日の大衆は、著しく變つて來てゐる。今日の大衆は、演壇の下から我々を鼓舞激勵して、大衆自身の要求を叫ばしめる。そして重要なる各瞬間毎に、自發的に嵐の如き拍手を送ることによつて、場内に焰の如き氣勢をあげる。かつて我々は、自黨のフラクションを聽衆の中に入れてさうした效果を擧げることに努めてゐたが、今日では最早、その必要が全然——少くとも東京地方では——なくなつた。大衆の自己訓練はかくまでに進んだのだ。それに大衆は屢々自律的行動にも達して來たことを自ら證明した。我々はその實例を幾らでも提供することができる。

我々は過去三年間の不斷の闘爭の過程に於て、大衆の意識の成長の跡を明かに見て來た。だが、私は今回の選擧闘爭を通じてのやうにそれを息づまるほどに感じたことは、かつてなかつた。尤もその最も代表的な現れは、今日のところではまだ東京、大阪、等々の如き最尖端に立



つ二三の大都市に限られてゐるといふのが、或は正當であるかも知れない。だが、今日東京や大阪に於て最も集中的に見られるかうした傾向が、明日は各方面に波及して、やがて必然に全國的現象となるであらうことは、我々から見れば、たゞ時間の問題であるだけだ。

さらに注意すべきことは、かうした大衆の意識の成長が、田中反動内閣時代以來の酷烈を極めた彈壓の下に遂げられたることである。權力は大衆の意識の成長を阻止するためには全然無力であることを自ら證明した。資本の攻勢が强まるだけづゝ大衆の反抗心が進む。かくて大衆の力は、反動の嵐の中に育まれつゝグン〳〵伸びてゆくのだ。

わが勞農黨が、今回あらゆる不利の狀勢の下に選擧闘爭を戰つたにも拘らず意想外の好成績を擧げて、そこから直ちに選擧後の組織の確立、および戰闘力の充實に向つて躍進することが出來るやうになつたのは、偏に意識の進んだ大衆の支持聲援によるものである。それ故に我々は、わが勞農黨の勝利は同時に大衆の勝利であることを强調して、心からさうした大衆に感謝することを忘らないのだ。

## 四

久しく和やかな日の照る道をのみ歩んで來た社會民主々義政黨の幹部諸君は、今回の總選擧

に於ける自黨の敗績に驚いて、樣々の泣き言を竝べてゐる。彼等の或るものは『日本では無產黨が議會に進出するには、まだ時期が早やすぎるのだ』など丶捨て鉢を言つてゐる。他の或るものは、『民衆はなぜ目ざめないのか？』など丶愚痴をこぼして、自己の落選の責任を大衆に轉嫁しようとしてゐる。

だが、無產黨が、全體として前回よりも三萬票以上も多い五十萬四千餘に上る總得票數を克ち取つたにも拘らず、その代議士當選數が八名から五名に低下したのは、一つにはいはゆる中選擧區を基準とする我が國の現行の選擧區制が政府のマニューヴァーのために都合よく出來てゐるからである。ブルジョア諸新聞は一齊に、それは無產黨各派の候補者の濫立、對立、並立の結果だと論じてゐるが、さうした批評は必ずしも的に當つてゐない。殊に、無產黨各派間の指導精神の差異が、既成諸政黨間のそれの差異以上に大きいといふ事實に考へ及ぶとき、我々は、さうした批評は全然無意味だとさへも結論せざるを得ないのである。それにしても、無產黨が全體として克ち取つた總得票數そのものが豫想外に少なかつたとはいへるし、そしてその主たる要因が、無產黨各派中最も有利な地位に於て選擧を爭つてゐたやうに見られた社民黨の意外な不成績にあつたといふことも事實である。だが、社民黨のこの不成績は、同黨の幹部の一人が言つたやうに大衆が目ざめてゐないためでは斷じてない。大衆は同黨の幹部諸君が希望



してゐた以上に目ざめてゐた。だからこそ、民政黨の急進派以上には決して出てゐなかつた彼等の社會民主々義的　場が大衆によつて可なり聰明に批判されて、その結果が同黨の慘敗となつて現れたのだ。

その外に尙ほ無產黨全體の總得票數の意外に少なかつたことの原因として擧げられるものとしては、政府および既成政黨の側からなされた干涉や買收もあれば、議會內多數決萬能主義の欺瞞もある。前者は將に說明する必要はないが、後者は簡單にいへば、議會內に於て多數を擁する大政黨でなければ決して如何なる政策をも完全に實行することが出來るものでない、といふやうな主張である。それは、大衆的日常闘爭主義の基礎の上に立つてゐるわが勞農黨の主張とは根本的に異つてゐるが、しかし本質上議會萬能主義を固守してゐる社會民主々義政黨の幹部諸君の主張とは同一範疇に屬するものである。それ故に、社會民主々義政黨の幹部諸君は、理論上それに向つて眞ッ額から反對することが出來ないのだ。それに今一つ、現行の選擧法に於ける選擧權獲得のための資格の制限――殊に性および年齡による制限が、どれほど無產黨のために不利に働いて居るか知れないのである。若しわが勞農黨がその政策の上に掲げてゐるやうな、十八歲以上の男女の選擧權獲得の要求が貫徹されたら、無產黨の躍進は一層めざましいものがあらう。しかも社會民主々義政黨の幹部諸君は、さういふことは一切眼を吳れよ

うとはしないで、只管自分達の敗因を選擧戰術の誤謬といふやうな枝葉末節の點に押ッ附け、果ては『民衆はなぜ目ざめないのか？』と飛んでもないことまでを言ひ出して、自分達の非階級的な意識を大衆の不明にすり換へようとする！

否！　我々はあくまで大衆を信賴する。我々は一切の希望を、大衆の意識の成長とその行動の增進の上にかける。私は今、大衆闘爭の一尖端として、勞農黨から送られてブルジョア議會に入らうとするに際して、切に亡き同志山宣のあの歷史的な言葉を思ひ浮べて、それを幾度となく心のうちに繰り返す。――『私は一人でも淋しくない。背後には大衆が支持してゐるから。』

## 五

他方更に、濱口内閣の欺瞞政策は、刻一刻ますゝその内的矛盾を暴露しつゝ、やがては破綻百出の窮地に陷るべく運命づけられてゐる。そして事態のかゝる必然　進行は、今後層一層大衆の政治意識の目ざめを促進し、その積極的行動の要求に强力なる拍車をかけることなくして已まないであらう。

今回の選擧に於て、民政黨が衆議院の絕對多數を制したのは、一つには田中政友會内閣の陰



慘を極めた反動政治に對する大衆の反感が民政黨のために有利に働いたためでもあるが、また一つには濱口内閣の欺瞞政策の一時的奏效のためでもある。だが、かゝる狀態は到底永續しないであらう。否、總選擧の終了後からまだ幾日も經たない今日に於て既に濱口内閣はその政策の實行に關して深刻なる難局の上に立つてゐることが明かに見られる。

それは當然のことである。濱口民政黨内閣は田中政友會内閣以上に、金融資本の利益の擁護に徹底してゐる。もとより兩者は共に、本質的に資本家地主の政府として、特に現段階に於て金融資本の支配の確立に沒頭し來つたといふ根本の一點に於ては毛頭變りがないが、しかも、その實際上の施設に於て、濱口内閣が田中内閣以上に斷然積極的であることは、後者が久しくその前に遲疑逡巡した金解禁を、前者が一ト思ひに斷行したといふ一事實によつても、極めて明瞭に看取され得るのだ。たゞ濱口内閣は、その手段に於て極めて陰險巧妙であつて、かの田中内閣が露骨に彈壓政策を大上段に振りかざしたやうな遣り口とは全然行き方を換へて、一種の自由主義の假面を冠つて、ともかく現在までは何とかして表面を糊塗して來た。だが、濱口内閣の金融資本家の利益擁護の政策は、この上際限もなく全被壓迫民衆の日常利益を犧牲にすることなしには到底完全に實現し得られるものでない。しかも、今日までに於て既に窮乏の深淵に追ひ詰められて來たことを痛感してゐる全被壓迫民衆は、これ以上いつまでも負擔の加重

に堪へ得るものではない。この點に於て、濱口内閣の政策は明かに不可避の破局に直面してゐる。

否、今日までに於ても、濱口内閣の政策は、隱微の間に既に幾多の破綻を示して來た。その最も代表的な一例は、濱口内閣がその最高政策の上に麗々しく掲げてゐる失業救濟の實績の上に見られる。かの一月二十一日の議會解散の日に濱口首相が試みた施政方針演説の中には、政府が如何に事業調節委員會を通じて失業問題を緩和し、また如何に六大都市に於ける土木事業によつて多數の失業者の救濟に成功したかゞ、盛に吹き立てられてある。だが、實際に於ては、政府のさうした一切の施設は、燒け石に水ほどの效果をすらも齎し來らなかつた。濱口首相が傲然と議會を睥睨して鼻高々とその施政方針演説を放送してゐた間に、日本の津々浦々には、巷に滿つる無數の失業者群が口々に、『食と仕事を與へよ』の悲痛なる叫びを擧げてゐたのだ！

しかも濱口内閣がいはゆる金解禁善後策の中心的地位に祭り上げてゐる産業合理化政策は、今後一層大規模に於て失業者群を生産するに決つてゐる。そして、それは疑ひもなく、來るべき臨時議會に於ける最重要問題となるであらう。私自身は、議會外に於ける大衆の支持聲援を唯一の心頼みにして、あくまで精力的にそのために戰ふことを誓ふものである。



## 六

濱口内閣の政策のうちに含まれてゐる多岐多端の内的矛盾の今一つの好適例は、例の中小商工業者の保護の聲言の上にも現れてゐる。濱口内閣の産業合理化政策は、明かに企業の合同聯絡への傾向を辿つてゐるものであり、從つてそれは必然に中小商工業者の沒落を將來しようとしてゐるものである。濱口内閣は、一方にかゝる政策を取りつゝも、他方に於てそれと全然反對の方向にあることを行はうといふのだ。そこに救ひがたき矛盾が含まれてある。しかも、今日濱口内閣が計畫しつゝあるといはれてゐる中小商工業者に對する金融機關の設置の如きも、金融資本の統制下に於て一切の中小商工業が急速に大企業に併呑されてゆく大勢を如何ともすることが出來ないであらう。そしてたゞかくして大資本によつて壓迫される中小商工業者が、さしづめその負擔と苦痛を勞働者の肩の上に轉嫁するといふのが、最も直接的な結果であらねばならぬ。いづれにしても助からないのは勞働者である。

かゝる方面に於ける濱口内閣の政策は、それが單なる聲明を離れて現實の問題となるに從つて、次第にその内的矛盾を露出するやうになるであらう。だが、かう云つてゐる瞬間にも、濱口内閣が組織以來の一枚看板にして來たいはゆる緊縮政策に一大痛擊を加へた現象が突如とし

て眼のあたりに現れて來た。それは、かういへば何人にも察しがつくであらう通りに、外ならぬ例の絲價安定融資法の發動そのものである。

金解禁の斷行に伴つた爲替相場の變動は、豫想通りに蠶絲の價格の慘落を惹起した。濱口內閣はこの事實の原因を一にアメリカの市場の不況にあるやうに言ひ立てゝゐるが、しかしそれは例によつて狡猾なる欺瞞の奧の手を出したものに外ならない。だが、それはともかく、絲價安定補償法は、その制定の當時に民政黨が擧黨一致で反對したものであり、またその公布の際に、町田現農相が、それを單に傳家の寶刀として唯非常時にのみ持ち出すばかりのものとして仕舞ひ込んで置くべきものだと聲明したものであつた。しかるに今や濱口內閣は、蠶絲業者の眉毛に火のついたやうな督促に會つて周章狼狽の極、慌しくもその傳家の寶刀を引き拔いた。かうした態度は、明かに濱口內閣による金解禁の斷行が、早くもその傳家の寶刀を引き拔くことが必要になつたほどの非常時を出現せしめたことを物語るものでなくて何であるか！　かくて濱口內閣が井上藏相の口を通じて、金解禁と共に市場が安定したと言はしめた虛僞も、こゝに遺憾なく暴露された。一の赤裸々なる、具體的事實は、空虛な修辭によつて飾り立てられてある百の聲明よりも、幾層倍も强き說得力を持つ。

しかも、濱口內閣の手による絲價安定融資法の發動は、ゆくりなくも、この內閣の本質を勞



働者農民大衆の眼前に於て無慈悲に暴露したやうな效果を擧げた。勞働者農民大衆の立場から見れば、絲價——同時に繭價——の暴露が惹き起した最も根本的な重要問題は、資本家の片割れであるところの蠶絲業者の救濟の問題ではなくて、その暴落の餘波を受けて益々深刻化して來た各地方の農民の窮乏、および多數の製絲工場に起つた賃銀不拂などの現象に關する問題である。かうした問題は、決して一朝一夕に生じ來つたものではなくて、既に幾箇月の久しきに亙つて、關係各地方の勞働者農民の心を異常に惱ましてゐたものであつた。しかるに政府は、例の永遠の『調査』『研究』に名を藉つて一向それへの對策を眞面目に講じようとはしなかつた。ところが今回一部の蠶絲業者の間から、右の補償法の發動への要求が、足許から鳥が立つやうに突如として提起されると、政府は他の一切萬事を顧慮するひまもなく、響の物に應ずるが如くに、忽ちそれを取り上げた。そしてその結果は、又もや一般民衆の負擔による資本家の救濟となり、更に肝腎の緊縮政策の容易ならざる破綻となつた。かくて勞働者農民大衆は、その本質に於て資本家地主の××以外の何物でもない濱口內閣の正體を、今やしみじみと如實に見ることが出來たのである。

## 七

さらに今一つ別の方面で、濱口內閣およびその與黨の民政黨が、從來すこぶる巧妙に冠つてゐた僞善の假面が容赦なく引き剝がされた事實が注意される。

政府および與黨は、特に總選擧期間中には、いはゆる選擧の自由・公正の維持の名の下に、表面上或る程度に『寬容』の態度を裝うてゐた。だが他方に於て政府および與黨は、彼等自身が擁してゐる權力および利用し得た限りの莫大な金力を通じて、樣々の選擧上のマニューヴアーから例の『合法的』干涉に至るまでの、各種各樣の手段を縱橫に驅使した。それでゐて『選擧の自由・公正の維持』も何もあつたものではないが、しかし彼等は兎も角實際さうしてゐるかのやうな外觀を繕ふことによつて、『さすがに濱口內閣は田中內閣とは違がつてゐる』といつたやうな印象を大衆に與へようと試みた。そして、その計畫がうまく圖に當つて、民政黨は衆議院に於ける絕對多數を獲得したのである。

ところが、一旦かゝる結果が實現されたとなると、彼等は忽ちその態度を豹變して、斷然その『寬容』の保護色——一種の變裝用の自由主義の上衣——をかなぐり棄てゝ、金融寡頭政治の××としての、その本來の狂暴性を露骨に示し始めた。それの最初の現れは、衆議院內のい



はゆる小會派に對する發言封じの試みであつた。彼等は自黨が多數黨であるといふ事實を盾に取つて、『多數政治』の名に於て、この無理を押し通さうとしてゐたのだ。だが、民政黨が現在擁してゐる絕對多數そのものは、かつて田中反動內閣の下に、政友會が擁してゐた多數と同樣に、『僞造の多數』以外の何物でもないのだ。それは、その民政黨の絕對多數が如何にして獲得されたかの經路を考へれば、直ちに解かるゝことである。いづれにしても、現在に於ては寧ろ小會派のうちにこそ、國民の最大多數を占めてゐる無產階級が言はうと欲してゐることを議會內に於て叫び得る地位にある議員が含まれてゐる筈だ。しかもわが國の無產階級は、現在の瞬間に於てこそ、各種の重要諸問題——殊に失業救濟、解雇・賃銀値下絕對反對、勞働組合法および小作法の制度、帝國主義戰爭絕對反對、治安維持法その他一切の無產階級抑壓諸法令の撤廢、等々の如き——に關して言ひたいことを非常に多く持つてゐるのだ。だが、資本家地主の政府および政黨は、無產階級のさうした要求および反抗の聲が議會內に傳達されることを極度に恐れてゐるのだ。金融資本はそれ自身の支配的地位の安定のための保證としての『政局の安定』を痛切に欲求してゐる。この意味に於ける政局の安定は、民政黨が金融資本の掩護の下に絕對多數を獲得したことによつて、一應は實現された。だが、この際、無產階級の要求および反抗の聲が絕えず議會內に爆發せしめられるやうなことがあつては、折角の政局の安定が不

斷の動搖を受けることになるであらう。政府および與黨は、何を措いても、さうした危險を豫防しなければならないと考へた。そしてその結果が、まづ第一に、小會派に對する發言封じの試みとなつて現れたのだ。それ故に、それは要するに、金融資本の支配下に於ける反動政治の特徵的一樣相である。ブルジョア新聞は、それを單に『多數黨の横暴』の一言で片附けてしまはうとしてゐるが、しかし、さうした概括的な評語は、決して問題の核心に觸れてゐるものではない。我々は今、現實の事象の進行の前行の前に濱口內閣およびその與黨の民政黨の一種の自由主義の假面がかくも物の美事に引き剝がれた事實を見て、益々わが黨の政治的自由獲得鬪爭の重要意識に對する我々自身の確信を强め、この際特に議會外の大衆の支持應援の下にそれを效果的に議會內に持ち込まうとする決心を新たにしてゐるものである。

## 八

上來の說明を通じて看取されるであらう通りに、濱口內閣の政策は、單なる聲明の時代を離れて、段々とその實行期に步み入るに從つて、層一層破綻百出の醜狀を露出する傾向を早くも示しつゝあるのだ。そしてその根本的原因は、前にも一言した通りに、濱口內閣の政策は表面上如何に技術的に巧妙に修飾されてゐようとも、その本質に於ては畢竟、勞働者・農民・無產市民・植民地民衆・等々一切の被壓迫民衆の犧牲に於て資本家地主の利益を擁護し、特に當面、金融資本の支配の確立を保證しようとしてゐるのだ、といふ中心的事實のうちに胚胎されてゐるのである。



この點に關聯して、私は尙ほ次の一事を附記しておかねばならぬ。それは、わが國の無產階級の間に於て從來久しく問題にされてゐた例の勞働組合法案および小作法案の運命についてゞある。濱口內閣は最近まで、それらの兩法案を第五十七議會に提出する意志を持つてゐることを屢々聲明してゐた。尤も第五十七議會は、あの通りの解散だつたから仕方がなかつたとしても、濱口內閣は當然その公約の精神に基いて、來るべき第五十八議會にこそは是非とも兩法案を掛けなければならない筈である。ところが、この頃になつてから、濱口內閣は一部の資本家連の反對に會つて、さうすることを見合せたと傳へられてゐる。

我々は昨年末發表された勞働組合法案、および數年前民政黨によつて起草された小作法案要綱を通じて濱口內閣が議會を通過せしめようと企圖してゐた兩法案の本質が如何なるものであるかを熟知してゐる。それらは要するに、形式的には幾分か進步的に見えるのであるにも拘らず、實質的には非常に反動的なものである。だが、濱口內閣が今日それらの兩法案を引ッ込めようとしてゐるのは、それらが反動的內容を有してゐるからといふのでは無論なく、その反動的內

容がまだ不十分だからといふのである。我々はもとより、それらの兩法案には絶對反對だが、しかし絶對反對だけに猶更その提出を待ち構へてゐたものである。即ち我々は、その提出の機會を敏活に捉へて、兩法案の欺瞞的本質を徹底的に暴露し、さらにその問題に對する戰鬪的勞働者農民の眞の要求を絶叫し、かくすることによつて、戰鬪的勞働者農民の眞の意志を反映した勞働組合法、および小作法を戰ひ取り得る時期を促進しようと企てゝゐたものである。だが、濱口内閣は一部の資本家の要求に押されて、遂にその機會を我々の手から奪ひ去つたのだ。

## 九

最後に、濱口内閣の欺瞞政策が、さらに財政の運用の方面に於て無限に多く包藏されてゐる事實が注意されねばならぬ。濱口内閣はその緊縮政策の一枚看板の手前、昭和五年度に對するいはゆる緊縮豫算なるものを作つたが、しかしそれはその名目を裏切つて、實に十六億二百萬圓の巨額を計上したものであつた。しかも前年度の豫算に比較して見たその僅かばかりの節約すらも、大抵は既定事業の繰り延べによつて實現されたものにすぎないのである。

わが國の國家財政の運用を通じて、如何に資本家地主の利益の擁護の目的が無産大衆の犠牲



に於て達成されてゐるかは、資本家地主がその最大部分を負擔する直接稅中の諸稅が全體で國稅總額の約三割五分に止まつてゐるに反して、勞働者・農民・無産市民がその最大部分を負擔する間接稅中の諸稅が全體で國稅總額の約六割二分を占めてゐるといふ、たゞこの一事實だけを見ても解かる。私はかうした一般に周知されてゐる事實の敍述を、これ以上に進める積りは持たないが、たゞ一言それに附帶して、わが勞農黨が『稅金は資本家地主が負擔せよ！』のスローガンを押し出し、その趣旨の下に、まづ生活の必需品にかゝる關稅および消費稅の撤廢を叫び、その代りに財産稅、不在地主稅、奢侈稅、等々の新設を要求し、資本利子稅の大規模の增徵を唱へ、さらに所得稅、營業稅、相續稅の免稅點引き上げ、竝に以上の諸稅の高率累進賦課の必要を主張し、さうした題目の下にあくまで大衆の日常利益の擁護伸張のために鬪ふことを誓つてゐる、といふ一事を記すに止めておく。

だが、人は言ふであらう『民政黨の政策の上にも、生活の必需品の消費稅の輕減といふやうなことが記載されてあるではないか？』と。それは如何にも事實であるが、しかし民政黨の政策中のその項目は、わが黨が生活必需品の關稅および消費稅の撤廢と言つてゐるのとは、全然その趣旨を異にするものである。似てゐるのは唯、言葉の上に於てのみである。まづ第一に、民政黨は消費稅の輕減とは言つてゐるが、しかし撤廢とは言つてゐない。次に民政黨は單に消

費稅だけを拾ひ上げて、關稅には少しも言及してゐない。そこに大きなカラクリがある。民政黨はその欺瞞的な社會政策の主張の手前、或は生活必需品の消費稅を幾分かは減額しようといふ意志を持つてゐるかも知れないが、しかし、その穴塡めのためと言へる程度よりは遙か以上に、鐵および木材を始め、各種の輸入品に對して、多額の關稅を賦課しようと目論んでゐるのだ。かういふこともまた、大衆の負擔に於て一部資本家を保護しようとする手段の一端の現れである。我々は斷じてその欺瞞の手に乘せられてはならない。

同樣に政友會は、租稅政策に關聯して、最近頻に減稅の必要を唱へてゐる。さき頃犬養總裁は、日比谷公會堂の演壇の上から、『この際五千萬圓程度の減稅を斷行して國民の負擔を輕減せよ』と言つたやうな趣旨を述べた。だが、我々は、その言葉を眉に唾して聞かなければならない。たゞ漫然と『減稅』といへば、『資本家地主が負擔してゐる稅金をも減縮しろ』といふ意味に歸着するのだ。これこそ、生產資本にかゝる稅金の減廢を叫んでゐる產業資本家の要求丸出しである。しかもその結果として當然に生ずべき穴塡めの問題に考へ及ぶとき、いはゆる『國民の負擔の輕減』などゝいふ甘言の欺瞞性が直ちに明瞭に知られるではないか！

かうした諸問題を一々取り上げてゐては限りがないから、それは一應玆で打切ることにするが、しかし私は最後の結語を言ふ前に、今一應極めて簡單に、濱口內閣の緊縮政策の最も惡ど



い——勞働者・農民・無產市民の立場から如何なる事があつても見逃がせない——方面に觸れておきたい。

濱口內閣は國家財政の運用について、緊縮々々の鐘太鼓を打ち鳴らし、またいはゆる既定事業の繰り延べによつて多少の一時的性質の節約を行ひもしたが、しかし金融資本家の要求を充たすための各種の費目、殊に帝國主義戰爭準備のためのものとしてのみ理解できる軍事費の上には、何等これとうなづける程の節約が行はれてゐないばかりでなく、さらにそこには將來の高速度の膨脹を思はせるものが少からず包藏されてゐる。たとへば約四億圓に上る陸海軍省費について見ても、陸軍省費の上には、組閣當時の宇垣陸相の減縮の公約が一向實行されて居らず、また海軍省費は大正七年以降の建艦費が倍加する形勢にあるといはれ、ロンドンの海軍軍縮會議への參加は、その當然の歸結であるべき負擔の加重を國民に忍ばしめるについての口實の獲得のためとしか見えない。大藏省や文部省費についても同樣に、言ふべきことが多くあるが、殊に『明るい政治』を强調する緊縮內閣が、最も暗い影のさすスパイ政治の結晶ともいふべき機密費を舊來のまゝに據ゑ置いて居る事實を見るとき、我々は必然に、かつて政友會內閣に利益を與へた機密費は、今や民政黨に便宜を借す機密費だと結論せざるを得なくなるのである。

かく見來れば、結局、濱口内閣が如何なる程度に於てか名實共に緊縮節約を實現してゐるのは、主として大衆生活の日常利益に比較的密接な關係のある各種の事業の方面に於てだけである。たとへば、例の既定事業の繰り延べのうちに於て主位を占めてゐるものは、或る意味に於て失業救濟の結果を伴ふべき土木事業の繰り延べであり、さらに、社會事業費と稱せられ得るものは全體で僅かに二千萬圓を出ないやうな始末である。從つて、當面の不景氣の深化、失業者數の增大、大衆の窮乏化等々に對應するための積極的施設に至つては、精々名目上の仕事がされるに止まり、大抵はたゞ掛け聲だけに終つてゐる。わが勞農黨がその政策の上に揭げてゐるやうな大衆生活の日常利益から不可抗的に逆しり出る諸般の要求、例へば勞働者・農民・無產市民の正しき立場から見て完全なる勞働組合法、小作法、失業保險法、最低賃銀および最低俸給法、八時間勞働法、等々の制定實施、健康保險法の改善、職業紹介所の自主化およびその增設完備、簡易宿泊所の增設完備、義務教育および職業教育機關の增設完備、その生徒の學用品の無料給付、等々その他多數。——かうした大衆の緊切なる諸要求は、無論如何なる資本家地主の政府政黨でもの善意から、その充當が期待し得られるものではない。まして當面政權の地位に立つてゐる濱口内閣の如きは、緊縮節約の看板の蔭に隱れて、實は大衆の負擔に於て資本家地主の利益を擁護することに沒頭する以外の何事をもしてないことを知るとき、大衆は



大衆自身の固き團結によつて、日常不斷の果敢なる鬪爭を通じて、それらの諸要求を自力で戰ひ取るより外に、絕對に道はないのである。

わが勞農黨は、常に大衆の先頭に立つて、かゝる日常利益の擁護伸張のための鬪爭を、その政治自由獲得のための鬪爭との相互的聯關に於て、大衆と共に、效果的に遂行することを誓つて、今や堂々とその旗を進めてゐるものである。かゝる鬪爭精神の下に、わが黨は次の中心スローガンを揭げて總選擧戰に臨んだ。

解雇、賃銀値下絕對反對！
失業者に食と仕事を與へよ！
土地を農民へ！
稅金は資本家地主が負擔せよ！
勞働者農民の政治的自由獲得！
帝國主義戰爭絕對反對！

總選は終つた。今やわが黨は、尙ほも以上の中心スローガンを鬪爭目標として、一段の巨步を以て議會鬪爭に躍進しようとしてゐるのだ。我々は心から切に大衆の熱烈なる支持聲援に信賴して、この新分野の上に於ても、あくまで忠實に大衆に對する公約を守り、大衆に對する我

我の階級的任務を全力的に遂行することを誓ふものである。（昭和五年三月）



# 第五十八議會の印象

## 一、創造性の喪失

初めて議會に入つて、私が何より先づ強く感じたことは、そこに澄澈たる生氣が全然缺けてゐるといふことであつた。それはもとより私が豫期してゐなかつたことではなかつたが、しかし實際は遙に豫期以上であつた。

なるほど、今日の議會の傍聽者たちの興味の中心となつてゐる恒例の彌次、喧噪、紛爭、演壇顚けあがりの藝當、等々々、の活劇は、會期の短い第五十八議會においても、殆ど連日のやうに演ぜられた。だが、私が今いつた『生氣』のないといふのは、無論さうした筋のきまつた茶番のやうな他愛もない空騷ぎを指してゐるものではない。それは端的にいへば、たとへばわれわれが戰鬪的勞働者農民もしくはその代表者たちによつて持たれる各種の會議などにおいて常に見る通りの、あの打たば憂然として響くであらうやうな異常の緊張味に充ちた空氣、——屢々轟然と大音響を立てつゝ今にも爆破するかとばかり危ぶまれるやうな炎々たる熱火の如き氣勢、——つまり、さうしたものを指していふのである。それが、今日のブルジョア議會内で

は、樂にしたくもないのだ。この點においてすでに、今日のブルジョア議會は、我々の眼には勞働者大會、農民大會などゝは、餘りにも際立つた對照を示してゐるものとして映ずる。

これは何故であるか？　その理由は決して說明しがたいものではない。まづ第一に考へられることは、新興勢力としての戰鬪的勞働者・農民の會議は、現在のわが國においては、常に例外なく武裝官憲の水も漏らさぬばかりの嚴戒裡に持たれる。そこには階級と階級との對立が、如何に小規模においてにもせよ、生々しき現實として展開する。支配階級の彈壓が、餘りにも露骨に、その砲口を直接に被壓迫大衆に向けてゐる。この光景が被壓迫大衆の上に及ぼす心理的影響は、その事柄の本質以上に重大だ。『本當に俺達が晴れやかに俺達自身の會議を待ち得る日までには、この上どれだけ生死の戰ひが重ねられなければならないか？』かうした考への裡から、必然的に、あの息詰まるやうな物凄い空氣がかもし出されるのである。

ブルジョア議會は、さうした世界がこの世に存在してゐるといふことをすら全然知らないかのやうである。そこには、階級對立の現實が、勞働者農民の代議士の僅ばかりの介在を通じての外は、一切感じられないのだ。民政黨および政友會は、それにすッかり安心して、紛々擾々たる政權爭奪戰にふけつてゐる。だが、さうしたブルジョアジー圈内での内部抗爭は、よし表面上どれほど深刻なものに見えようとも、それには畢竟するに一定の嚴格なる限界がある。そ



してそこまで行き著くと、否、大抵の場合にはそこまで行き著かない先に、それは自然的に解消するやうに、その捌け口が制度そのものゝ中に豫めチャンと用意されてある。ブルジョア議會内の事象の進行過程が、スポーツに對しての興味以上のものを傍觀者に與へなくなつて來てゐるのは、大部分さうした原因から來てゐるものでなくてはならぬ。この點においてもわ〳〵れは、『すべての政治鬪爭は階級鬪爭だ』といつたマルクスの言葉の眞理性を想起せしめられる。

とにかく、今日のブルジョア議會が潑剌たる生氣を缺いて、いはゞ生ける屍の如き存在をつづけてゐるにすぎないといふことは、現在われ〳〵が日々眼前に見てゐる事實である。そこでは、例の『博大』とか『高邁』とかいつたやうな言葉で形容してみたいやうな、いはゆる『政治的見識』なるものは絶對に示されない。勞働者大會や農民大會においては、屢々創造的な大衆行動を基礎づける議論が戰はされたり、社會進化の遠き將來までの見通しの下に、打ち建てられた各種の行動綱領が決議されたりするが、さうしたことは、今日のブルジョア議會においては、全然見られない圖である。そこには、一切の創造性といふものが永遠に失はれたものとなつてゐるのだ。今日のブルジョア議會は、いはばその日暮しの生活をしてゐるにすぎない。金融資本家の假借なき嚴命の下に行はれた金解禁に關聯する、いはゆる緊縮政策、產業合理化

運動、等々を初めとし、徹頭徹尾欺瞞的政策以外の何物でもない失業對策に至るまで、何一つとして眼前を糊塗する彌縫策でないものはない。かくて、よしブルジョア的意味におけるそれにもせよ、いはゆる『百年の長計大策』なるものは、最早や百パーセント金融資本家の傀儡となりをはつてゐるブルジョア議會そのものからは出て來さうにもなくなつてゐる。

## 二、金融獨裁の合理化機關

沸き返るやうな議場の喧噪と、蒸せるやうな人いきれに些か眩暈を感じて來た際などには、私はしば〳〵、眼前の醜惡なる現實から視線を外らして、想像を遠くブルジョア議會の過去の光榮の日の上に飛ばしてゐる私自身を見た。特にかの一六四九年のイギリスのパーラメント、更に幾世紀にかけて難攻不落と見られてゐた貴族、僧侶の權勢の大伽藍をその礎石から顚覆して光輝燦然たる『人權宣言』を來るべき世紀と全人類とに向つて煥發した一七八九年のフランスの國民議會、等、々、々。かうしたものが多彩的な幻影となつて、次から次へと私の視野をかすめて通つた。まことに、近世紀の初頭においてブルジョアジーが新興勢力として登場した時代には、少くとも西ヨーロッパ諸國のブルジョア議會は、偉大なる歷史的役割を演じたものであつた。



かうした歷史的背景の前に立たせると、私が眼のあたり見てゐる議會が何と見すぼらしい姿を示してゐることよ！　今更事新らしくいふまでもないことだが、日本のブルジョアジーは、その發達の如何なる段階においても、未だかつて獨立的に封建的專制支配の覆滅民主々義の完成のために戰つたことがないだけではなく、却つて或る時期には封建的殘存勢力たる官僚の庇護の下に、他の或る時期にはその官僚との反目・親善のなひ交ぜのやうなデリケートな關係の下に長足の進步を遂げつゝ、いつしか金融資本の支配の確立の機運の成熟と共に、一躍して帝國主義時代にすべり込んだのだ。從つてさうした狀勢の推移を政治の上にそのまゝ反映して來た日本の議會が、未だかつてそれ自身の力で、新時代を創造するやうな活動を示したことのないのは、一の歷史的必然だといへばいはれる。

それにしても、往年のいはゆる藩閥打破とか、官僚軍閥反對とか、護憲運動とかゞ、まだ現實の勢を示してゐた間は、日本の議會も今日よりは、遙に潑剌颯爽たる一面を見せてゐたものだ。ところが近年に及んで金融資本の時代が到來しだしてからは、日本の議會は急カーヴを描いて轉向しはじめ、殊に政府に對しては打つて變つて隷徒的地位に甘んずるやうになつたのである。いはゆる執行部の立法部に對する優越はかくして固定化され、議會はその下にたゞ金融獨裁の合理化機關としての新しき役割を演ずることによつてその命脈を持續してゐるにすぎな

くなつた。議會の一切の政治的創造性の喪失は、まさにその必然の結果である。先年若槻内閣の末期に行はれた、いはゆる三黨首妥協劇の一幕は、さうした傾向を公然と記念したものであつた。更にそれに直ぐ引續いて起つたあの財界未曾有の金融動亂に際して、政府の手を經て提出された十億圓近くの國庫負擔を伴ふ各種の財閥補償法案が、議會の關門をすら〳〵と通過したといつたやうな事實は、如何に政府と議會とが完全に金融資本家の傀儡となるに至つたかを雄辯に物語るものである。それ以來のことは最早多くいふ必要はあるまい。人は一たび斜面に立つと、如何に見事にすべり落ちることよ！

立法部の執行部に對する完全なる隷從、――この點に關して、この頃の野黨の攻擊力の悲慘なる減退が眞ッ先に注意される。今期議會における犬養政友會總裁の怨むが如く、訴ふるが如く、縷々として糸の如く繰出された質問演說が、その絕好の見本を提供したものであつた。無論それは、單にその外形においてさうであつたゞけでなく、その內容においてもまたさうであつた。犬養總裁は海軍々縮會議に關聯して、海軍々令部を主位にした立場から政府攻擊を試みたが、肝腎の根本的主張において、軍擴に贊成なのか軍縮に贊成なのか、どッちつかずの曖昧な態度を示した。これはしかし同時に、帝國主義政策支持の一點においては、政友會も民政黨も、共々に一つ穴の貉だといふ事實からも來てゐるのだ。



だが、與黨もまた與黨で、一から十までことごとく政府の御意のまゝに唯々諾々として動く旨從ぶりを發揮してゐる。いかにも今期議會において、一時は統帥權問題に關して、民政黨の一部の少壯議員たちの間に政府の取扱ひ方に對する不滿の色が多少示されたやうであつたが、しかしそれも結局は泣き寢入りになつてしまつて、遂に何等の發展をも示さなかつた。

では、政府が全能の立場から一切萬事を切り盛りしてゐるのか？ 斷じて否！ まづ第一に、政府は金融資本家の前に全然頭が上がらないのだ。金解禁、緊縮政策、產業合理化、等々の大物から例の盜犯防止法制定の末に至るまで、政府はすつかり金融資本家に引ッ張り廻されて、その號令通りに動いてゐる。さらに政府は、金融寡頭政治下の反動期の波頭に乘つて再び活氣づいて來たところの封建的遺制――軍閥・貴族院・樞密院に對してもまた戰々兢々としてひたすらその機嫌氣褄を損じないやうに努力してゐる。そしてたゞ、今度の軍縮問題の場合において見られたやうに、金融資本の安固のために軍閥の際限なき欲望をおさへつけることが絕對に必要となつた時にのみ、僅に金融資本家の威力にすがつて、それを決行するにすぎないのだ。今期議會において濱口首相が、統帥權問題や陸相事務管理問題に對して、あくまで見苦しき答辯回避の態度に固執したところなどを見ると、いはゆる與黨の絕對多數の威力などあつたものではない。かくて年來の懸案となつてゐる帷幄上奏問題や、陸海軍大臣文官制の如きも、未だか

つて封建的專制支配に對して生死の戰ひを戰つたこともなく、また戰はうとする意志をも丸切り持合さない資本家・地主の政府政黨の手によつては永久に解決が出來ない謎として殘されようとしてゐる。

## 三、現實問題の回避

金解禁と共に際限もなく深刻化し、かつ今後一層深刻化しようとしてゐる不景氣問題にからんで、現在全社會の上に襲ひかゝつてゐる、失業問題ほど緊切な現實問題はないといふことは、今日一般人の常識となつたことである。如何にブルジョア政府とはいへ、濱口內閣は一方に金融資本家本位の產業合理化運動の徹底化をはかつてゐる以上、他方その合理化運動がうんだこの失業問題に對しても、せめて先進ブルジョア諸國の政府がしてゐるやうに、よし見せかけでもそれと四ツに組んだ堂々たる雄姿を示さなければ、だいゝち見物が承知せず、從つて政府の所期の欺瞞政策も甚だ見すぼらしい結末に終らなければならないことは、事理極めて明白である。

しかも、軍縮問題に關し、自己の意志に反して例の『七割要求』の讓步を軍閥の上に押し付けねばならなかつたほどのわが國の帝國主義・金融資本の內在的矛盾・弱點は、この問題の上に



はまた遺憾なくさらけ出されてゐる。濱口內閣が大きく『失業救濟策』と出たのも、蓋を明けてみるとたゞ掛聲だけのものでしかなかつた。濱口首相はその施政方針演說の中で、『根本策』がどうの『應急策』がどうのと、甚だ鹿爪らしいことを喋々してゐたが、それも畢竟その無策の辯解にすぎないものであつた。卽ち首相が根本策として取り出したものは、具體的には產業合理化そのものを內容としてゐるものであり、從つてそれは失業問題の解決どころか、逆に失業者群の大量生產に歸著するものであることが確なものである。

さらにまた、首相が應急策として示したものは、職業紹介機關の擴張とか地方公共團體による失業救濟または防止のための公營事業の振興とかいつたやうな、その無力さおよび欺瞞性がすでに完全に試驗濟みになつてゐるものばかりであつた。しかも首相は得々として、さうした失業救濟事業のための費用の一部を國庫で負擔することにして、それを追加豫算に計上しておいた、と述べ立てたので、一體何億圓ほどが計上されてあるのかと、追加豫算を調べてみると、それは無慮六十一萬九千餘圓といふのだ。それは優に濱口內閣の政治的常識を疑はしめるに十分なものである。今日全國至るところに失業者群が巷に充ち滿ちて『働かせろ！　食はせろ！』との痛烈なる叫び聲を擧げてゐる事實は、濱口內閣のかゝる無策もしくは欺瞞政策に對する强き抗議であると同時に、鋭き批判でもあるのだ。

さらに濱口内閣の現實問題囘避の態度は、農村問題解決の方面において、一層强き脚光を浴びてゐる。飽くなき地主の攻勢の下に益々激化し行く土地立入禁止・立毛差押・土地返還强制に對して血みどろの闘爭を戰つてゐる農民は、今や土地に對する强き欲求に驅られて、『土地を農民へ！』のスローガンの下にその戰ひの旗を進めてゐる。だが、さうした世界から遠く隔てられてゐる濱口首相は、その施政方針演說の中で、農村問題に關しては、僅に肥料の運賃値下げ竝にその配給の改善の一點に觸れたゞけで、それで氣が濟んでゐるやうに見える。まさに驚嘆に値する政治家的見識である！

かうした諸點を私が質問演說中に指摘したのに對して、濱口首相は平然として『このたびは特別議會であります。よつて特別議會に關係のある事柄だけを私は演說しました。來るべき通常議會においてはそれ相當のことを述べる考へであります』と答辯した。だが、失業問題や農村問題が特別議會に關係がないなら、一體何がそれに關係があるといふのだ。首相はそれらの諸問題の解決策の言明を來るべき十二月下旬に至つてはじめて召集されるであらう次の通常議會まで待てといふのだが、飢ゑたる勞働者農民はそんなに呑ん氣に待つてゐられないのだ。何といふ無恥な現實問題の囘避だ。そして他方、軍政・軍令の關係に關する法令の餘技的解釋や、小橋前文相問題に關する埒もない關念の遊戯などが、第五十八議會の最大關心事として取扱は



れて、それらを中心として鼎をひツくり返したやうな騒ぎが演ぜられたのだ！

濱口首相は、わが勞農黨が現狀勢下における唯一可能な失業問題對策として建てた『失業者生活保證法案』に對しては、政府はそれを實行する意志が斷じてないと言ひ放つた。さらに首相は、わが勞農黨が農村窮乏の緩和のための一の應急策として建てた『借金支拂豫猶法案』に對しては、政府はそれが上程された場合に考慮するであらうと答へた。それは明かに、首相が當面その上程のために必要な所定の贊成者が獲得できないであらうことを見越しての狡猾なる答辯である。さうした政府の言明に對する勞働者・農民の答へは何か？ それは必然に『よしわかつた！ 政府にそれを實行する意志がないならないで、俺達勞働者・農民の手で立派にその正しい要求を戰ひ取つて見せる！』といふのでなくてはならぬ。（昭和五年四月）

# 第二編

# 民主主義批判

# 一、民主々義批判の必要

現代のブルジョア國家は、いづれも皆、多かれ少かれ、民主々義――デモクラシー――の觀念を、その政治的支配のジャスティフィケーションの基礎としてゐる。それ故に、現代のブルジョアジーの政治的支配に向つて正面から抗爭するプロレタリアートの政治運動に於て、デモクラシーの思潮が假借なき批判の俎上に置かれて來たのは、決して理由のないことではない。それは何よりも殊に、必要が然らしめたものである。

必要？　然り。先づ第一に、マルクス主義的意味に於ける純正のプロレタリアート運動は、必然にブルジョア・デモクラシーの揚棄をそれ自身の目標とする。さうでないプロレタリアート運動は、少くともそれ自身の歴史的使命の意識から出發するプロレクリアートの運動であり得ない。そして、それ自身の歴史的使命の意識から出發しないプロレタリアートの運動は、言葉の嚴格なる意味に於てはプロレタリアート運動だとは言へないのである。

だが、ブルジョア・デモクラシー？　一體さういふ表現が許されるのか？

無論だ！　ブルジョアジーの側に立つ論客――社會民主々義の陣營内の論客をも含めて――

は、デモクラシーを超階級的のものとして粉飾することを彼等の『神聖』なる任務としてゐるところから、ブルジョア・デモクラシーといふやうな、階級的本質を丸出しにした表現を避けて、單純にデモクラシーと言ひ習はし來た。『背教者』カウツキーの如きは、更に『純粹デモクラシー』(Reine Demokratie) といつたやうなカント張りの金箔のついた呼び方をさへ發明(!!)する。だが、單純にデモクラシーと言はうが、勿體ぶつて『純粹デモクラシー』と言はうが、ブルジョア・デモクラシーはブルジョア・デモクラシーだ。名稱の變更は本質の轉換を意味しない。よしデモクラシーを單純に一のイデオロギーとして見ても、階級差別の儼存する今日の資本主義社會に於て、それが超階級的イデオロギーであるなどゝいふやうな欺瞞には、無産階級理論にやつと一指を染めたにすぎないものといへども、最早乘ぜられる心配はなくなつて來てゐる。否、普通單純にデモクラシーといはれてゐるものも、細いのでまた時としてカウツキー一派によつてのやうに、『純粹デモクラシー』と呼ばれてゐるものも、——みな一樣にブルジョア・デモクラシーの範疇を出てゐないものであつて、しかもそれは、プロレタリアート・デモクラシー——プロレタリアートの××との聯關に於て言はれたる——に鋭く對立してゐるものである。

尙ほこの點に關聯して、今一つ附け加へておくべきことがある。上に言つた通りに、マルク



ス主義的意味に於ける純正のプロレタリアート運動は、ブルジョア・デモクラシーの揭棄の上にそれ自身の目標を置いてゐるものであるが、それへの到達の途上に於て、或る一時期にブルジョア・デモクラシーの獲得のために戰ふことを必要とする一段階——帝國主義ブルジョアジーとの鬪爭の過程に於ける一段階——を通り越すことを必要とする場合がある。殊にブルジョア、デモクラシーの或る程度に十分なる實現がブルジョアジー自身によつてなし遂げられずに殘されてゐるのに、全社會が既に早くも金融資本獨裁下の反動的支配の下に投げ込まれてゐるやうな場合に於ては、ブルジョア政治の分野に於ける封建的殘存物の一切を擧げて掃蕩するためのブルジョア・デモクラシー獲得の事業が必然に、鬪爭しつゝ前進するプロレタリアートの肩上に轉り落ちて來る。プロレタリアートの手によるブルジョア・デモクラシーの獲得の必要——そこにも歷史の皮肉の一片影が見られる。だが、それは兎も角、かうした觀點からも、ブルジョア・デモクラシーの批判は、プロレタリアートの政治運動に於て閑却されてはならない一理由があると言へるのだ。

しかも、ブルジョア・デモクラシーの批判は、プロレタリアートの立場からこそ、徹底的に、そして同時に嚴正に、遂行し得られるのである。私有財產の基礎の上に立つブルジョア社會の自己批判は私有財產から疎外されてゐるところの、——從つて私有財產に絡はる一切の偏見か

ら疎外されてゐるところの――プロレタリアートの立場からこそ、最も假借なく遂行し得られるものであるといふのは、科學的に正當な主張だ。そして、ブルジョア・デモクラシーの場合も、決してその例外をなすものでないといふこともまた、無論のことだ。

デモクラシーの思想は、他の一切の思想、もしくは學說體系と同じく、それ自身の歷史を持つ。特にそれは、近世紀を通じて偉大なる事業をなし遂げて來た。それは中世紀から傳つた封建的專制支配に對するブルジョアジーの鬪爭に於ける、一の最も有力なる武器としての用をなした。もとよりそれは、封建的專制支配への反抗を喚び起した原動力となつたものではなくて、寧ろ當初は封建的專制支配への反抗が、近代ブルジョアジーの擡頭につれて自然發生的に諸方面から勃興したものだが、しかしデモクラシーの思想は時期を過たずに、さうした反抗を理論づけ、更にそれに明確なる目的意識を賦與したものでさへあつた。かくてデモクラシーの思想は、歷史的に見て非常に偉大なる外觀を持つ近代ブルジョア國家機構の生成に關聯して、驚くべき大事業を成し遂げたものといへるのである。

だが、何物をも陶汰して已まない時の流れが、さしも堂々と聳え立つ近代ブルジョア國家機構の基礎をも搖るがし始めてからは、それの理論的粉飾の具として、久しき間に亙つて花やかな盛時をもつたデモクラシーの思想もまた、遂に徹底的批判の矢面に立たしめられねばならぬ



斷末魔の瞬間に逢着した。近代資本主義社會の必然の產物としてのプロレタリアートは、その獨自の體驗を、更にその獨自の體驗が產んだ獨自の科學をメスとして、それを表裏から解剖し檢討して、つぶさにその本質を闡明しつゝあるのだ。

さうした立場からなされた批判に於て、今日までに得られた成果を出來るだけ簡單にスケッチしようといふのが、この小論に與へられた課題である。

# 二、デモクラシーの概念——その批判的解説

## 一、デモクラシーの内容の多様性

デモクラシーの批判に際しては、まづデモクラシーそのものゝ基礎概念の闡明が當然の事としてなされなければならぬ。で、筆者は、以下暫くその當然の事を試みようとしてゐるのである。だが、いづれにしても、さうした仕事を本文の如き短篇に於て果たすことは、可なり難事業であるには相違ない。といふのは、まづ第一に、デモクラシーは、それ自身の歴史を持つと同時に、それ自身また歴史の産物でもあるからだ。それ故に、デモクラシーの概念を、或る程度に十分に闡明しようとすれば、それは當然、それの歴史的聯關に於てなされなければならぬ。しかも、私が本篇に於て企てゝゐる通りに、縱しその論述を近代デモクラシーの領域だけに限局するにしても、近代デモクラシーそのものゝ歴史的發展が、また非常に複雜多樣な徑路を追うて進んで來たものなのである。

第二に、さうした歴史的發展の徑路の多樣性の結果として、デモクラシーは、その高度に發展した姿態に於ては、非常に多岐多端な内容を包含するに至つてゐる。しかも、その内容の複雜さは、單にそれを構成する諸部分の多樣性から來てゐるばかりでなく、各部分間の矛盾と統一との、時の推移と共に變化して行く關係の種々相からも來てゐるのだ。たとへば、『自由』と『平等』との如き、或る意味に於て本質的に相容れない二つの命題——後に略說するであらう通りの——が、相竝んでデモクラシーの内容の中心的要素を構成してゐることの如き。また、直接民主々義およびそれの一種の變種といふには餘りに相背反する部分を多く持ちすぎてゐる間接民主々義——議會主義——が、一樣にデモクラシーの庇の下に保護されてゐることの如き。また、獨裁思想の意識的否定と無意識的肯定——前者は封建的專制主義および無産階級獨裁に對し、後者はブルジョアジーの階級的獨裁に對し——とが、共にデモクラシーの本質のうちに包攝されてゐることの如き。更にまた、多數者の支配の肯定と、少數者の利益の擁護要の求とが、共にデモクラシーの名に於て主張されてゐることの如き。等々。

第三に、以上二項から推論して、更に次の結論が引き出される。デモクラシーの概念を、それの生活歴史に沿うて動的に叙述する際に當つて、最も中心的な——同時に最も困難な仕事は、デモクラシーの本質内容に含まれる諸要素間の調和および矛盾の進行は、一方に於ては、資本主義社會に於ける諸階級諸層の形成過程と相呼應するものであり、他方に於ては、それ故にまた、資本主義社會の内部の發展諸段階の諸相を反映するものである。從つて、資本主義の

最後の發展段階としての今日の金融資本獨裁下に於て、デモクラシーの諸要素間の矛盾が救ふべからざる程度に深化してゐることは、直接にその最後の發展段階に於ける資本主義社會の內部の矛盾の絕望的な深化を反映してゐるものに外ならないのだ。そして、その矛盾の頂端はまさに、今日に於ては既に、デモクラシー――斷るまでもなくブルジョア・デモクラシー――と、それから派生してそれの致命的な敵となるまでに生長して來たプロレタリア・デモクラシーとの、正面からの對立にまで尖鋭化して來てゐるのである。

以上に擧げたやうな樣々の視角からなされるデモクラシーの概念の闡明および批判は、如何なる形式の簡叙法によつても、本篇に許されてある以上の相當の紙數を必要とすることは當然である。それに、本篇の筆者には、今さしづめさうしてゐる時間もない。それ故に筆者は、主として問題の最も中心的な諸點の上にのみ論述を集中し、その他に關しては、たゞ示唆的の說明を下すだけに止めなければならないし、またさうしようと考へてゐる。

## 二、デモクラシーの語義

デモクラシーといふ言葉は、本來一の政體を指すものとして用ひられて來た。ブライスはその晩年の大著『近代民主制』(Modern Democracies, 1921) に於て、かう言つてゐる。――



『デモクラシーといふ言葉は、ヘロドトス (B. C. 484―424 古代ギリシヤの史家――引用者) の時代以來、一國家の支配權が、特殊の一階級にでなく、全共同社會の總員に、法律上賦與されてゐるところの、その政體を指すものとして用ひられて來た。それは、投票によつて行動する共同社會に於ては、その支配權が過半數者に屬する、といふことを意味する。といふのは、總員の一致なくして全共同社會の一意志と認められるべきものを平和的に、そして合法的に決定するためには、多數決以外の方法が見出せないからである。慣行は、それを該用語の承認された意味とならしめた。そして、慣行こそ、諸用語の使用への最も安全な道案內だ。』(同書第一卷第三章。)

この說明は、ブルジョア流の政治文獻に於けるデモクラシーの慣用的定義を、最も要領よく示してゐるものといふことが出來る。卽ちその中には、政體――政府の形態――觀念も出てゐる。また、多數決の觀念も出てゐる。更にまた、普通選擧の觀念も暗默の裡に示唆されてゐる。だが、注意されねばならないことは、そこには階級の觀念が抹殺されてゐることだ。階級差別の實在する社會について、階級の觀念を排除して直ちに過半數者の支配を云々するのは、その說明を端的に形式的のものたらしめることは事實だ。だが、ブルジョア流の政治文獻に於けるデモクラシーの說明は、一般に形式的のもの以上に出てゐるものでない。そこに我々は、

政治的制度もしくはその運用に關するブルジョア的解釋の最も典型的な一特徴を見る。

尤も、ブライスも直ぐ次に指摘してゐる如く、古代ギリシア人の間に於ては、デモクラシーは、支配權が一人に屬する君主制(モナーキー)、および支配權が門閥もしくは財産による諸特權を持つ少數者團に屬する寡頭制(オリガーキー)に對立する意味に於て、支配權が全社會内の最大多數を構成する貧民層に屬するところの、その特殊の政體を指すものとして用ひられるやうになつてゐた。就中、アリストテレスに在つては、同じく支配權の所在を基準としながらも、政體の分類が餘程細かになつてゐて、君主制(モナーキー)の墮落せる形態が僭主政治(ティラニー)であり、貴族制(アリストクラシー)の墮落せる形態が寡頭政治(オリガーキー)であり、民主制(ポリティー)の墮落せる形態が庶民政治(デモクラシー)だ、といふことになつてゐる。

言葉の構成から言つても、デモクラシーは、ギリシア語のデモ(庶民)とクラシー(支配)との結合であつて、デモは必ずしも階級もしくは層を超越するものとして觀念された「大衆」の意味ではなくて、寧ろ、より多く富者集團と區別された貧者群を指すものである。

モナーキー、アリストクラシー、およびデモクラシーの三つの言葉は、それぞれに與へられた意味をも籠めて、そのまま古代ギリシアから傳承されて來て、近代のブルジョア政治文獻に於ても、別々に近代諸國家の政體の上に見られる三つの主要型を指し示すものとして、一般に



承認され使用されてゐる。たゞ古代ギリシア人の用例に於て、デモクラシーが少數の特權階級に對立するものとしての庶民層もしくは貧民群の支配を意味するものとされてゐたのが、近代のブルジョア政治文獻の用例に於ては、一般に階級觀念を超越して觀念された單純の多數者の支配を意味するものとされてゐるところに、多少の差異が見られるだけである。この一點に於ては、近代の用語例は或る意味に於て、寧ろ退化を示すものとして見ることが出來る。少くとも、より多く形式的になつて來てゐるものと言ふことが出來る。そして、この事實は、近代資本主義社會の社會的關係の實狀と關聯して考察されなければならないものであることは、本論の進行するまにまに、次第に明かにされて行くであらう。

たゞ玆で一言附け加へておくのを多少とも便利とする一事がある。それは、近代ブルジョア政治文獻に於けるデモクラシーの觀念が如何に形式的であるかを最も有力に示す一例として、多數者の支配の表象が普通選擧制の上に置かれてゐる、といふ一點である。しかも、最近世に近づくに從つて、成年男女の上に及ぶ普通選擧制がそれだ、といふことにされるやうになつて來た。さうした普通選擧制の基礎の上に立つ議會政治が行はれてゐるところでは、多數者の支配が、從つてデモクラシーが行はれてゐるのだ。と、かう近代ブルジョア政治文獻は敎へる。そして、その議會政治そのものゝ下に於て、事實上全社會の壓倒的最大多數を構成するプロレ

タリアートの階級意思の政治的表現が斷乎として抑壓されてゐる事實などは、尋常一樣の近代ブルジョア政治文獻に於ては全然無視されてゐる。否、それだけではない。苟くも形式上成年男女に對して普遍的に選擧權が與へられてさへあれば、縱しその選擧法の規定によつて積極的もしくは消極的に、如何にプロレタリアートの階級的鬪士たる代表者の選出が阻止されてゐようとも、そこに多數者の支配が、從つて、デモクラシーが實現されてゐるものと見做されてゐるのだ！　さういふのが、デモクラシー――無論ブルジョア・デモクラシー――の形式主義的形相の一典型なのだ。

デモクラシーは、政體の一樣式を指してゐるものである以上（註一）、必然に國家制度上の一稱呼として取扱はれてゐるものには相違ないが、しかし同時にそれは、縱し形式上にもせよ――ブルジョア政治文獻に於ては、その獨自の意味に於て實質上さうだといはれてゐるが――多數者の支配といふことの上にその標識がおかれてゐるところから見て、國家の最高機關の構成を基準とする立場からモナーキーやアリストクラシーから區別されてゐるだけでなく、別にまた政治の運用の態樣を基準としたと稱せられてゐる立場からも、君主專制や、貴族專制から區別されるのである。この見方からすれば、デセクラシー卽ち民主々義は專制主義もしくは獨裁主義から區別されるものとされて居り、從つて同じく君主制といつても、立憲君主制は共和制



と相竝んで、デモクラシーの下に於ける政治一形態として見做されることを妨げないものとされてゐるのである。尤も、共和制は、少くとも觀念的には（註二）デモクラシーの最も完備せる――もしくは最も進歩せる――形態として一般的に見做されてゐるものであつて、そしてマルクスもまた、或る箇所に於てその點を强調してゐる。

（註一）　××を本然的に永遠の存在とするブルジョア國家觀に於ては、必然に政府の形態すなはち政體が觀察の對象とされる。特に國家形態と斷られてゐる場合でも、それは常に政體との混同を免れない結果に終る。これに反して國家を歷史的進化過程の上に於て生滅する過渡的現象だとするプロレタリアート科學の國家觀に於ては、國家形態としては、古代國家・封建國家およびブルジョア國家（以上三者は共通のタイプのものである）とプロレタリア國家とが認められただけであつて、『政體』とは峻別されるべき觀念である。

（註二）　玆に『少くとも觀念的には』といふ留保的文句が用ひられてあるのは、今日の中央および南アメリカの諸共和國などに見られる如く、大統領の治下に於て如何なる意味から言つても專制的な政治が公然と行はれてゐるやうな實例が、事實上屢々見られるからである。

だが、政治の運用の態樣を基準とすると稱せられてゐる立場からなされるところの、專制政治もしくは獨裁政治對民主政治の區別もまた、外觀上やゝもすれば實質上の區別の如く見られ易いにも拘らず、またブルジョア政治文獻に於ては、實質上の區別だといはれてゐるにも拘らず、實は依然として形式上の區別であることを免れないのである。それは根本に於て、獨裁主

義と少くとも議會的民主々義の別名である法治主義との區別が、極めて形式的になされてゐるところから脈を引いて來てゐるものだである。

ブルジョア政治文獻に於ては、獨裁主義と法治主義との區別が、權力の發動が一定の法律的基準によつて行はれてゐるか否かの上におかれてあつて、從つて獨裁主義とは法律によらざる權力の發動だとされてゐる（註）。

（註）『第二インタナショナルの理論的權威』カウツキーは、更に一歩をすゝめて、獨裁とは『一個人たる支配者が、或る危急存亡の場合に於て臨時的に、如何なる法律にも拘束されずに行ふ支配だ』と言ひ、マルクスが『プロタリアートの獨裁』といつたのは、『政體』に關聯していつたのではなく、『狀態』に關聯していつたのだと論斷して、嚴格なる意味に於ける『階級獨裁』を否定し、レーニンから痛烈なる攻擊を受けてゐる。

だが、如何なる專制政治でも、全然法律によらずに行はれる場合は、寧ろ例外に屬する。たとひ『法三章』といふやうな簡單な原則でも、苟もさうしたものが存する限りは、最早そこに一定の法律的基準がないとはいへない。或はこの論旨を幾分か緩和して、縱し專制政治の下にも何等かの法律的基準があるといへるにしても、それは例の『據らしむべし、知らしむべからず』の主義によつて行はれるのだ、といふやうな主張を持ち出すものも少からずある。だが、法律の雨が降るやうな現象が喚び起されるのを常軌とする議會的民主々義の下に於ても、



否、さういふ議會的民主々義の下に於てこそ殊に、少くとも專門の法律學者でない一般民衆——特に大多數のプロレタリア——に取つては、同樣のことが最も適切に言ひ得られるではないか！

階級的に目ざめたるプロレタリアが、自己の體驗によつてその存在を知るにいたつた諸法律が、殆ど片ッ端から自己の生活上の利益に背反することを發見するに至るが如きは、日常矚目のことである。今日わが國の無產階級運動に於て、無產階級抑壓諸法令の撤廢の要求が高聲に叫ばれつゝあるのは、その活きた一例證ではないか？　しかも、さういふ法律は、一體どこで作られたか？　ブルジョア議會に於て！　何故？　そこにはプロレタリアートの階級的意思の表現が斷乎として禁遏されてゐるし、また、何時までも王手搦め手から禁遏されるであらうから。

かうした理路を考へ拔くと、必然に次の結論が導き出される。——如何なる獨裁主義も何等かの法律的原則の上に根據を持たないのは寧ろ例外であるが、反對に法治主義の立憲制の下に於ても、かくの如くブルジョアジーの階級的獨裁が公然と行はれる。しかも、法律による××主義の最も赤裸々な一典型が、戒嚴令下の軍事行政の上に見られることは、人々の知る通りである。更にまた、プロレタリアートの獨裁の行はれてゐるサヴエート・ロシアにも、憲法・法律

が儼存してゐることは、更めていふまでもあるまい。

かくて、嚴格なる科學的見地から見れば、獨裁主義と法治主義との原則的區別は自然と消え去つて行くのだ。法律的基準の有無は、決して獨裁主義と法治主義との實質的區別の標識とはなり得ない（註）。否、嚴格なる科學的見地からこの問題を見れば、たゞかういふことが言へるだけだ。即ち、歴史的に嘗て封建的社會の支配階級の獨裁を代表した專制主義と、資本主義社會の支配階級であるブルジョアジーの××を代表するデモクラシー――即ちブルジョア・デモクラシー――とに對して、プロレタリアートの××を代表するプロレタリア・デモクラシーが鋭き對立を見せて行くであらう。かくて、ブルジョア政治文獻に於ける獨裁主義と法治主義との區別は、實質的のものであるよりは、寧ろ形式的のものである。實質的には、國家制度は、如何なる形態を取るにしても、根本に於て必然にいづれかの階級の權力による獨裁を意味するものである。

（註）この點は、『獨裁とは如何なる法律にも拘束されないところの、直接に權力の上に立脚せしめられた支配だ』といふレーニンの定義と決して矛盾するものでない。それは第一、『法律的基準の有無』といふ表現と『如何なる法律にも拘束されないところの』といふ表現との間に於ける意味の異同から說き起されなければならないが、さうした說明は『議會主義批判』の項下でなされるのを便利とするが故に、玆では暫くそれを省略する。



最後に今一つ是非とも附け加へておかなければならない論點が殘つてゐる。モナーキー、アリストクラシー、およびデモクラシーの區別は、既に述べた如く屢々政體のそれとは引き離して、國家形態のそれとして說かれてゐる。だか、この見方もまた、同樣に形式的のものにすぎない。それに、この見方は、プロレタリアート國家の出現以前に存してゐた國家の諸形態を永遠不變の存在として、それら以外には如何なる新國家形態の發生の可能性をも認めないといふやうな、つまり非辯證法的な見解を代表してゐるものだ。唯物辯證法的見解を戰ひ取つたプロレタリアートの科學的立場から國家形態の區別を檢討すれば、一方に實質上少數者支配の基礎の上に立つ過去型の國家形態としての古代國家・封建國家およびブルジョア國家（ブルジョア國家に於ては形式上、多數者の支配が認められてはゐるが）があり、他方に實質上多數者支配の基礎の上におかれてある未來型――部分的には既に現在型ともなつてゐる――の國家形態としてのプロレタリアート國家があつて、互に鋭き對立をなしてゐるのが認識され得るだけだ。

以上は國家制度に關聯するものとしてのデモクラシーの語義を略述したものだが、しかし同じデモクラシーは、制度としてのデモクラシーの『理念』の一系列を、即ちそのイデオロギーを意味するものとして用ひられてもゐる。そして實際に於ては、恐らく後者の意味に於て、より

一般的に用ひられてゐるといへるであらう。本論に於ては、筆者は『民主々義批判』といふ標題によつて示唆されてゐる通りに、直接にはイデオロギーとしてのデモクラシーを取扱はうとしてゐるものである。だが、イデオロギーとしてのデモクラシーを批判することは、結局はそれが反映してゐる實體であるところの制度としてのデモクラシーの批判に歸着することは無論である。それ故に、上來の説明に於て、まづその仕事の第一着手として、制度としてのデモクラシーを中心としてその語義を闡明したことは、筆者に取つては、必要かつ不可避な準備行爲であつたのだ。



## 三、デモクラシー思潮の生成發展の史的背景

第十五六世紀の交を機として現はれた新大陸の發見と宗教改革とを合圖に近世紀の幕が切つて落されてからこのかた、ヨーロッパ大陸の天地は俄かに色めき渡つて、經濟的に政治的に文化的に、眼ざましくも一大昂揚期を廣汎なる區域に亙つて現出せしめた。

遠洋航海および通商の發展、沿海および大陸上に於ける諸都市の勃興、商工業の隆運、貨幣經濟の躍進および流布、資本の加速度的蓄積、等々。――その頃から急に際立つて鋭く感じ始められるやうになつたかうした經濟的動搖は、過去の長い幾世紀間にかけて、肉を殺ぎ血を絞るやうな封建的專制支配の搾取抑壓の下に息づきつゝ眠つたやうに横はつてゐた社會生活にも、俄かに異常の一大衝擊を與へた。新社會狀勢の現出は、刻々に促進されるやうになつた。ともかく、その物質的基礎はその間に着々築き上げられ、しかも未だ曾て知られなかつた急速なるテンポを以て强められて行つた。

學術技藝の進歩、――就中航海通商と深い關係におかれてあつた天文學の如きは、その頃よりも前の時代に於て既に傑出してゐたコペルニクス、ガリレオ、ケプラーなどの劃期的發見に

よつて拍車をかけられてゐて、後の第十八世紀初頭のニュートンの不朽の業績に導く道を地ならしつゝあつた。ルネッサンス期の餘光は尙ほ暫くは燦々と輝きわたつて、人々の創造意欲に力强く呼びかけてゐた。さきにはウィックリフ(1325—84)によつてのバイブルの最初のイギリス譯、次いでルーター(1483—1564)によつてのその最初のドイツ譯の完成は、後來の國民文學の——政治的には國民主義運動の——出現を約束してゐた。だが、工業上の技術の方面に於ける眼ざましき發達も、さうした精神文化の方面のそれに、優に拮抗するものがあつた。殊に火藥の發明と印刷機械の發明とは、近世史上の經濟的政治的軍事的文化的分野に偉大なる輪廓を描いて次から次へと現はれ出た諸事象の、初めはさうやかに見えた前驅としての意味を持つたのであつた。殊にそれは近代資本主義に、更らに一大巨歩を進めしめる契機を與へた。第十八世紀末の產業革命やフランス革命の如きも、またその政治的成果とも見られるデモクラシーの思想および制度の如きも、或は國民主義の昂進の趨勢も、更らに近代的プロレタリアートの出現の如きも、——それどころではなく、今日現在まざ〳〵と我々の面前に立ちはだかつて、絕大の脅威を掲げてゐる帝國主義戰爭の物凄き諸形相の如きものまでも、我々がそれらの間の聯關的史的發達の徑路を溯つて辿つてゐると、我々は結局、近世紀初頭に於ける經濟的の、從つてまた政治的および文化的の一大動搖もしくは一大昂揚の根柢にまで到達しないで止まないのだ。



だが、我々は今は我々の觀察を政治の分野に限らなければならないし、しかも、その分野の上に於ても特にまづ、上來略述したやうな歷史的事件の進行を背景として生成發展したデモクラシーの思想の本質內容およびその生活歷史を究明・批判の對象としなければならないのである。

# 四、反抗思想としてのデモクラシー

『闘争意欲の旺盛な、溌剌たる生氣に充ちた、才氣煥發の、教養の豊かな、そして支配する僧侶團を襲撃する第十八世紀の政論家たち及び無神論者たちは、人間を宗教的迷夢から喚びさますためには、退屈な、乾燥無味な、迂拙極まる手際で選擇された事實によつてマルクス主義的常用語を論證しようとする紛々たる饒舌よりは、千倍も立ち優つてゐることが看取されるであらう。』（レーニンの言葉、『マルキシズムの旗の下に』から。）

第十六世紀初頭に於ける宗教改革は、『平等』と『自由』の思想をアジテートした。前者は神の前に於けるすべての人間の平等の命題に即して、ローマ法王の教權に向つて挑戰した教會改革家たちの言論的武器として用ひられ、後者は一切の傳統的束縛からの個人良心の解放の主張から出發して、一切の個人的信仰の自由および個人的才能の發達の自由を阻害する權力による干渉壓迫への抗爭のスローガンとされるに至つた。

かうした『自由』『平等』の觀念は次第に、新興階級たるブルジョアジーの闘爭武器となつて



行つたところのデモクラシーの理論體系の中に合流して、特に第十八世紀に及んでは、異常に高度の發展を示すに至つたのだ。

それは一の歴史的必然であつた。近世紀初頭の經濟的動搖の裡から勇ましき産聲をあげた新興資本家階級の擡頭なくしては、宗教改革運動が怒濤の如く西ヨーロッパ全土へ擴つて行つた事實は、理解が出來ないことであり、そしてその新興資本階級の封建的專制支配に對抗する闘爭が益々直接に政治的となつて行つたにつれて、そのイデオロギーもまた、若しその根本に於て同質の利害關係を反映してゐるにもせよ、その外觀に於て益々政治的になり、屢々反宗教的とさへなつて行つたのだ。

事實上、反抗思想としてのデモクラシーは、その根本に於て多かれ少かれ反宗教的であることを免れなかつた。といふのは、それが如何に歴史的に宗教改革に結び附けられたイデオロギーに聯繫してゐたにもせよ、その成長發達の過程に於て必然に神權思想否定の内容を持たざるを得ざるに至つた歴史的根據があつたからである。

この事實は必ずしも、富の獲得と蓄積とを活動の中心とする新興資本階級がその核心に於て純粋に唯物的であつたといふ一事だけから來たものでない。我々はまた、それに關聯して、さうした新興資本家階級が攻撃の目標としてゐた封建的專制支配のイデオロギーの本質をも併せ

考へなければならないのだ。

如何なる形式の政治的支配も、それ自身をジャスティファイするためのイデオロギーを伴はないものはない。特に初期に於ける近代國家の、その本質に於て尙ほ封建的であつた專制支配をジャスティファイするためのイデオロギーは、一般に絶對國家主義もしくは單に絶對主義と呼ばれてゐるものであつて、それは本來宗教的基礎の上に立てられてあつた。そしてその最も純粹な形式で現れたものは、所謂『神權說』——支配者の權力は神から授かつたものだといふドグマ——であつた。それ故にこの主義に於ては、支配者たる君主の意思は、被治者たる人民の意思に拘束されるものではないとされてゐた。そしてこの意味に於てそれは絶對主義と呼ばれてゐるのである。だが、それは、君主の意思は絶對に何物によつても拘束されないとまで極言したのではなく、神の意志によつては拘束されるものとした。卽ち、支配者は人民に對してこそは責任を負はないが、神に對しては責任を負ふべきものと說いた。そこに、封建的專制支配のジャスティフィケーションがおかれてあつたのだ（註）。

（註）絶對國家主義の學說は、支配者は國家的統治の目的のためには如何なる道德的考慮によつても拘束されるべきでないことを說いたマキアヴェリ（1469—1527）に於てその近代に於ける最初の主張者を見出した。だが、こゝに略述された形に於ける學說は、フランスではジャン・ボダン（1530—96）、僧正ボシュエー（1627—1704）によつて、イギリスではチャールス一世（1600—49）によつて、等々、最も代表的に仕上げられた。



かくの如く、中世紀式形態の封建國家が近代民族國家に征服、併合されるに至つても、當初の近代民族國家は、國王の絶對專制支配の下に置かれ、名實ともに依然として絶對主義の上にそのジャスティフィケーションを求めた官僚國家であり、從つて『近代絶對國家』と正當に呼ばれ得る形態および實質を以て表はれてゐた。實際、近代絶對國家——イギリスに於て最も夙く既に第十六世紀に完成されて實質上多かれ少かれ第十七世紀の後半期まで續き、フランスに於ては第十七世紀に至るまでの間に完成されて第十八世紀末の大革命まで續き、その他の諸國に於ても着々形成の過程にあつた——は、その本質に於て國民的規模の上に擴大された封建國家——もしくはさうならうと努力してゐたものに外ならなかつたのである。——『官僚國家はただ、その對立物卽ち封建主義がこびりついてゐるところの低度の、彎的な統一集中の形態にすぎないのである。』（マルクス『プリュメール』第七章。）

かうした近代絶對國家は、その權力の發動から見れば、軍事國家、官僚國家、警察國家、等々のタイプのあらゆる形相を具へてゐた專制支配形態であり、そして屢々さうした實質の上に福祉國家主義の外面的粉飾を施してゐた。福祉國家主義とは、別に善政國家主義もしくはパター

ナリズム（支配者が家父の注意を以て被治者たる人民の利益を管理するといふ意味に於ていはれたもの）と呼ばれたものである。それは、政治の目的は人民の福祉の増進にあるが、人民は所謂衆愚であつて、何が自己の眞の福祉であり、また如何にしてそれが増進されるかを知らないものであるから、支配者は人民の意志如何に拘らず、神への責任に於て、人民の眞の福祉を増進するために人民に代つて自ら獨裁政治を行ふのだ、といつたやうな前提から出發してゐたのである（註）。　それは同じ專制思想としても、相當に近代化されたそれであるには相違ないが、その核心に於ては尙依然として宗教的基礎の上におかれてゐるものであり、しかも、第十九世紀に及んでもヘーゲルおよびその學徒の一派によつて熱說された『國家は最高道德觀念の體現だ』といふドグマの上に見られる如く、一種の神祕的色調をさへ帶びしめられた權力聖化思想でもあり、そしてその根據に卽して『上からの支配』を肯定することを以てそれ自身の中心的任務としてゐたものである。

（註）『余は國家なり』といふルイ十四世（1638—1715）の言葉と、『余は國家の最高僕なり』といふフリードリッヒ大王（1712—86）の言葉とを對照せよ。前者は絕對專制主義を赤裸々に表明してゐるに反して、後者はその緩和された形に於ける善政主義を代辯してゐることを、人は容易に看取するであらう。



尙ほ叙述の序に、次の一事をも玆に附記しておきたい。上にスケッチしたやうな善政主義的××政治思想は、その歷史的伴生物であるところの軍事國家思想、官僚國家思想および警察國家思想、等々と共に、特にブルジョア・デモクラシーの完全に實現されるまでに至つてゐないやうな、現代の多かれ少かれ形式的な立憲國家に於ては、意外に多量に殘存してゐて、しかも注意深くも保留され培養されてあるばかりでなく、更に今日の帝國主義時代に於てはまた、新たな活力を吹込まれて、各方面に再びのさばり出して來て、强力に、敏活に、金融資本の××の防衛の役割を演ずるやうにさへなつて來てゐる。そこにこそ、現代ブルジョア國家に於ける封建的殘存勢力の復活の動因が覩はれるのだ。そして、この事情の故にもまた、さうした脅威から全然脫け切つてゐない現代の後進ブルジョア國家內のプロレタリアートは、その反帝國主義的鬪爭の進行過程に於て、ブルジョア・デモクラシーの獲得を、當面の主要任務とせねばならぬ理由を持つのだ。

だが、我々は今は再び第十七・八世紀の西ヨーロッパ諸國に立ち歸つて、新興資本家階級が封建的專制支配、もしくはそれの國民的規模の上に擴大された——近代絕對國家——との鬪爭に於て一の屈强の武器として用ひたデモクラシーの概念を再び取上げなければならぬ。

封建的專制思想が權力の基礎を『神意』の上に置いてゐたに對して、デモクラシーは、初め

からそれ自身の名稱が示唆してゐる通りに、權力の基礎を『民意』の上においてゐた。かくてデモクラシーは、少なくとも權力の起源の問題の關する限り、神をその永遠の昔からの玉座から引摺り下ろして、人民をその上に置代へたのだ。從つて、前者が舊來の支配勢力によつて、『上からの支配』のジャスティフィケーションとして用ひられてゐたのに對して、後者は新興の反抗勢力によつて『下からの支配』の要求の論據として押出された。しかのみならず、後者は、『平等』『自由』の主張の上に打建てられた包括的な一觀念形態として、後來ブルジョアジーがその反抗勢力としての地位から、支配的地位へ乘移つた曉には、形式上の多數者の支配の象徴としての多數決主義に立脚する、實質上の階級的獨裁のジャスティフィケーションとして用ひられるまでに發展すべき運命の萠芽を、既に當初からそれ自身のうちに包藏してゐたのだ。だが今茲では、さうした點よりも、寧ろまづデモクラシーが反抗時代のブルジョアジーによつて下からの支配の要求に關聯してのアジテーションとして用ひられてゐた方面が特に強調されねばならぬ。



## 五、「自然法」および契約論

だが、近代デモクラシーの思潮は、殊に第十八世紀に及んでは、それ自身を唯物論の強き影響下にこそは見出したが、何にせよ時代が時代であつたゞけ、一般的にはまだ十分に唯物辯證法的論究に到達してはゐなかつた。しかも、それはまだ十分に觀念論の――或は寧ろエンゲルスの意味に於ける形而上學の――範疇を脫してゐないものであつた。從つてそれは、萬般の現象の源泉としての――尠くとも權力の源泉としての――神をこそは勇敢に揚棄したが、しかしそれに代はるべき他の何等かの絕對觀念を探究しない譯にはゆかない狀態にあつた。だが、それは、この點に於て、何を以て神に置代へたか？

一定の生產關係もしくは社會關係を以てか？

無論否。不斷の流轉の形相に於て把握される生產關係乃至社會關係といふが如き相對性的可變的唯物的實在は、デモクラシーの高唱者であつた第十八世紀の哲學者たちが、絕對觀念としての『神』に代はるべき等價物として求めてゐたものではなかつたのだ。のみならず、彼等は彼等の人類史觀に於て、一定の生產關係乃至社會關係に織込まれた人間を前提として出發したのでは

なくて、『生れながらにして自由かつ平等』なる個人を前提として出發したのだ。一定の生産關係、もしくは社會關係に織込まれた人間を前提として出發する人類史觀を打建てようといふが如きことは、第十八世紀の思想家たちの念頭に浮び上がつて來るやうなことすらなかつた。たそれは第十九世紀半ばの若き日のマルクスの成熟しつゝあつた思惟に殘された、一大事業であつた。

では、第十八世紀のデモクラットたちは、權力の源泉としての神を放逐したときに、何物を以てその空位を充たしたか？　曰く『自然法』を以て！

尤も前に言つた通り、彼等は一應は、權力の基礎を人民の意志の上に置いたが、しかしそれは、問題の終結を意味しなかつた。といふのは、まづ第一に、『人民の意志』は『神の意志』のやうな絶對觀念ではなかつたからだ。從つて『權力の基礎は人民の意志だ』と言つても、『しからば何故に人民の意志による決定は必然に權力の――從つて權力を以て裝はれる國家の――設定に向はねばならなかつたか？』の問題が、まだそのあとに殘された。それに對して彼等は、『それは自然法によつて導かれて――』と答へたのだ。かくて、觀念論者であつた彼等は必然に、證明されないし、また證明され得ない『神』を、同樣に證明されないし、また證明され得ない『自然法』を以て置代へたに過ぎなかつたのであつた。

で、彼等によれば、國家發生以前の人間は『自然狀態』に於て生活してゐたものだといふの



であるが、しかし彼等のいふその『自然狀態』なるものは、後來の歷史的研究によつて闡明されるやうになつた原始共產社會のやうなものではない。彼等に取つては、一般に國家は社會と同意語をなすものと考へられてゐたのであつて、從つて彼等は國家生活以前に於ける社會生活――原始共產社會であれ何であれ――の存立を認めない。そこで、彼等が描いた『自然狀態』に於ては、各人は平等かつ自由な個人として、てんでに、獨自の天賦の理性によつて解釋し得られる不文の天則、卽ち『自然法』を生活行動の基礎としては生命・自由・財產を享受してゐたのだ。――財產の觀念が一定の社會關係の進化過程の上に現はれる歷史的產物だといふやうなことは、彼等の考へ附かなかつたことですらあつたのだ　だが、彼等が社會關係の發生以前に私有財產の觀念を持つて來たことは、デモクラシーが如何にブルジョアジーのイデオロギーとしての役割を遺憾なく演じたかの歷史的事實と關聯して、特に我々の注意に値することだ。――かういふ風に、自然狀態に於ける人々は、自然法の命令に從つて各自に生命・自由・財產を享受してゐたが、そのうち彼等は、段々と更に一層はつきり理知の眼を見開くに從つて、國家權力がないところでは生命・自由・財產の保護が十分といふ譯には行かないことを悟るやうになり、玆に始めて彼等は、彼等相互間に結んだ契約によつて、主權者を立てゝ各人が自然狀態に於て別々に持つてゐた生命・自由・財產を享受する天賦の權利（自然權）を一括したもの（そ

れが權力だ）を、その主權者の手に委任もしくは讓與し、かくて國家生活が開始されたのだ。尙ほまた、かくして創められた國家の形態は、國家契約によつて立てられた主權者が一人である場合は君主制（モナーキー）であり、少數者の集團である場合は貴族制（アリストクラシー）であり、人民全體である場合は民主制（デモクラシー）であるのだ。――と、かういつた調子で、第十七・八世紀のデモクラットたちは彼等の議論を進めて行き、更に彼等の壓倒的多數は、最後の民主制を最も理想的な國家形態として讃美した。そして、そこにこそ、第十八世紀のデモクラシーの最も主要な特徴が見られるのだ。

かういふのが、第十七・八世紀のデモクラシーの思想の共通的中心點をなした契約論の梗概である。もとより、ひと口に契約論といつても、それには、その主張者の異るに從つて、その論述の樣式および內容の上に多種多樣の特殊相が見られた。卽ち、契約論によつて××××政治をジャスティファイしようと試みた例外的な自然法學者であつたホッブス（1588―1679）の立場から、同じく契約論の壘に立籠もつて絕對的人民主權の學說を大上段に振りかざした、最も純粹なタイプのデモクラットであつたルソー（1630―93）の主張に至るまでの兩極端の間に於て、考へ得られる限りの樣々の色合ひの思想が、ずらりと肩を竝べて押出された。だが、さうした微細な事柄には、玆で一々立入つてゐる譯には行かない。で、筆者は玆ではたゞ、大體の



考へ方の筋路について最も特徴的な諸點を示すに止めた。

我々が今日我々の武器の一つとして手にしてゐる戰鬪的唯物論に卽する社會科學の立場から見れば、如上の契約論は算へ切れないほどの理論上の難點を持つてゐる。そして、さうした難點の一二は、既に上來の解說の進行中に於ても簡單に注意しておいたが、それら以外にも尙ほ社會關係發生以前の世界とされてゐる『自然狀態』の住民が、社會關係の高度の進化過程の上に於ける一の歷史的產物である契約を結んだり、或はまた、曾つて一度たりとも國家生活を經驗したことのない彼等が、國家發生以後の生活狀態を發見する能力を持つてゐたりするといふやうな前提の上に立てられてゐるところの、かゝる議論こそは、今日の我々の眼から見れば、最も不自然な見解だといはれなければならないものだ。だが、いかに卓越した第十七・八世紀の思想家たちといへども、今日我々がいふ意味に於ける社會科學的立場から事物を觀察することは出來なかつた。寧ろ彼等は彼等が當時にあつて到達し得た最も進步した學術的立場から出發して、自然狀態の人々が國家生活に步み入るやうになるのは、自然法の導きによるものだ、と考へたのである。

すべてが時代にかゝる。如何なる思想も、その環境を超越して出現するといふやうなことはあり得ない。恰度我々が、產業革命前後に於ける近代プロレタリアートの擡頭なくしてマルク

スの學說の出現を考へることが出來ないやうに。

それは兎に角、第十七・八世紀に於けるデモクラシーの理論の骨子をなしてゐた最も代表的な契約論に從へば、一切の政治的結合、特に國家は、本來、人民の幸福——生命・自由・財產の安固なる享受——のために作られた制度だといふのであつて、この前提からの當然の推論として、若し一の國家がかうしたその本來の任務を怠るならば、その國家は打倒に價するものだ、といふ結論が導き出されたのである。そしてそれは、ジョーン・ロック(1632—1704)の場合に於て見られる通りの『革命の權利』、或はフランス革命の際に於ける『人權宣言』の上に見られる通りの『反抗の權利』の主張の基礎とされたのである。

かゝる論據の上に打建てられた第十七・八世紀のデモクラシーの理論は、今日の社會科學の立場から見てこそ穴だらけのものであるが、しかし當時に在つて、最高の政治理論の水準を示したものであり、且つ異常の啓蒙力說得力を發揮したものであつた。更にそれは、反抗時代の新興ブルジョアジーが絕對主義的××に對する生死の鬪爭に於ける最も精鋭なる武器として、——效果的な反抗思想として、魅力ある革命理論として、廣汎なる範圍に反響を喚起したアジテーションとして、——眼ざましい偉力を十分に發揮した點に於て、非常に顯著なる歷史的意義さへ持つたのである。最後にそれは、フランス大革命に際して、——



Liberté, egalité, fraternité.

自由・平等・友愛

の輝やかしき一聯のスローガンに結晶せしめられて一代の全民衆を感奮せしめ、かくして封建主義打倒の劃時代的事業を完成し、今や羽翼既に成つたブルジョアジーをして『自由に』中天に飛翔せしめる端緒を開いたのである。

試みにその××の情熱が全民衆の間に漲り滿天を焦がす破壞の火が一切の中世紀の象徵を、城廓を、寺院を、××を燒拂ひつゝあつた瞬間に發せられた、歷史的文書である『人權宣言』を讀め！ 人はそこに高く揭げられてゐる自由・平等・自然および人民主權の叫び聲が、如何に鋭く、解放の曙光に眩惑せるものゝ如く感じてゐた當時の民衆の胸を射拔いたかを、如實に想像することが出來るであらう。

××の焰の波が燒くだけのものを燒きつくしてひとしきり歷史の太洋の中に引去つた時、對岸のイギリスでは、反動的政治思想の驍將であつたエドモンド・バークが、無慘に粉碎された權威と、傳統との廢墟を眺めて、次で來るべき凶事に對して、胸苦しき豫感を懷きながら毒々しき呪詛の聲を擧げた。だが、純情詩人ウォーズウォーズは、その廢墟の上を吹く爽快な朝風を胸一杯に吸込みながら、理性の白日の下に美が全土にわたつて『滿開の薔薇の上に蕾の薔薇を

添ふる』であらうところの未來に向つて、熱狂的に禮讃の言葉を捧げた。

その時から一世紀餘りの年月が過去つた一九一七年の十一月に及んで、ロシアにプロレタリアート××が始めて實現されたとき、それが世界を横斷する二つの階級的陣營の内部から、別別に如何なる態度を以て迎へられたかは、玆で特に言ふ必要はあるまい。たゞしかし、この第二十世紀初頭の一大歴史的新現象に向つて猛烈なる怒號をつゞけて來た現代のブルジョアジーは、バークの鋭き攻擊の鋒先を受けたフランス大革命そのものゝ寵兒であつたといふ一事は、一個の歴史の皮肉として注意されるべきことであらう。



# 六、ブルジョア革命の精神

『人間はその諸權利の點に於て平等に生まれ且つ繼續する。……

『政治的結合の目的は、人間の自然の〔天賦の〕且つ不滅の諸權利の保存といふことである。それらの諸權利は、自由・財産・安全および壓迫への反抗である。

『一切の主權の原理は本質的に國民に宿る。如何なる集團も、如何なる個人も、明示的にそれから導き出されたのでない權力を行使することは許されるべきでない。』

◇

『法律は一般意志の表現である。すべての市民は、自身直接に、或は代表者を通じて、その制定に同意する權利を持つ。それは、保護にせよ處罰にせよ、萬人に對して同等である。各市民は法律の眼には平等であるが故に、すべての稱號、官職公務に對して、その資質、才幹による以外の何等の差別なく、各自の能力に應じて、平等に參加權を持つ。』

◇

『何人も、法律によつて規定された場合を除き、そして法律が規定したる形式に準據しての

以外には、糺問・逮捕・監禁されるべきでない。……」

◇

『何人も、その意見の故に、たとひ宗教上の意見の故にもせよ、妨害を加へられるべきでない。』

◇

これら樣々の呼掛けの言葉は、一七八九年の『人權宣言』の上に引切りなしに出て來る諸條項である。人はそれらの文字によつて如何なる內容を示唆されるか？

自由、平等、反抗の權利、人民主權、人身の自由、代議制度、一般參政權、法律の前に於ける各人の平等、信仰の自由、言論・集會・結社・出版の自由、等々。そして、財產不可侵權がさうした基礎的諸權利中の一の主要地位を占めるものとして算へあげられてあることは無論である。

かうした諸規定の結合が、いはゆる『一七八九年の原理』である。否、それは一般に初期のブルジョア革命の『精神』をなしたものである。（『人權宣言』に先だつて發せられ、多くの要點に於てその手本となつたイギリスの植民地としてのアメリカ東海岸諸州、特にヴアジニア州の憲法を、更に一七六七年のアメリカ合衆國の『獨立宣言』を比較して讀め。人々はそれらの上に



も如何に同じ「精神」が潑溂として躍動してゐるかを見ることが出來るであらう。）そして、その精神が同時に、第十八世紀のデモクラシーの理論體系の基調をなしたものであり、その主唱者たちによつて驚くべき雄辯を以て中外に宣せられたものであつたのだ。

フランス革命に一世紀先立つたイギリスのプロテスタント革命期の革命理論やスローガンに於ては、當然のことゝは言へ條、ブルジョア革命の本質が、尙ほ多分の宗教的もしくは神學的色彩を以て上塗りされてゐた。それは、そこでは、鬪爭する市民群が、自己の旣存の歷史的、傳統的諸權利への王權の侵害に對して反抗の聲を擧げたのであつたからである。だが、百年後に勃發したフランス革命は、さうした歷史的、傳統的諸權利を王權から市民群の手に奪還しようとしたのでなく、逆に歷史的、傳統的諸權利——宗教的權威を以て包まれて神祕的の後光のさしてゐたところの——を以て裝はれてゐた×・貴族・僧侶の特權集團を打倒して新興市民群の新地位を確立しようとしたのであつた。それ故に、根本に於て反宗教的であつた第十八世紀の精神の結晶とも見えた反抗思想としてのデモクラシーが、そのためには誂へ向きの武器として用ひられた。理性崇拜の時代思潮が產み出した『自然法』『自然權』の觀念、神意に置代へられた民意。——かゝるものこそ、傳統的權威に挑戰したフランス革命が必要としたものであつたのだ。

この革命に於て、ブルジョアジーは、全人類の代表者としての雄大潑剌たる意氣込みを以て、崇高莊重なる態度に於て、天賦不滅の人權を宣言し、『自由・平等・友愛』のスローガンを高らかに叫んで、廣汎なる全被壓民衆に呼びかけた。何と鋭く、それは民衆の魂に響いたか！民衆は起つた。そしてブルジョアジーの指揮の下に、人類解放の旗を戰ひ進めた。

××は赫々たる勝利に輝いた。封建主義は大木の倒れる如く崩壞した。中世紀の神祕主義の尾を引いてゐた傳統的權威は、第十八世紀の精神の結晶であつた理性の白日の下に雲散霧消した。まことにそれは、神權に對する民權の、××の特權集團に對する街頭の民衆の、徹底的勝利であつた。

では、解放の時代は來たか？　それは來た、ブルジョアジーの解放の時代が。だが、約束された人類の解放は？　それはまだ問題にはならない。

封建主義の壞滅、デモクラシーの實現、それはブルジョアジーの經濟的支配の——從つて政治的社會的支配の——確立の象徴であつた。無論、實現されたデモクラシーは、ブルジョア・デモクラシーであつた。もとより、ブルジョア・デモクラシーの實現は、それが血みどろの鬪爭によつて歷史の舞臺の外へ一掃し去つた封建主義の支配に比較して、斷然一進歩を劃したものであつたことは事實である。のみならず、それは、社會のそれから先の進化への必然の過程



でもあつた。この意味に於て、ブルジョア革命は、それが完成された時處に於て、一大歷史的使命を果した。いかにもそれは、それ自身の手で人類解放の問題を解決することが出來なかつた。だがそれは、必然的にその解決に向はなければならない運命を擔つて出た。

ブルジョア革命によつて舊來の封建的形態に於ける搾取と抑壓に苦の下から脫れ出た全民衆層の中から、新形態の搾取と抑壓の鐵鎖につながれたプロレタリアートが擡頭しだした。しかも、その新生のプロレタリアートは、時と共に益々その數と力とに於て限りなく膨大する一大社會群として立ち、歷史の必然の不可抗力に押されて、自己解放への道に上らなければならないものとなつた。プロレタリアートの解放なくして人類の解放が問題にならないといふことは、プロレタリアートの解放と共に人類の解放が來るといふことを意味する。だが、『プロレタリアートの解放はプロレタリアート自身の手でなされなければならぬ。』(マルクス)。かくて、ブルジョア・デモクラシーが不渡手形にした人類解放の問題は、プロレタリアー・デモクラシーの問題として、その解決が尙ほ將來に保留されることになつた。

かくして封建主義の廢墟の上に打建てられたデモクラシーは、ブルジョア・デモクラットたちが意味する超階級的なそれでもなく、社會民主々義者カウツキーがその尻馬に乘つて勿體ぶ

つていふ『純粋デモクラシー』でもなかつた。『若し人がまさしく健康なる人間的理解と歴史とに侮辱の言葉を放たうと欲するのでなければ、人は無論「純粋デモクラシー」(註) について語ることは出來ない。異つた諸階級が存する限りは、人はたゞ階級デモクラシーのことについて語り得るだけであらう。』(レーニン『背教者カウツキー』第二章。)

(註) 尙ほ序に我々をして、レーニンが引續いて『純粋デモクラシー』について言ふところを聞かしめよ。『「純粋デモクラシー」なるものは一國家内の階級闘爭に對する無知と無理解とが言はしめる言葉だといふだけでなくて、また二重三重に無意味な言葉だ。何となれば、××社會に於ては、デモクラシーは變質し、そして習慣になるであらうし、凋落し去るであらうが、決して「純粋デモクラシー」にはならないであらう。『「純純デモクラシー」は勞働者をごまかす自由主義者の欺瞞的空語だ。歴史はただ、中世紀的政治支配を解消するブルジョア・デモクラシーと、プルジョア・デモクラシーの遺産相續者として出て來るプロレタリア・デモクラシーとを知つてゐるだけだ。

『ブルジョア・デモクラシーは中世紀のデモクラシーに對しては進歩的だといふ事實を且つまたプロレタリアートは對ブルジョアジー闘爭に於てそれを利用しなければならぬといふ事實を立證するために、カウツキーは殆ど一ダースもページを消費するが、それはまさしく、勞働者をごまかさうとする自由主義者の饒舌である。……カウツキーは近代的の、換言すれば資本主義的のデモクラシーのブルジョア的本質を迂廻して行かうがために、單純に「博學」の砂で勞働者に眼つぶしを喰はし、わざと勿體ぶつた顔附でヴァイトリングや、バラゲリイに於けるエズイット宗團や、その他の多くのことに



ついて語つたのだ。』

反抗時代のブルジョアジーは、『第十八世紀の精神』の結晶としてのデモクラシーを以て、その要求主張を戰ひ取るための武器として用ひた。だが、彼等が一旦彼等の支配を確立してからは、彼等はデモクラシーを以て彼等の新支配形態を合理化し神聖化しジヤスティファイする道具とするに至つた。かくして、かつて反宗教的思想であるところにその一特徴を持つてゐたデモクラシーは、第十九世紀に入つてからは段々と一種の新宗教としての任務を課せられるやうになつた。その下に於て、新生のプロレタリアートは、尙ほ虐げられ、苦しみ抜き、——そして戰はねばならなかつた。それが、血腥きフランス大革命の最も顯著なる歴史的成果だつたのだ。マルクスはいふ。『ブルジョア諸革命は、第十八世紀のそれらの如く、矢次ぎ早やに勝利から勝利に驀進する。その舞臺效果は眼まぐるしさの限りをつくす。人間も事物も烈々たる火焔の輝きの中に映出される。恍惚たる陶醉がその精神だ。しかしそれは短命だ。やがてそれが峠を越すと、それがその颱風時代の諸教訓を學び取る前に、永い二日醉ひが全社會を捉へる。』(『ブリュメール』第一章。)

フランス革命が大風一過するや、直ぐにその永い二日醉ひがフランスの社會を襲ひはじめた。大ナポレオンの帝政(一八〇四年から)、王政復古(一八一五年)、七月革命(一八三〇年)、

二月革命(一八四八年)、ルイ・ナポレオンのクーデター(一八五一年)、それから世界の最初のプロレタリア××――よし不成功に終つたにせよ、マルクスをして樣々の豐富なる教訓を學び取らしめたところの――を代表したパリー・コンミューンに至るまで、フランスの民衆は、事件から事件への渦卷きの中に投込まれた。その間に、ブルジョアジーの地位は、益々優勢に確立されて行き、プロレタリアートは益々生活苦の嵐の中へ驅立てられて行つた。ブルジョアジーの富の殿堂は、勞働者農民の累々たる死屍を超えて、益々高く嚴かに打建てられて行つた。

それでも、時代はデモクラシーの時代であつた！　自由・平等・友愛の標語は、次々と起つた革命の度毎に繰返され、叫び傳へられて行つた。

自由！　『自由は一の偉大なる言葉だ、だが、産業の自由の旗の下に掠奪的戰爭が行はれた。勞働の自由の旗の下に勞働者らが搾取された。』(レーニン『何を爲すべきか。』)

平等！　『搾取者と被搾取者との間の平等があり得るか？』『搾取者は××(デモクラシーについて、換言すれば××形態について言ふのだ)を、被搾取者に對する支配の武器の一に變へる。それ故に、民主××といへどもまた、被搾取者を支配する搾取者の存する限り、不可避的に××者のデモクラシーとして存續するであらう。』(レーニン『背敎者カウツキー』第三章。)

そして友愛！　この美しき言葉――自由と平等との調和、もしくは統一として掲げられたこ



の美しき言葉は、ブルジョア・デモクラットの口からさへもかういふ言葉を發せしめてゐる。『友愛は、賃銀生活階級とブルジョアジーとの恒常的對立の前には、たゞ一片の空語となつた。』(プライス『近代民主制』第一卷四一―四三ページ。)

# 七、ブルジョア國家生活に於ける友愛

だが、階級闘爭の諸相の觀察の上に氷の如く透徹した眼光と焔の如く燃える情熱とを投げたマルクスは、ブルジョアジーの支配下の『友愛』から、遙かに深き意義を汲取つた。今試みにその一例として、彼の初期の論文の中から二三の句を引用して、その點を例證しよう。引用された句を包含する論文は、一八四八年六月二十五日の蜂起に際して倒れた、バリーの勞働階級の戰士たちを記念するために、事件の直後に書かれ、ノイエ・ライニッシェ・ツァイトゥングに發表され、後に至つて更らに『フランスに於ける階級闘爭』の中に收錄されたものである。

『バリーの勞働者たちは優勢なる兵力によつて壓倒された。彼等はその前に徒らに殺されて横はつたのではない。彼等は擊破された。だが彼等の敵たちは克服された。野獸的な强力の眼前の勝利は、二月革命のすべての欺瞞と思ひ上がりとの幻滅を以て贖はれ、全老共和黨の解消を以て贖はれ、フランス國民の二つの國民への、所有者たちの國民と勞働者たちの國民への、分裂を以て贖はれたのだ。三色旗の共和國は、たゞ一色を、擊破されたものゝ色を、血の色を帶びてゐる。それは赤色共和國になつた。』



『フラテルニテ、相對立してその一が他を搾取する二つの階級の間の友愛、そのフラテルニテこそ、二月革命に於て宣せられ、大文字を以てバリーの額の上に、各處の監獄の上に、各處の兵營の上に書き記るされたものだが、――それの眞實の、伴らざる、散文的な表現は、それは――××、その最も恐ろしき姿態に於ける××、勞働と資本との戰ひであつた。この友愛が、六月二十五日の夕べ、プロレタリアートのバリーが燃上がり、血にまみれ、號泣の聲を放ちつゝあつた一方、ブルジョアジーのバリーが華やかに照明されてゐたときに、この友愛がバリー全市の窓といふ窓に照りはえてゐたのだ。

『友愛は、ブルジョアジーの利害關係がプロレタリアートの利害關係と調和し得た間だけ續いた。……』

『二月革命は美事な××であり、一般的同情を以て迎へられた××であつた。といふのは、諸對立は共同に×制に向つて爆發したので、まだ發展するに遑なく、互に調和を保ちつゝ相竝んで眠つてゐたからであり、また、それらの諸對立の背景をなしてゐた社會的闘爭は、たゞ一の浮雲の如き存立を、卽ち空虛なる言葉の上の存立を得てゐたにすぎなかつたからである。六月革命は醜惡なる革命であり、憎むべき革命である。といふのは、空語の代りに實際の利害が入込んで來たからであり、共和國がその醜怪なる頭を覆うてゐた燦めく冠を脫ぎ棄